

個性『ガタキリバ』

プリズ魔X

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

オーズに転生したと思ったらガタキリバコンボ強制なんだけど……

転生したら能力がコントロール出来ないと無限に増えちゃうダメダメ野郎！そんな奴がヒーローを目指す……はず！

こちらはリン・オルタナティブさんの三次創作のリンクでございます。

<https://syosetu.org/novel/2860>

28／

## 目次

入学前のガタキリバ	1
心ガタガタガタキリバ	1
訓練でもガタガタガタキリバ	4
コアメダルがガタガタガタキリバ	6
ウヴァさん召喚ガタキリバ	9
ウヴァさんの1日	12
2人で1人のヴィジランテ	15
考察ガタガタガタキリバ	17
入試でガタガタガタキリバ	20
これでガタガタ！ガタキリバ！	24
転生者の数がガタガタガタキリバ	28
入学した後もガタキリバ	
入学ガタガタガタキリバ	32
個性把握でガタキリバ	37
戦闘訓練でガタキリバ	44
数の暴力！ガタキリバ	50
数の暴力！ガタキリバ	54
後編	
マスコミ突撃ガタキリバ	59
襲撃来てもガタキリバ	
救助訓練でガタキリバ	64
深海からの転生者	70
脳無をボコボコガタキリバ	75
体育祭でレッツラガタキリバ	
追加で編入ガタキリバ	79

特訓と違和感、そしてガタガタガタキリバ	84
選手宣誓ガタキリバ	88
皆で妥協してガタキリバ	92
騎馬戦と最凶パーティ	96
進撃のドレキング	99
「なんだか暇な1回戦	104
準々決勝 シード編	109
準々決勝でガタキリバ	115
準決勝でガタキリバ	119
プロテイヤノ決勝戦	123
表彰式でガタキリバ	126
職場体験でプロキリバ	
ヒーロー名でもガタキリバ	129
宇宙ーキター!!からのソイヤア!……の前に止まるんじゃねえぞ…	133
今度こそ宇宙ーキター!!からのソイヤア!!そして不思議な女の人	138
黒く蝕む外套の噂	141
花咲く狂怖 前編	144
花咲く狂怖 後編	148
夢の支配者の職場体験	
夢の支配者と半冷半熱とヘルフレイム	150
壮絶な親子喧嘩?	153
親子喧嘩終了。再び集いかける家族	156
悪夢 (ナイトメア)・パニック	160

炉心核は砕けない

北斗と碎竜

修行は辛いよどこまでも

混沌とした場とヒーロー殺し

鳴海探偵事務所

ヒーロー殺し

英雄回帰と日常の素晴らしさ

期末試験でもガタキリバ

帰ってきたぞ雄英に

レースも負け無しプトキリバ

通りすがりとプトキリバ

コラボも暴れるガタキリバ

仮面ライダーオーズと仮面ライダーガタキリバ

仮面ライダーガタキリバ、オリジナルと邂逅

情報交換でガタキリバ

錬金術師の脅威

攻めて攻めて攻めまくれ！

反撃の時、そしてお別れ

林間合宿でもガタキリバ

時を駆ける列車、緊急停止

電王と悩める人間

何時でも強くガタキリバ

236

231

229

222

216

212

209

206

202

193

186

182

178

174

172

169

165

## 入学前のガタキリバ 心ガタガタガタキリバ

「仁義父さん！」

「どうした！宇覇！」

「……増えた！」

「増えたア!？」

俺は分倍河原ふばいがわら 宇覇うば。10歳だ。そして転生者だ。ヒロアカ世界に転生したのでとんでもない名前なのは納得ではあるが。

さて、皆気になっているのは俺の個性だろう。聞いて驚くなよ……

『ガタキリバ』だ。

え？それじゃ説明になってないだろう？悪い悪い。それじゃ詳しく説明しよう。

俺の個性、『ガタキリバ』は仮面ライダーオーズのコンボ……まあたぐさんあるオーズの姿の中での1つの姿とだ思えばいい。頭のクワガタホーンは電撃を出して、胴体……というか腕のカマキリソードは高速双剣術、そしてタトバコンボでおなじみのバツタレッグは高い跳躍力を生み出す。これだけならあれ？ただの複合異形型じゃね？つて思うじゃん。ガタキリバはオーズの最強のフォームと呼ばれている。その理由は分身だ。

ガタキリバになったオーズは最大50人まで分身できる。ここま  
でならまだ普通だ。

そしてここからが異常だ。

それぞれが思考して、オリジナルの強さであり、果てには数を維持  
したまま別の姿に変身も可能というチートっぷりだ。

考えてみてほしい。50人が頭から電撃を放ち、腕には鋭い鎌がつ  
いていて、脚で凄まじい跳躍力を叩き出して襲いかかってくる。ガタ  
キリバと相性が良い奴が立ちはだかつたら別の姿に変身して対応と  
いう悪夢のバーゲンセールだ。

……のだが、本編では大量になるCGでの予算圧迫という壁のせ  
いで本編で出てきたのは5本指で数える程。代わりに映画では潤沢  
な予算を使つて大暴れするという、なんとも生々しい理由で不遇なコ  
ンボでもある。

そして俺の個性、『ガタキリバ』が発現した時は生まれた時。つまり  
異形型だ。だが両親は異形型の俺を気味悪がつて唯一の親戚である  
分倍河原 仁……今の俺のオトンに押し付けてどこかに夜逃げして  
しまった。

仁義父さんはちよつとコワモテだけど、根は優しい。俺を育ててい  
る直後にバイク事故を起こして刑務所にぶち込まれたが、個性の『二  
倍』で作られた仁義父さんの分身に警察の監視の中で育てられた。

その後無事に刑期を満了した本体の仁義父さんが育ててきた。分  
身と合意の上だったので原作のように分身のケンカという名のトラ  
ウマイイベントが起きてもない。なので言動も普通だ。

そして仁義父さんは刑務所でヒーローになった方がいいと当時の  
事故の担当をしていたプロヒーロー『ベストジーニスト』に推薦され  
てヒーローを目指し、無事に3年後ヒーロー免許を取得。分裂ヒー  
ロー『バイバイン』になった。ドラ○もんのアレと同じ名前だが、そ  
こは仁義父さんクオリティだ。電話の着信音を屁の音にしてるよう  
な人だからこれでもマシな名前のはず。

「よしー俺ヒーロー科目指すー！」

「おう！頑張れよ！」

さて、そんなこんなで育てられてはや10年。今までできていなかったガタキリバコンボの能力『分身』をようやく使えるようになった。当然目指しているのはヒーロー科だ。

ここから俺のヒーローアカデミアが始まる……はず！



## 訓練でもガタガタガタキリバ

「よし！今日は分身の訓練をするぞ！」

覆面のコスチュームを着た仁義父さんが威勢よくそう叫ぶ。（覆面をつけている理由はベストジーニストにコワモテだからつけた方がいいと言われた為）バイバイン事務所での訓練だ。事務所と言ってもまだ一人ではあるが、仁義父さんはそれなりに名前は知られているのできつと、そのうちサイドキックも来るはず……！

「いいか？俺の場合増やすにはまず、自分を知らなきゃいけない。体の隅々をメジャーで測ってようやく増やせるんだ。大事なのはイメージだ！イメージが曖昧だと個性つてのは上手く使えねえ！」

「なんか無意識に増えられる！」

「よし……って、それはマズイ！無意識にいきなりできるって事はコントロールできていない証拠だぞ！」

イメージ……イメージ……か……そうか！ドラ○もんのバイバインでイメージしよう！

「イメージしながらできた！」

「上出来だ！そうだな……コントロールも兼ねてそのまま分身を維持して俺と組手しよう！」

「押忍！」

「片方は頼んだぜ！俺！」

「あいよ！」

互いの分身が声を掛け合うのと同時に戦いの火蓋が切られる。

「くっえークワガタホーン！」ビリビリビリ！」

片方の宇覇の分身体がクワガタホーンで電撃を放ち、仁の分身と本体をまとめて仕留めようとする。

「甘いわ！メジャー避雷針！」

「メジャー!?道具使うなんて卑怯だぞ?!」

「宇覇の体なんて全身武器みたいなもんじゃねえか！変わんねえよ

！」

「そうだった！」

「さあ！そっちが大層な武器使ってたからこっちは数で対抗させてもらうぜ！無限増殖<sup>サットマンズバレード</sup> 哀れな行進！」

「手加減なしだぜ！」「そうゆう事だ！」「くらえ！」「アンパンチ！」「数には更に上の数で押し切るぜ！」「アンキック！」「ライターキック！」「お前らキックしすぎだろ！俺もするけど！」

「くうううう……多すぎる！」

数が同じなら更に増やせばいいという理論で分身を増やしていく仁。部屋を埋め尽くさんと増える仁の分身に2人の宇覇は次第に押されていく……

「くつそー……そっちが増えるならこっちも増えちやうもんね！」

「こもつと増えるのか!?!」

宇覇の宣言に仁が焦る。仁の個性『二倍』で生み出される物は基本的に『劣化』してしまいコピー元より脆くなる。

無限増殖<sup>サットマンズバレード</sup> 哀れな行進はその弱点を数で補うものであり、カマキリソードでメジャーでの近接攻撃はいなされ、バツタレグで飛び回って攪乱された中、弱点である範囲攻撃のクワガタホーンの電撃に押し返されかねない今でもキツイのに更に増えるというのだ。当然分身も本体も身構える。

「更に分し……うう……!?!」

「大丈夫か宇覇!?!」

分身を増やそうとする宇覇が突然苦しみだして倒れてしまう。近くにいた分身の仁がすぐに駆け寄り、介抱して事務所のベッドに運ぶ。

結局俺はその日目が覚めずに気絶したまま倒れていたようで、その後病院での検診では個性の反動で体がキャパオーバーを起こしたとの事らしい。

まだまだ精進しなければ……!

## コアメダルがガタガタガタキリバ

3年後……

さて、突然で悪いがオーズに出てくるメダルには大きく分けて2種類ある。

1つ目はオーズの変身に使うコアメダル。これはそれぞれの生き物の力をメダルに封じているものであり、1色につき計10枚存在する。俺のガタキリバに変身するにはクワガタメダル、カマキリメダル、バッタメダルの3つが必要だ。尚、分身体のベルトにも何故かコアメダルが挿入されているが、そこは気にしたら負けだ。

このコアメダルがひとつでも欠けると、足りないコアメダルを満たしたいという欲望が生まれて人工生命体のグリードが誕生する。このグリードは滅茶苦茶な強さを誇り、そしてグリードの意思があるコアメダルを破壊されない限り不死身である。

そしてコアメダルは尋常ではない程硬い。全てを無に帰す紫色のコアメダルの力でない限り破壊不可能である。例えオールマイトやオール・フォー・ワンの全力パンチでも傷1つ つけられずに逆に相手が手を痛める。

次にセルメダルの解説。セルメダルはCellという名の通りグリードやグリードの生み出すヤミーの細胞として構成されている。こちらの方ですら数枚でめちゃ速いバイクだの、空間を切り裂く剣だの、クソ強ビームを打ち出す斧だのを動かせる程のパワーを秘めている。それでもコアメダルのパワーと比べたら月とすっぽんだ。

そしてコアメダルとセルメダルなんだが……絶賛体内で増殖中だ。というか体のほとんどがコアメダルとセルメダルになった。今の所コアメダルは3セット……つまり、クワガタ、カマキリ、バッタの3種類が2枚ずつ体内にあり、残りの1セットがベルトに刺さっている。このコアメダルは何故かベルトから抜けない。

先程グリードの説明に不備があった。グリードには『完全体』が存在しており、3種類のコアメダル全てが9枚揃うと完全体となる。こ

の完全体は単純な強さの上昇だが、その上昇幅が凄まじい。意思があるコアメダルが混じったコンボでようやく戦う権利を得られるレベルと言えどそれほど分かるだろう。10枚目のタトバ？あれは例外中の例外だから……

ここから仮説だが、メダルが増えれば増えるほど分身の数が増えるのではと考えた。人間には日々欲望が生まれる。火野映司みたいな無欲で満たされる例外こそあれど、基本的にはそうだ。

最初から分身できなかったのはきつとコアメダルが1セットしか無かったのが理由だろう。そしてコアメダルが何らかの欲望で増殖。本来コアメダルは増殖しないのだが、恐らく俺の個性だから増えるのだろう。一応人工的にコアメダルが作れるのだから個性で体内生成の可能性とゼロではないだろう。

「「はあく……セルメダルうめえ……」」

分身体は本体？の俺のセルメダルを食料にして食費を浮かしている。ポリポリしていてけっこう美味しいんだなコレが。欲望を満たそうとするだけでこんな美味しい食べ物……というかメダルができるのだから無限に増えちゃう。パクパクですわ！

トウワイスみたいにケンカするかもだろうって？みんな自分だから大丈夫。

そして欲望も3人分……つまり、コアメダルの生成速度も上昇する。3セット目のコアメダルが生成されるのが早かった理由はココだろう。でも分身体は三体で打ち止めだ。さすがに部屋が狭くなる。

無限に増やせるセルメダルはともかく、コアメダルは分身の最大数である50セットで打ち止めになるのか、はたまた無限に増えちゃうのか……それは俺にも分からない。

「おい、宇覇！飯だぞー！」

「「はーいー」」

「今日はハンバーグだ……」

「「ハンバーグを3等分……味わいも3等分……でもみんな俺だから

「味わう幸せは3倍だ!」

「なんだよその理論……ところで、もうどこのヒーロー科にするか進路は決めたのか?」

「雄英一択!」

「……そうか!上を目指すのはいい事だ。頑張れよ!」

## ウヴアさん召喚ガタキリバ

コアメダル増殖発覚から2年後。いよいよ俺も受験生だ。

コアメダルは今の所5セット。成長により欲望の種類が増えたのか増殖スピードが凄まじい。

俺達はセルメダルを齧りながらある事を話す。

「なあ……思っただけどさ……」

「どうした？俺……まさか、コアメダル関連か？」

「さすが俺。話が早くて助かるぜ。……今さ、コアメダルが15枚あるじゃん」

「だね。……もしかしてグリードを生み出すの？」

「うん。実験としてね。完全体はかなり強いし、ウヴアさんの性格的にコアメダルとセルメダルさえあげれば満足してくれるから大丈夫かなって」

「そんじゃ分身は一旦解除だね……」

そう言っただけ俺らは分身の数を1度0にして、本体？の俺のみになり、増殖したコアメダルを10枚取り出した。

「えーっと、まずはコアメダル10枚と沢山のセルメダルの塊にして……」

体からセルメダルを大量に出してコアメダルが少しはみ出るように山を作った。

「で、分身体を1人出して……」

分身体を生み出すとすると、山からバツタのコアメダルが飛び出して俺の体内に戻った後分身体が生み出された。

すると、セルメダルの山が蠢き、人型のシルエットを形成し始めて、クワガタの顎の様な角と昆虫に見られる複眼、右手に鉤爪が生えてきて、体全体が昆虫の外骨格のようなもので覆われた人工生命体『ウヴア』が形成された。

『俺は……？』

「はじめまして、ウヴア。俺は君を生み出した分倍河原 宇覇だ」

『分倍河原 宇覇……か。どうやら生み出したというのは本当なんだ

な』

「さて、まずは君の体について説明しなきゃね。まずコアメダルについて……」

『いや、必要ない。感覚的にコアメダルとセルメダルで体が構成されているのが分かる』

「早速で悪いけれど、君がその完全体を維持するためのルールを伝える」

『ルールだと？』

「まず、コアメダルは基本的にそのまま維持する。君の意思があるコアメダルは……クワガタだね。このコアメダルは絶対に君から奪わないと約束しよう。そしてセルメダルは俺の体から生み出されるものを定期的に君に渡す。俺が寝てる時にでも体に手を入れて自分で好きなだけ取ってもいい。君のメリットはこんなもんかな！」

『それがルールを守る場合の俺のメリットだな？』

「その代わり、屑ヤミーとヤミーは俺の許可無しに生み出すのは禁止。約束を破ったらその度に君のコアメダルを3枚奪う。……こんな風にね」

そう言うって宇覇は分身体を更に1人増やしてウヴァの体のコアメダルを回収する。

『む、力が抜ける……成程。確かに約束は破りたくないな……』

宇覇は分身体を再び解除してウヴァを完全体に戻す。

『お前の意思で何時でも俺は消えてしまう……なら従うべきか。よし、その話乗った。コアメダルは守れるし、セルメダルも定期的に増やせるのなら構わない』

「そういえばウヴァは感覚が退化しているんだよね？だったら俺の分身体に憑依するのはどうだ？」

『……しばらく考えさせてくれ。まだこの体について知らない事が多いからな』

「宇覇！そろそろ個性の訓練を……って、そいつは誰だ!？」

『お前は……』

「俺の義父さんの分倍河原 仁だよ。仁義父さん。この人はウヴァ。」

俺の個性で増えたメダルで生み出したんだ。めちやくちや強いんだぜ?。」

「お前の個性は不思議だな……メダルが増えたり体が増えたり、そして今回は命が増えたのか……」

『ここで暮らさせてもらうぞ。仁』

「宇覇の訓練はできるか?最近俺じや相性の問題もあつてなかなか戦いづらくてな……」

『問題ない。戦闘は俺の得意分野だ』

「そんじやウヴァに任せるぞ!ただし!しばらくは俺が見ている中でのみ訓練をやるんだ!」

『了解だ』

「了解だぜ!」



## ウヴァさんの1日

今回はウヴァさんの1日を覗いてみよう……

午前 4時

『ガクタガタガタキリッバ！ガタキリバ！』

『ガクタガタガタキリッバ！ガタキリバ！』

『ガクタガタガタキリッバ！ガタキリバ！』

『ガクタガタガタキリッバ！ガタキリバ！』

※ アラーム音です

「……起きろ、宇覇。朝のランニングの時間だ」

「うーん……」

朝はまず宇覇を起こす所から始まる。本来はグリードなので寝る必要は無いのだが、最近宇覇の分身に憑依する事で五感や感情などが正常になり、非常に満足している。当然寝るが、食に関してはもっぱらセルメダルを齧っている。

ウヴァ憑依ガタキリバの姿はクワガタホーンの角が更に細く鋭くなり、放電の威力上昇、カマキリソードは鎌が鋸のようにギザギザとなり、使用時に1本がパカッと割れて二つに別れるようになり、より一層威力が向上、バッタレッグは足が太くなり、単純な跳躍力上昇、全体のボディカラーは深緑よりも更に黒に近い緑となった。イメージとしてはこれぐらいだ。ウヴァ入りガタキリバ

「うーん……おはようウヴァ。ランニングだったね」

起きた宇覇はセルメダルを身体から取り出して齧りながらウヴァにセルメダルを投げて渡す。ウヴァは受け取ったセルメダルを少し眺めた後齧る。

「今日は……タカのセルメダルか。虫系ではないがまあいい。さっさと行くぞ」

「もちろんー！」

余談だが、宇覇達曰く、セルメダルの種類によって味が違うらしいぞ！ウヴァの好物は虫系だ！宇覇はなんでも美味しく食べるぞ！

午前 6時

「ランニング終わり！ただいま仁義父さん！」

「おはよう宇覇！ウヴァー！」

「宇覇、そろそろランニングコースを伸ばすぞ。タイムが縮まってきたから頃合だろう」

「どんどん成長していくな……ああそうだ。とうとうこのバイバイン事務所にサイドキックが来る事になったんだ！」

「ほんと!?何処出身!？」

「聞いて驚くなよ……土傑出身の奴だ！」

「土傑!?ホントに!？」

「しかも第1希望でココになんだ！いや、俺も有名になったもんだな！」

「ここら辺だとファットガム事務所に取られちゃうからね。……このたこ焼き美味しい！」

「タコか……イナゴの佃煮とかがいいんだが……」

「ウヴァって昆虫食べるの好きだよな……」

「ヒアリだろうが食えるぞ。グリードの耐久力を舐めるなよ?」

「それは俺のボディに影響ありそうだからやめ……いや、セルメダル食べれる時点でなんか大丈夫に思えてきたな……」

朝食は昨日の余り物であるたこ焼きを食べて……

午後 2時

「踏み込みが甘い！それでは体重が乗っていないぞ！」

「俺は手数で押したいの！」

「ヘナチヨコ威力の斬撃を積み重ねる前にそっちがやられるだろうが！」

「それもそうか！」

宇覇と組手をして宇覇を鍛え……

午後 6時

「……ヘドロ事件、か……」

「えーっと、因数分解は……っと、今クワガタコアが増えたな……」

夕方からはネットサーフィンで情報を集め、夕飯を食べて床に就く。

これをここ最近繰り返している。少しずつ宇覇も強くなっているが、ウヴァが生まれてからはさらに成長が加速している。

雄英受験まで、あと10ヶ月……

## 2人で1人のヴィジランテ

俺たちが留守番中に起きた事を話そう。俺たちがネットサーフィンをしている時……

「なあウヴァ。……これどうする?」

「知るか。放っておこう」

「うるせえ!てめえら纏めてぶっ殺してやる!」

「縄で縛っている。動ける訳無いだろう……」

強盗が来たので、逆にボコボコにして縄で拘束した。

「後悔するなよ……!」

「……警察が来たな。さっさと突き出すとするか……」

「それにしても用意周到だったねコイツ……事務所のプロヒーローが1人もいない時を狙った強盗……前から計画していたみたいだね……?」

「……」

「ま、沈黙は肯定と受け取るね?」

「警察の者です!ヴィラン逮捕の御協力ありがとうございます!」

俺たちが警察に強盗を渡そうとした瞬間、強盗が個性を使って身体中から刃をせり出させて縄を切断。素早く警察の1人の首に腕を巻き付けて脅迫してきた。警察官も自分が人質になるのは予想していなかったのか、反応が遅れてしまった。

「動くなよ!俺がいいと言うまでだ。車と金を用意しろ……そしたらコイツを解放させてやる!」

「ここは俺が!ダメだウヴァ。逆にあの人を危険に陥らせる!……チツ!」

電撃で対応しようとするウヴァを俺が止める。ウヴァの高出力の電撃だと、人質にまで被害が及び、最悪死人が出る。

不運な事に近場にプロヒーローもいなく、最も近い場所にいるファットガムも先程別のヴィラン相手に脂肪を消費しすぎてただの男になっている。なんとも間が悪い。

まさに絶対絶命の状況。そこに一陣の風が吹く。

サイクロン！ジョーカー！

マキシマムドライブ！

聞き覚えのある電子音声が聞こえたと思ったら、空から身体が線対称に真つ二つになった仮面ライダーが飛んできた。

そのまま強盗に二つのキックが炸裂。強盗は気絶してしまった。

いつの間にか身体がくっついていて、その場を去ろうとする仮面ライダーに俺は問う。

「なあ！お前は生まれ変わりって信じるか!？」

ライダーはしばしの沈黙の後にこう答えて今度こそ去っていった。

『……………信じるかな』

ビュオオオオオオオオオ!!

ライダーの緑色の半身から旋風が突然巻き起こり、たまらず閉じていた目を開けるとライダーは消えていた。

(あれは……………間違いない！俺と同じ転生者だ！しかもW！仮面ライダーW！)

思わぬ所でお仲間に出会った俺はこの先どうするかを悩んでいた。仮面ライダーW。彼のような人物が他にいる可能性を考えてこれからは動かねばならない。なぜなら、もう俺の手によって原作は壊れているのだから……………

## 考察ガタガタガタキリバ

「……どうした、クワガタメダルを眺めて何になる。セルメダルが増える訳でもないだろうが……」

「いやね？どうやってたら楽にコアメダルを増やせるかなーって。今の所増える条件すら明確になつてないじゃん？それに、増えすぎても邪魔だし……」

「確かに、最近は1セットが1週間で出来たが、明確な増え方はまだ分かっていないな……俺と同じグリードが生まれる可能性も潰したい。この世がグリードで埋め尽くされるのは不味いからな……」

「大量の完全体同士がケンカを起こしても問題だしねえ……」

俺達はコアメダルの増える条件を調べる為に考察をしていた。

「確かセルメダルは欲望で増えるんだよね。どんな些細な欲望にでも反応して増殖するから、他人の欲望まで吸い上げて新しいセルメダルになる」

「ああ。だがコアメダルはヤミーの生成などでは生まれない。……考えるとすれば、宇覇にしか無い欲望が原因か？」

「俺にしか無い欲望……」

「宇覇！ウヴァ！飯だぞ！」

「はーい！」

「飯か……鳥は勘弁してくれよ……」

「ウヴァは鳥肉苦手だよね……」

「ああ。何故だか分からんが苦手なんだ……」

「今日のイチオシは数の子だ！ちようど安くてな！せっかくだから買ってみた！」

「数の子か……そうか！」

「どうした？宇覇。なんか悩んでたのか？」

「いや、引つかかっていた事が解消されたよ！ありがとう仁義父さん！」

「？ そうか。まあ悩みが解消されたならいいか！」

（数の子……！ そういう事か！）

事情を知らない仁は怪訝な顔をしていたが、ウヴァはその意味を理解したようだ。

### 就寝前

「ウヴァ、いつもの情報収集も終わったし、コアメダルの増殖条件の考察の続きをしようか！」

「……増えたいという欲望か？」

「いや！もつとアバウトなものだと思う。……きつと必要なのは強くなりたいたい、勝ちたいという欲望なんだ！」

「強くなりたいたいという欲望……何故だ？」

「俺ってウヴァに負けっぱなしでしょ？仁義父さんの時はほぼ互角だったけど、ウヴァは圧倒的な格上でしょ？ウヴァを生み出してからコアメダルが増えやすくなった理由にはそれしかない！」

「まあ一理あるな……なら宇覇を叩きのめせばいいのか。明日は試しにランニングを削って組手を増やしてみよう。それで比較できるかもしれない」

「さあ！全力で来い！」

「クワガタホーン！」ビリビリビリ！

「甘い！グリードホーン！」ビリビリビリビリ！

宇覇とウヴァの放電がぶつかり合う。最初こそ拮抗していたが、次第にウヴァの放電が押し始める。

「カマキリソード！」 ジャキン！

「グリードダガー！」 シャキン！

「ぐううううう!!」 ギリ………!!

「パワーでも負ける気は無い！」 グググ………

互いの得物を使い白兵戦にもつれ込むが、こちらでもやはりウヴァが一枚上手だ。姿の性能差もあるが、やはりグリードの性能が凄まじい。

「負けねえ！絶対勝つ！」

「闘志が足りないぞ！もっと戦いにのめり込め！」

後日コアメダルは5枚増えて、2セット分用意出来た。

雄英受験まで、あと数日………



## 入試でガタガタガタキリバ

雄英高校 受験会場

今日はいよいよ入試の日だ。ウヴァと共に受験会場へと向かっている。雄英側には既にウヴァが個性だということを伝えていないから問題ない。

ウヴァも実技で暴れ放題ということ俄然やる気が出ているようだ。

「ウヴァ、遂に実技だな！」

「ああ。遂に全力で暴れられる。コアメダルもギリギリ1セット増えたからな。やはり数日前の追い込みが効いたようだ」

「これで俺が4人になれる！そんでウヴァも含めて5人だね！」

「ふむ。そろそろ黙っておこう。時間が近い」

『受験生のリスナー！今日は俺のライブに来てくれてありがとうー!!  
Everyday Say Hey?』

シーーン……………

『こいつはシヴィーラー！』

どうやら派手なトサカのような髪型の男が司会を務めるようだ。やたらハイテンションなのは気の所為ではないだろう。

『これから実技試験の内容を説明するぜ！Are you ready?』

「やかましい…………もう少し何とかならないのか…………」

「仕方ないよ……分身増やしまくった仁義父さんだと思えばいい」  
「それもそうだな……」

『入試要項通り、リスナーにはこの後10分間の「模擬市街地演習」  
を行ってもらうぜ！持ち込みは自由、プレゼン後は各自指定の演習会  
場へ向かってくれよな！』

『演習場には仮想ヴィランを三種・多数配置してあり、それぞれの「攻  
略難易度」に応じてポイントを設けてある。各々なりの個性で仮想  
ヴィランを行動不能にし、ポイントを稼ぐのがリスナーの目的だ！』  
『もちろん！他人の妨害などのアンチヒーローな行為はご法度だぜ  
!?!』

「質問よろしいでしょうか！」

司会が一通り説明を終えると、1人のメガネをかけた真面目そうな  
受験生が質問しようとする。

『OK!』

「配布されたパンフレットには四種の仮想敵が記載されています！も  
しこれが誤載であれば雄英にとつて恥ずべき痴態！どうかご説明を  
！」

『オーケーオーケー、受験番号7111くん、ナイスなお便りサン  
キューな！四種目のヴィランはOP、そいつは言わばお邪魔虫さ！ア  
レ！マリオのドッスンみたいに思えばいいぜ！ようは各会場に一体  
所狭しと大暴れしている「ギミック」よ。倒せないことはないが倒  
しても意味はない。リスナーにはうまく避けることをお勧めするぜ  
?』

「ありがとうございます！失礼いたしました！……そしてその君達  
！」

そう言う俺達の周りは指名されて……

「そのコスプレのような衣装はなんだ！ここは試験会場だぞ?!制服で

来ないとは何事なんだ！そして緑髪の君！先程からボソボソと……  
気が散る！物見遊山のつもりなら、即刻！ここから立ち去りたまえ  
！」

「ご、ごめんなさい……」

緑髪の少年はごめんなさいと謝るが、俺達は違う。

「あのなあ……これは俺らの身体！生まれたままのボディ！コスプレって言われるのは心外だぞ！」

「なっ!?君達は裸で受験を受けているというのか!?もつとダメだろう  
！」

「なんだア? テメエ……今テメエは全異形型を敵に回したぞ! この俺のボディを侮辱するというのはそういう事だ! それに……」

「この姿で制服着ていたらダサイだろうが! 例えるならオールマイトがセーラー服着てヒーロー活動するぐらいダサイ!」

俺のオールマイトのくだりに司会を含む殆どの受験生が吹き出してしまった。特に緑髪の少年はもう呼吸困難になりかけてる。

「ふふふ……あなた、面白いこと言うのね……?」

「んあ?……お、おう……」

俺が横を向くと、肩まではあるだろう青い長髪に青い目、ちよこんとついているケモノミミの女性が独特な顔をしてクスリと笑っていたのが見えた。

『俺からは以上だ。最後にリスナーへ我が校校訓をプレゼントしよう!  
!かの英雄ナポレオンⅡボナパルトは言った…… 真の英雄とは人生の不幸を乗り越えていく者』と!』

『更に向こうへ! Plus ultra!』

### 演習会場C

「よし、暴れるぞウヴァ!俺!」

「相手はロボットか……つまらん……」

「おや?また会いましたね……」

「ん?あんたはさっきの……」

「……そろそろ準備しておいた方がいいのでは？話は実技が終わった後にもいいかと」

「それもそうだな！よし、ウヴァ！……狩りの時間だ！」

これでガタガタ！ガタキリバ！

「はい、スタート！どうしたあ!? 実戦じゃカウントなんざねえんだよ！もう4人は向かってるぞ!? 走れ走れえ！賽は投げられてんぞ!!?」  
トサカ男の言う通り、俺とウヴァ、先程の青髪の女性、そして何処かに反応出来た人物がいるようだ。もしや……いや、今はそれを考える時間じゃない。

俺は開けた所で立ち止まり、どうせならとオースキャナーを取り出して……

《left》キンツ！ 《/left》

キンツ！

キンツ！

「……分身！」

クワガタ！カマキリ！バツタ！

ガタガタガタキリバ！ガタキリバ！

「ブレンチシエイド！」

「よう！暴られるぜ！あつちは頼んだぜ俺ら！」

「じゃあ俺らはあつちだな！」

「ウヴァ！中央は任せるぜ！」

「任せる。中央は仕切っている壁を気にせず暴られるいい所かもしれない」

俺達は左右に2人1組で別れて中央をウヴァに任せる布陣で挑むことにした。

「おっ！早速発見だ！」

『標的補足……ブツコロス!!』

「口悪いね……クワガタホーン！」ビリビリビリ！

『ガガガ……!』

分身の1人がクワガタホーンの電撃で1Pt 仮想敵の回路を

ショートさせて倒す。

「……よし！更に二手に別れて効率よく倒そう！」

「思ったよりも弱いしな！」

次々と仮想敵が倒されていく中、ウヴァはつまらなそうに片手でP\_t仮想敵をスクラップに変えていた。

ゴシヤー！

「……弱い！弱すぎる！まだそこらのチンピラの方がマシだぞ！」

苛立つウヴァは腹いせにまとまっていた仮想敵を薙ぎ払うことでストレス解消をしようとしたが、それでもまだ満たされない。しかし、ウヴァは致命的なミスをしてしまった。攻撃の余波で瓦礫や仮想敵のパーツの雨を作ってしまった、他の受験生が瓦礫に巻き込まれそうになった。

アンチヒーローな行為は不味いのを覚えていたウヴァは救助しようとする。すると、ウヴァの後ろから桃色のベッドが飛んできて落ちてくる瓦礫やスクラップの雨から受験生を回収。ウヴァの近くに運んだ。

「あらあら……また出会ってしまいましたね……」

「貴様は……」

「突然で悪いのですが、協力はどうか？あなたが纏めて仮想敵を倒し、私が回収する。そうすればあなたは全力で暴れられる。悪い話ではないはずですよ。……どうするかはあなたが決めることです」

「……勝手にやっつてろ。ただし、しくじるなよ」

「あらあら……厳しいですね」

「そんなに人助けをしたいならついてこい。俺が山ほど作ってやる」

「そういうばお互い名前を聞き忘れていましたね。私は甘夢 獏。個性は……『獏』です」

「俺はウヴァ。……俺とそっくりな奴がいただろう？そいつの個性だ」

「さて、自己紹介も済んだことですし連携の時間ですね！」  
「フーン！」

### モニタールーム

暗い部屋の中に何人かの教師が座って画面を見ていた。

『この入試はヴィランの総数も配置も伝えてない』

『限られた時間と広大な敷地：そこからあぶりだされるのさ』

『状況を早く把握する、情報力』

『遅れて登場じゃ話にならない、機動力』

『どんな状況でも冷静でいられる、判断力』

『そして純然たる戦闘力…』

『市井の平和を守る為の基礎能力がP数という形でね』

『今年はなかなか豊作じゃない？』

『いやーまだわからんよ』

『真価が問われるのは……』

『これからさ!!』

ネズミのような人物があるボタンを押す。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ…

「！あれがOPtか！全員集合！コイツ倒して仁義父さんに自慢するぞー！」

遠巻きにOPtを見ていた宇覇はすぐに向かった。

バツアレッグの機動力は非常に優秀なのですぐに集合出来た。

ちようどウヴァも同じ所にいるようだ。

「大方あれを倒すとか言うのだろう？俺は他を稼ぐ。あれを倒してもセルメダル1つ手に入らない」

そう言つてウヴァは何処かへと仮想敵を探しに行つた。

「……えつと、ウヴァさんの主……でいいんですよね？ 私は甘夢 獏。先程までウヴァさんと共闘していました。……このOPt、私と協力して倒しませんか？」

「うーん……まあいいよ。俺の場合は自己満足で倒すけど、君はなんか理由があるんでしょ？」

「……レスキューポイントはご存知で？」

「……お仲間さんつて訳か！ ま、とりあえずこの鉄クズを倒そうぜ？」

「同感です。さっさと倒して終わらせますか。下敷きになってしまひそうな人達は私が助けるので思いつきりやっちゃってください！」

「さて……行くぞ俺達」

「「おう！」」

スキヤニンググチャージ！ スキヤニンググチャージ！ スキヤニンググチャージ！ スキヤニンググチャージ！

「「ハアアアアア……」」

『セイヤアアア!!』

ドオオオオオオン……

『しゅーりょーりょー……』

OPtが宇覇達のキックで爆散したと同時にトサカ男の終了を告げる声が聞こえた……



## 転生者の数がガタガタガタキリバ

「ふう……被害ゼロです。お疲れ様でした！」

「……甘夢さんは転生者なんだよね？あ、俺はこの世界の知識……つまり原作知識はわりとあるぞ」

「はい。それで合っています。あと、先程ウヴァさんには私の個性を獏だと説明しましたが、厳密には少し違います。本当の個性名は『ドレミー・スイート』。東方Projectのキャラのドレミー・スイートが出来ることなら大抵の事はできます。原作知識は体育祭決勝までですかね……」

「……君は原作をどうしたい？俺はもうトウワイスっていうヴィランになるはずだった人物をヒーローに変えちまってる。でも出来ることなら壊しすぎないようにしたい。オールマイトが殺されたりみたいな事態は防ぎたいんだよね……」

「私も概ねそのような感じですね。まあお互い合格でしょうし……つと、そろそろリカバリーガールが来る頃でしょう。この話の続きは雄英で……」

「ああ！またな！」

### 会議室

「今年は豊作だったね！」

「注目すべきなのは1位、2位、3位、4位、そして9位でしょうか。」  
「まずは2位の子ですね。レスキューポイント0でここまで稼ぐのは

相当なタフネスを持っているのでしよう。ただ、言動に問題ありません。救助者を無視したり、相手に暴言を吐いたりするのは課題かと」「まあそこはこちらで改善させればいい。俺が気になるのは9位ですかね」

無精髭が生えている男が気になる人物を言う。

「自分はOPtだけ破壊してロボロボの状態そのまま墜落。他の受験生に助けられてレスキューポイントのみで合格……」

「こいつがOPtをワンパンした時は思わずYEAH——！って叫んじゃったよー！」

「マイクさんうるさいです……僕が気になるのは4位の子ですね。内容が殆どレスキューポイントで、仮想敵には目もくれていませんでした。余程のお人好しなのでしょうか……」

宇宙服のようなものを着ている人物がそう評する。

「僕が気になるのは3位の子なのさーいやー！あのツヤツヤの甲殻！素晴らしいね！僕もあの輝きは見習いたいのださー！」

「校長、それ評価と別の話じゃないですか……」

校長と呼ばれている人物がなんか場違いなことを話し……

「……ヤハリ、気ニナルノハ1位ノヤツダナ。圧倒的ダ」

「分倍河原 宇覇。個性名『ガタキリバ』ですか。頭のクワガタホーンは電撃を放ち、腕のカマキリソードで敵を切り刻み、脚のバツタレッグで機動力も高い。ここまでは強めの異形型ですが……」

「人口生命体『グリード』であるウヴァの使役、更に分身と体内に生成されるセルメダルの捕食……なんでもありな個性ですね……」

「何よりも恐ろしいのはこれらにひとつもデメリットが無い事ですね」

「しかもセルメダルは膨大なエネルギーを生み出し、コアメダルとやらは破壊不可能と来た。……今年からは無理を言ってA組B組共に22人にしたけど、A組に行かせたい子が多すぎる。どうするか……」

「……この宇覇と甘夢は俺にやらせてくれませんか？」

「イレイザー！この2人は異形型だろ!?お前の抹消が効かないじゃないか！」

「捕縛武器で何とかする。それに、この口田 甲司と心操 人使はブラドの方が適任だろう」

「ふむ……親によると口田は引込み思案で心操は個性にコンプレックスを持つているのか……よし！この二人はB組が引き受けよう！」  
「あ、そういえばオールマイト、この1位のリスナーが自分が制服着るとかオールマイトがセーラー服着てヒーロー活動するぐらいださいつて言ってたぜ！」

「What!？」

「「ふっ！」「」」

「……おほん！さて、次は推薦の方を見ようか！」

「……宇覇！遂に届いたぞ！」

「……封筒?……！雄英からだ！」

「さつさと開けるぞ。どうせ合格に決まっている」

そう言っただけでウヴァは俺から封筒をひたたくてビリビリと破いた。  
すると、中からプロジェクターが出てきてホログラムが投影され  
……

『私が投影されたア!』

「……オールマイトか」

「うん、オールマイトだね」

「いや反応薄っ!?もつと驚けよ!」

オールマイトにあまり興味が無いウヴァ、そもそもオールマイトが教師になるのを知っていた宇覇。その2人を仁が見て、余りにも淡泊な反応だったので、2人はもう少し驚けとツツコミを入れる。

『H A H A H A!驚いているかな?諸々手続きに時間かかって連絡取れなくてね、サプライズさ!いやすまない。実は私がこの街に来たのは他でもない!雄英に勤めることになったからなんだ!さて!早速本題に入ろっか!』

『まずは筆記!殆どの教科で満点だ!君天才すぎないかい!?他の子の点数はまだ見ていないけど間違いなく1位だよ!』

「そりゃ他人の3倍の効率で勉強できるからね……」

「宇覇なら当たり前だな!」

宇覇が高得点のカラクリを独り言で言い、仁が誇らしそうに独りで自慢の息子だと言う。

『続いて実技だ!敵ポイント99Pt!この時点で首席合格なんだが……』

『ヒーローってのはただ敵をぶつ倒せばそれでいい訳じゃない!他にも採点基準があるぜ!』

『その名も!レスキューポイント!』

『分倍河原少年のレスキューポイントは20Pt!敵ポイントと合わせて合計119Ptで今度こそ確実に首席合格だ!……ようこそ!』

明日からここが君のヒーローアカデミアさ!』

「ふん。当然だな」

「まあ宇覇なら首席だつて信じてたぜ!」

「……よっつしやあああ!!」

遂に明日から俺のヒーローアカデミアが始まるんだ!

……よし!とりあえず寝よう!寝て英気を養う!まずはそれからだ!

入学した後もガタキリバ  
入学ガタガタガタキリバ

『宇覇！ハンカチと弁当は持ったか？』

「もちろん！……正直制服がヤだけど……まあ仕方ない！」

「はつきり言ってださいな……」

大阪から通うのは無理な為、アパートに引っ越した俺は特注の制服を着て電話越しに仁義父さんと話していた。……おいウヴァ、聞こえてるぞ。

『……頑張れよ！宇覇！お前は自慢の息子だ！義理だとしてもだ！』

「……ありがとう！行ってくる！」

俺は電話を切って雄英へと向かった。ライドベンダーが欲しいけど、ないものねだりしてもしょうがないから徒歩で行くしかない。

俺達がアパートの階段を降りていると、甘夢さんにバッタリと会った。

「おや？どうやら同じアパートのようでしたね。これからよろしくお願ひしますね……？」

「もちろん！……折角だし一緒に行くか！」

「ええ。……ウヴァさんにはアレは話さないのでですか？」

甘夢さんがヒソヒソと転生者について明かすか聞いてくる。

いつまでも隠し通せる可能性ははつきり言って無い。ゼロだ。この際言ってしまうおう。

「なあウヴァ。……実は俺って転生者なん「知ってたぞ？」……え？」

「俺のコアは元々はお前の体の一部だ。当然生まれる前までの記憶は共有されている」

「じゃああの時セルメダルとかについて知ってたのも……」

「全部記憶にあっただけに過ぎん。だからオーズについても原作知識とやらも知っている。今まで黙っていてすまなかったな」

ウヴァが記憶の共有についてカミングアウトをして、宇覇は酷く驚いた。そりやそうだ。今まで必死に悟られまいと隠していたのだから

ら。

「あらあら……じゃあ私が転生者なのも伝えるべきですね。私の本当の個性はドレミー・スイート。とあるゲームに登場するキャラの事なら大抵の事はできます」

「じゃあ甘夢という名字は……」

「ドリームとスイートが日本語になって名字になっています。ドレミーと呼んでも構いませんよ?」

甘夢は独特な表情をしながら自分のニックネームを提案する。

「じゃあ甘夢さんじゃなんか呼びづらいしドレミーって呼ぼうかな。それでドレミー、最初にやるのはやっぱり……」

「ワンフォーオール継承者の緑谷さんのパワーアップですね。仮にも主人公なんですから強いに越したことはないですから……それ以前に私達もA組だといいいのですが……」

「一応今年は1クラス22人で募集されたから可能性としては高いけど、確実では無いからね……」

「プレゼント・マイクの試験開始の時の言葉からして恐らく転生者か、少なくとも原作には居ない存在があともう1人いるのは確実ですね。そちらも警戒するべきかと」

「……転生者と言えば、仮面ライダーWも注意だな。いまいち得体がしれん。ヴィジランテなのは判明しているのだが、行動する理由が掴めないのがな……」

3人で議論を交わしていると、雄英の校門が見えてきた。受験の時も見たがやはりデカイ。お金は一体どこから出てくるのか疑問だ。これを国立というのは無理があるだろう。あんなポンポン物壊したら税金なんてすぐに吹っ飛ぶぞ普通。いや、そこは個性で何とかしてるのか? まあいいか。

「……どうやら私達もA組ですね。しかし、口田さんがいません。その代わりに破巖 碎拳という人物が入っていて、B組に口田さんが

移っているようです。……！　どうやら心操さんも入ったようですね。定員が増えたからか、第三者が手を加えたのか……む、うめぼな梅花 せいいち誠一という人物がB組に入っていますね。こちらも要注意かと」

ドレミーがスラスラとクラスの振り分けを読み上げて俺達に伝える。無事にA組に入れたようだが、何人か原作に存在しない人物がヒーロー科に入っているようだ。

「……とりあえずA組に向かいますか。遅刻したらアレに除籍されかねませんし」

「……そういえばそうだった。急ぐか」

俺達はA組の5mはある扉に手を掛けて開いた。そこから見えたのは……

「机に足をかけるんじゃない！　雄英の先輩方や机の製作者達に申し訳ないとおもわないのか!?!」

「あ、あ、あ、!?!　思わねえよ！　テメエどこ中だ端役が！」

(……原作通りだな(ですな)。)

脚がエンジンになっている飯田　天哉と、ウニのような髪型の爆豪　勝己が原作通りに口論に発展していた。

「おっ！おめえらもA組か？」

声がる方向に振り向くと、ハンバーグのようにブ厚いリーゼントが特徴の身長180cmほどのがっちりとした体格の男が立っていた。

「いやー、ちょっと迷子になっちゃってな！あ、俺は破巖　碎拳！個性は『碎竜』だ！ちょっと変わったトカゲになるぞ！」

「俺は分倍河原　宇霸！個性は『ガタキリバ』で、色々できるぞ！よろしくー！」

「分倍河原……個性はガタキリバ……よし覚えた！おう！よろしくな、宇霸！」

「(もしや彼も……)　私は甘夢　獏。個性は『獏』です。ドレミーと呼

んでも構いませんよ。よろしく願います」

「よろしくなドレミーちゃん!……獺ってどんな生き物なんだ?」

「獺は空想上の生き物ですね。悪夢を好んで食べます。……私も悪夢、大好物なんですよ……」

「すげえな!チビ達がうなされてもあんたが居れば1発で解決って訳か!」

「そういうことです。ふふふ……」

「お友達ごっこがしたいなら他所へ行け。ここは……ヒーロー科だぞ」

((なんかいる!))

((やっぱり寝袋なんだな(ですね。))

「……なんかおる!?!」

「……はい静かになるまで8秒かかりました。時間は有限…君達は合理性に欠けるね」

(開口一番コレだからなあ……)

10秒チャージを一瞬で啜ってA組の担任……相澤 消太はそう言って自己紹介を始める。

「担任の相澤 消太だ。よろしくね」

((この姿で担任!?!))

「質問よろしいでしょうか!」

「却下。早速だがこれ着てグラウンドに集合な」

そう言っただけの相澤先生は寝袋からジャージを取り出してそう言う。

「あ、俺はジャージがかえって邪魔なんで着なくてもいいですか?」

「構わん」

「……お前ら、2度も言わせるなよ?ジャージに着替えてグラウンドに集合。はい、駆け足」

相澤先生の言葉にドレミーとウヴァ以外は慌ただしく更衣室に着替えに向かった。

「分倍河原、ウヴァ、ついてこい。その方が合理的だ」



「分かりました。相澤先生。……なんならグラウンドまで抱えて運び  
ましょうか？」

「助かる。最近寝不足でな……」

俺は担任を背負いながらグラウンドへ向かった。この人ストイック  
すぎるんよ……

## 個性把握でガタキリバ

グラウンド

「個性把握テストオオオ!?」

「入学式は!? ガイダンスは!?!」

丸顔のうららかそうな女の子の麗日お茶子が相澤にそう聞いてくる。

「そんな悠長な事はやってられん。さつきも言っただろ? 時間は有限だ。それに、雄英の校風は『自由』だ。入学式を踏み倒してもなんら問題はない」

だが、それを相澤は一蹴し、中学時代の宇覇のソフトボール投げの記録を聞いた。

「入試の首席は分倍河原だったな。中学の時の個性ナシでのソフトボール投げ、何mだった」

「俺は異形型なんであんまり参考にはなりませんよ?」

「構わん。言え」

「105mです」

「105!?!」

「……本当か?」

流星の相澤もこの桁違いな記録に本当なのかと再び聞いてしまう。  
「……とりあえず個性アリで投げてみる」

持ち直した相澤は地球の赤道のように一直線に中央に装置のついたソフトボールを宇覇に渡した。

「……スキヤニングチャージ!」

スキヤニングチャージ!

宇覇はオースキヤナーを取り出してベルトのメダルを読み込み、頭の角にボールをはめ込んだ。宇覇のガタキリバは分身無しで単体のスキヤニングチャージをした場合は身体能力などが大幅向上するのだ!

「はああああああ……ハア!」

キーーーーーン!!

宇覇はクワガタホーンの放電で擬似的なレールガンを作り出してソフトボールを射出。ソフトボールは赤熱しながら超音速で飛んでいった。

「記録……計測不能。恐らく摩擦熱でボールが消えたな。まずは自分の限界を知ること。それがヒーローの素地を形成する合理的手段の第1歩だ。」

「すげえええ!!」

「計測不能ってマジかよ!？」

「個性全力で使っていいんだ!流石ヒーロー科!」

「なにこれ!面白そう!」

「……面白そう、ね。お前ら、そんな気持ちでヒーロー科に在籍するつもりか?よし!トータル成績が最下位の者は見込み無しとして除籍処分しよう」

「「……はああああ!?!」」

「生徒の如何は先生の自由。ようこそ、これが雄英高校ヒーロー科だ」  
そう言つて相澤先生が髪をかきあげてニヤリと笑う。パツと見だと犯罪者にも見える。

「待ってください!初日からそうなんて、そんなの理不尽すぎます!」  
そう麗日が抗議するが……

「自然災害、大事故、そして身勝手なヴィランたち、それらのいつどこから来るかわからない厄災……」

「世界は理不尽にまみれてる。そういうピンチを覆していくのがヒーロー。放課後マックで談笑したかったならお生憎様。……そんな奴はヒーロー科には不要だ」

「これから三年間、我々雄英は全力で君たちに苦難を与え続ける。さらに向こうへPlus ultraさ。……全力で乗り越えて来い!」

「あ、分倍河原。お前とウヴァは別々に計測するぞ。……サボるなよ?ウヴァ」

「言われるまでもない事だ。俺をなんだと思っ……」

「いいからやるぞウヴァ。まずは……俺は50m走だな」  
「俺とやるのは……碎拳か！」

「お！宇覇とやるのか！よろしくな！」

「よーい……」

「……」グググ……

「竜人形態……！」

宇覇は足のバネを溜め、碎拳は体を変化させて全身を黒曜甲で覆い『竜人形態』となった。

「スタート！」

「はっ！」ビュン！

「だりやああああ!!」ドドドドドド……!!

「……記録、分倍河原が1秒3、破巖が2秒9」

「負けた……！瞬発力には自信があつたんだがなあ……」

「バッタの跳躍力を舐めないでほしいな！」

ドレミーが走る所を見ると、ベッドに乗って飛んで2秒6を叩き出していた。ドレミーが想像した物を扱えるとはいえ速すぎる……

## 握力

「……よし！」

宇覇は少し考えた後、分身を出して2人で握った。

「「増えた!?!」」

「「せーのっ!」」

ベギツ！

「「あっ」」

「「折れた!?!」」

「握力には自信があつたんだが……」

「先生、計測不能でいいですか？」

「計測不能な。あ、握力計は予備が大量にあるから弁償しなくて構わん」

ドレミーと碎拳は普通に握り潰してた。あいつらも異形型なんだ

よな……

なんか俺らが入ったせいかな異形型の割合高くないか？

走り幅跳び

「海へ！ピョーーン!!」

（（何故海……？））

（よる○濱○さんのネタですか……）

「記録、200m。次は破巖だ」

「ジャンピング土下座！」

（（また変な掛け声！））

記録 103m

「次、甘夢だ」

「どじやああん!!」

ドレミーはどこからか風船を3つ取り出してフワフワと浮いて  
ずっと飛び続ける。

「……そのアイテムチョイスは何とかならんのか？」

「これが私の最善手ですから……ふふふ……」

「……無限な」

「無限が出たぞ!？」

「でも絵面がシユール……」

反復横跳び

「分身！」

「よう俺、反復横跳びだな？」

「俺らの得意分野だな！」

「数の暴力と質の暴力を両立した俺らなら！」

個性で高性能な体のパーツを生み出せる障子 目蔵に計測しても

らう。

「『無敵だ！』」

「……ダメです。1人を追いかけるだけでもギリギリ見えるのがやつとです」

「そうか。計測不能な」

碎拳は反復横跳びは苦手なのかあまり成績は振るわなかったが、ドレミーはハンモックでボヨンボヨンと跳ねて好成绩を出していた。

#### 長座体前屈

「……縦伸びガタガタガタキリバー！」

「いやそんなんアリアカよ!？」

分身体を連結させて記録4倍で200cmだ！

碎拳は体が硬めなのか40cmで、ドレミーは勝手に動く油圧ジャッキを使って無限を出していた。本当になんでもありだなドレミー。そしてその変な表情はなんなんだ……？

#### 上体起こし

4人でやって記録も4倍。という訳で記録は180回だ。

ドレミーと碎拳は尻尾が生えているので同じく尻尾が生えている尾白と上位争いをしていた。勝ったのは尾白だった。個性尻尾の面目躍如だ。

#### ソフトボール投げ

俺は既に計測不能を出しているので見学だ。

……まずは碎拳か。どんな記録が出るかな……？

「粘菌活性化……！」ペロペロ……

碎拳は手を舐め始める。すると碎拳の手が緑色のネバネバしてい

る物体に覆われてオレンジ色になった。

ドレミーは少し引つかかる所があるのか碎拳の手を見つめていた。

「……爆碎拳ー! BOMB!」

碎拳の手がソフトボールに当たると同時に爆発が発生してボールを思いっきり吹っ飛ばす。

「……記録、1035m」

「いよっしや! いい記録出たで!」

「……私も負けていられませんね。無限を出しちゃいます!」

ドレミーはまたもやベッドを取り出してベルトをボールに装着。そのまま飛ばして宣言通り無限を出した。

その後緑谷が指を犠牲にボールを投げて爆発さん太郎が突撃。それをドレミーがハンモックで止めてニヤニヤとしていた。爆豪はターゲットを変えてドレミーに突撃したがまたハンモックで吹っ飛ばされた後に相澤先生の捕縛武器で拘束されていた。ここで肩入れするのはちよつと不自然なので強化フラグはもう少し先にすることになった。

続いて持久走。これに関しては凄く地味だ。俺の場合直線はバツタレツグで跳び、カーブを普通に走るだけだ。ドレミーはまたベッドで飛んできた。碎拳はバイクと並走しながら鼻歌を歌っていた。八百万と飯田に俺らはドン引きされていた。そりやそうだ。跳んで走って、ベッドが飛んで、ただの走りエンジンだのバイクだのと並走しているのだから。ドレミーのベッドに至ってはどんどんスピードが上がっていつて最終的には俺達先頭以外を周回遅れさせていた。爆豪が沸騰しまくっていたのはひどく印象に残った。

「そんじゃ記録発表ね。1位、甘夢、2位、分倍河原、3位、八百万、4位、破巖、5位、轟、6位、爆豪………最下位、緑谷」

緑谷はこの世の終わりのような表情で固まっているが、俺達はこの後に相澤先生が何を起こすか知っているのなんとも思わない。

「あ、除籍ってのはウソだから。」

「「……はああああ?」」

「あれは君たちに本気を出させるための合理的虚偽だ」

「あんなの嘘だつてすぐに分かりますわ……」

黒髪ポニーテールの八百万 百がそう言うが、俺達は相澤先生がマジだったのを知っている。だが言わない。どうせはぐらかされるしな！

「相澤くんのおそつき！」

「オールマイト、今回は全員見込みありと見なただけです。次が同じとは限りませんよ」

「それにしても今年は凄まじいメンバーが揃ったね……とくに上位の4人が優秀だ」

「甘夢が1位は意外でした。俺の予想では分倍河原か八百万が1位になると思ってたんですが、甘夢の個性が思ったよりも応用の効く個性だったようです。個性『猿』……本当にここまで事ができるのか？」

「ああ、それは私も気になったよ！……何故だか分倍河原少年と甘夢少女は私が覗いていたのに気がついてきた気がするし……」

「破巖も規格外ですが、やはり分倍河原と甘夢のポテンシャルは凄まじいです。しかも異形型だからいざと言う時俺が抑えられない。……幸いな事にあいつらは俺に従順ですが、あの目は俺の本音に気がついていて目だ。……あの2人は少し警戒して様子見ですかね」

「そうか……」



## 戦闘訓練でガタキリバ

ヒーロー科は普通に忙しい。まずは通常の授業。

「んじゃー！この中で間違っている英文はどれだ？」

（（普通だ……））

（クソつまんね）

（やっぱり普通だ（ですな）。）

「つまらん……」

「ほらほら！おめえらもっと盛り上がっていけ！あとウヴァ！聞こえてるからな！」

「はいー」

「破産か！どれだ？」

「関係詞の位置が違うので4番です！」

「Got it！」

ランチラツシユのお食事処

「うーん……じゃあセルメダルのふりかけご飯を」

「いなこの佃煮を所望する」

「では私はスイカカレーを……」

「俺は大噴火ソースかけハンバーグセットがいいかな！」

「「いやさすがにどれも無いでしょ……」」

「全部あるよー」

「「全部あるの!?!」」

お昼はランチラツシユのお食事処で一流ゲテモノ料理を格安で食べ……

そしてヒーロー科限定の教科、ヒーロー〇〇学。その中でも最も単位の多いヒーロー基礎学の担当教師は……

「わーたーしーがー……!?!」

「! 来「普通にドアから来た!」

ヒーロー基礎学の担当はなんとオールマイトだった。

本人は普通にとか言っているが、ドアの淵に掴まって身体を乗り出しながら入室するのは普通には言えないだろうが、これもきつと某未来予知系サイドキック直伝?のオールマイトのユーモアなのだろう。きつと、多分。メイビー……

「オールマイトだ!」

「あれはシルバーエイジのコスチュームね」

「画風が違って鳥肌が……!」

オールマイトの登場にクラス全体が騒ぎ出す。

「さて!私が担当するのはヒーロー基礎学だ!単位も1番多いから気をつけるんだぞ!」

「さあ!今回やる訓練内容はア……これだ!」バン!

「戦闘訓練!」

「戦闘ウ!」

「訓練……!」

オールマイトがBattleと書かれた物を掴んで話す。すると爆豪と破巖は見るからに興奮し、緑谷は不安そうになる。

「そしてッ!そいつに伴ってえ……?コレだ!」

オールマイトがビシツと壁を指さすと、色の違う部分の壁がせり出してそれぞれ違う番号が書かれた箱が見えてくる。数はクラスの数と同じ22個あるようだ。

「これは君達が入学前に出してくれた個性届と要望に沿ってあつらえたコスチューム!」

「さあ！着替えたらグラウンドβに集合だ！」

#### 男子更衣室

「あれ？分倍河原はコスチューム着ないのか？」

瀬呂が疑問を浮かべる。

「あ、分倍河原だと仁義父さんと被るからできるだけ宇覇って呼んでくれ。コスチュームに関しては俺の場合意味無いからね。この体が俺のコスチュームさ！代わりにこのメダジャリバーって武器を鴻上ファウンデーションって会社から提供してもらったんだ！」

そう言つて宇覇はメダジャリバーを構えた。

「鴻上ファウンデーションって警備会社じゃなかったけ？」

「あ、これは鴻上社長の趣味でやってくれて、社長のツテから設計と作成を一緒にしてくれたさうだ。つまり社長のポケットマネーで提供された物という訳さ。あの人独特だぜ？」

「おお！かっけえのお！チビ達が喜びそうな感じだな！」

「ああ。意匠はこっちで指定したからね。どんな機能かは実戦まで秘密だけど。ところで破巖はボクサーみたいなコスチュームなんだな！」

「親父がプロボクサーだからな！個性もボクサーみたいだから折角だし……な？」

「破巖のコスチューム……男らしいじゃねえか！」

「お！分かるか切島！いや友よ！」

「おう！俺達マブダチだな！」

「つと、そろそろ行こうぜ？オールマイトを待たせるのは悪いからな！」

#### 女子更衣室

「甘夢ちゃんのコスチュームはなんだか不思議なデザインね……」

「ふふふ……ミステリアスでいいでしょう?……あと葉隠さん。その裸は不味いかと。私の場合個性で貴女の裸だつて見れるのですよ?」

「……そうだった!私が見える個性の子からしたら私痴女に見えるじゃん!」

「髪の毛などの体の一部を繊維にして服を作るのはどうでしょうか?それなら服を着た子に見えるはずですし、風邪を引きにくくなります」

「そうだね!後で申請してみる!」

「……痴女つて言ったら八百万もじゃない?」

「あのう……これでも1度却下を貰ったのですが……」

「八百万さんはコスチュームにジッパーを沢山つけるかライダースーツのようなものにした方がいいかと。素肌を晒せば晒すほど致命傷の攻撃が増えますから……」

「なんかそれはそれでエロい気が……」

「成程……内側から開きやすい構造にすれば物をすぐに取り出せますね!今度参考にしてみます!」

「そう言うとうと麗日ちゃんや甘夢ちゃんはあまり素肌を晒してないわね」

「パツパツスーツになっちゃった……」

ドレミーは他の子のコスチュームの改善点を挙げていた。とくに葉隠は危険な為、真っ先に指摘していた。

「さあ有精卵共!訓練の時間だ!」

「先生!ここは入試の試験会場ですが、また市街地演習を行うのでしょうか!」

飯田が今回の訓練内容を問う。

「いや！今回はもう二歩先に踏み込む！屋内での対人戦闘訓練だ！！  
ヴィラン退治は大抵屋外で見られるが、統計によると屋内の方が凶悪  
なヴィラン出現率は高いんだ！監禁、軟禁、裏商売……このヒー  
ロー飽和社会……つと、失言だったね！真に賢しいヴィランは闇に潜  
む！君らにはこれから、ヴィランチームとヒーローチームに分かれて  
二対二の屋内戦を行ってもらおう！」

「基礎も無しにやるのですか？」

蛙吹がそう質問する。

「その基礎を学ぶ為の実践さ！ただし！今回の訓練ではロボットを鉄  
クズに変えればいい訳じゃない！」

「勝敗のシステムはどうなります？」

「ブツ飛ばしてもいいんスカア？」

「また相澤先生みたいな除籍とかあるんでしようか……？」

「分かれるとはどの様な分かれ方をすればよろしいのですか！」

「一チーム余るんですけどそれはどうすれば……？」

「このマントヤバくない？」

「ンンン……聖徳太子イイ!!」

「えーつと…… 状況設定はヴィランがアジトの何処かに核兵器を隠  
していて、ヒーローはそれを処理しようとしている！ヒーローは時間  
内にヴィランを捕まえるか、核兵器を回収する事。ヴィランは制限時  
間まで核兵器を守るか、ヒーローを捕まえる事だ！」

（（カンペ読んでる……））

（（カンペ読むのもユーモアだったりして））

流石のNO.1ヒーローでも、教えることに関しては壊滅的に下手  
なのを緑谷にワンフォーオールを教えようとした時に自覚してカン  
ペに頼っている。

「さて！組み合わせの発表だ！」

Aチーム：緑谷・麗日

B チーム：轟・障子

C チーム：八百万・峰田

D チーム：飯田・爆豪

E チーム：芦戸・青山

F チーム：砂藤・破巖

G チーム：耳郎・上鳴

H チーム：蛙吹・常闇

I チーム：葉隠・尾白

J チーム：切島・瀬呂

K チーム：分倍河原&ウヴァ・甘夢

「あらら……これも何かのご縁ですかね……」

「かもな……」

「K チームはちょうど3人いるから希望者3人と最後に対戦だぞ！」

## 数の暴力！ガタキリバ 前編

「さて！残すはKチームの試合だ！誰か希望者は？」

「俺がやる！」

「轟少年に、爆豪少年、そして破巖少年だね！組み合わせは……Kチームがヴィランで、轟少年達がヒーローだ！」

「さて、作戦会議だけど、やはり警戒するべきなのは……」

「破巖さんですね。……恐らくですが、彼も転生者かと。原作知識の有無までは分かりませんが、彼の個性は間違いなく『ブラキディオス』です」

「……あ、あれか。あんまりモンハンやってなかったからなあ……」

「彼の弱点は低温と高圧水流。注意すべきは粘菌ですね。あれの引き起こす爆発は防御力の高いモンスターを下す程の威力ですから、当たったら終わりと考えるべきですね」

「轟は氷しか使わないからウヴァがボコれば問題無し、爆豪は俺の分身でタコ殴りすればOK。……ドレミー、碎拳は頼めるか？」

「お易い御用です。……ああ、実は私もある程度分身できるんです。と言っても2、3体が限界ですが……」

「なら作戦は数の暴力だな。単純………だけど効果的な筈。相手が範囲攻撃が多くてもこっちはそれでやられる程弱くない。……勝つぞ！」

「轟とやらを倒せばいいのだな？……手を抜いた奴を倒してもなんの意味も無いが、そんな奴に負けるのは心外だな。任せろ」

「あ、ウヴァ。……完全体単体で戦ってくれ。……轟には格の違いを見せなきゃな。目には目を、手抜きには手抜きを、だ」  
「そうか……憑依解除……」

「いいか？半分野郎、テメエがビル凍らせてさっさと潰すぞ。あんなモブ共に作戦なんざ必要ねえ」

「……いや、宇覇とドレミーは強いぞ。連携しないと勝てないと思うな……」

「ドレミー？誰の事だ？」

「ああ、甘夢のニックネームだよ。夢を英語にして、それをもじったんだってさ。相手は数の暴力で来るだろうから範囲攻撃で纏めて倒そう」

「まあそれでいいな。……そろそろ時間だ。準備するぞ」

『それでは……始めっ！』

オールマイトの合図と共にヒーローチームが動き出す。直後ビルが凍りつき……

「……やっぱり撃つよね、氷ぶっぱ」



「私は浮いて避けましたが、ウヴァさんと宇覇さんは凍らされちゃいましたよ…どうするんですか?」

「ふん!」バキーン!

「分身増やして…凍ってる方を消せば…よし、脱出!」

ウヴァは無理矢理氷を叩き壊して、宇覇は分身を出して増やした方だけ残して凍らされた方を消すことで脱出した。

「さて、ショーの始まりだ!」

「…多分脱出された。ビルに入って直接倒すぞ」

「けっ!結局なんの足しにもなっていないじゃねえか…」

「それだけ強い相手って事だ…グレートだぜこいつはア…!」

「奇襲こそ我が強み!」

「来ると思ったぜ!死ねえ!」BOMB!

ビルの通路の角から宇覇が飛び出して襲いかかる。それを爆豪が爆破で仕留めようとするが…

「甘いわ!分身解除!」

すかさず宇覇が分身を解いてコアメダルに変化。当然コアメダルは爆発程度では効かない程の耐久力なので傷ひとつつかない。

「ふふふ…それでは皆さんにはバラバラになってもらいます。…

では、悪夢への急行列車へとご招待!」パチン!

「ぐあっ!」

「ぐう……！」

ドレミーが指を鳴らすと、爆豪と轟は突然虚空から発生したピンク色のブヨブヨした球体に包まれて弾けた。2人は何処かに転送されたようだ。

「ちっ！ドレミーちゃんはその事もできるのか！ワープは予想外だった！」

「ふふふ……貴方の相手は私です！どこからでもかかってきなさい！」

## 数の暴力！ガタキリバ 後編

「竜人形態……！」

ドレミーを一番警戒している碎拳は竜人形態へと移行して何時でもいけるようにした。

「あら……粘菌には気をつけないとですね。では、貴方と真正面からぶつかるのは面倒なので私は逃げるとします。最上階目指してこの迷宮を頑張つて突破してくださいね？ 沢山トラップを設置したのですから……」

パァン！

そう言うドレミーの周りをピンク色の膜が覆い、フーセンガムのように弾けたと思つたらドレミーは何処かに消えていた。

『さてさて、実況は甘夢 猥ことドレミーが』

『解説はガタキリバ分身体の分倍河原 宇覇がお送りするぞ！』

「……とりあえず最上階を目指すか！あいつらは外から脱出できるから多分そこ以外に爆豪と轟がいる！」

碎拳は突然スピーカーから聞こえてきた実況に少し呆けてしまったが、すぐに持ち直して核兵器があると思われる最上階を目指した。

「愉快犯になり切ってるつちゆう訳か！なら望む所だ！」

碎拳が角を曲がると、ドレミーが個性で作りだしたベッドが飛んできて碎拳をぶつ飛ばそうとするが、碎拳は素早くストレートを入れて逆に弾き返した。

『おっと、弾かれてしまいました……』

『だがドレミーの作った物は性質を変え放題……つまり！』

『ボヨンボヨンと跳ね返る！なんてのも可能さ！』

「!? 爆碎拳！ BOMB！」

跳ね返つたベッドを素早く床に叩きつけた碎拳……崩れる足場。これなら簡単に突破できる。あわよくば轟か爆豪に合流できると思つた碎拳。しかしそこには……

ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン

ヒュン！

桃色の球体が所狭しと設置されており、碎拳に向かつて床に引つ付いたガムのように伸びて碎拳を絡め取り、あっという間に行動不能にされてしまった。

「クソっ！床に叩きつける所まで計算済みって訳だったのか！」

「そういう事です。という訳で確保です♡」

「……………ここはどこだ？爆豪とは別の所に飛ばされたか」

「ふん、俺の暇つぶしに付き合えよ……………」

「……………誰だ？」

「この姿は初めて見るんだったな。この姿がウヴァとしての本来の姿だ。……………かかってこい」

そう言つてウヴァはクイツクイツと手を招き、どこからでも来いと轟を挑発する。

「舐めるなよ……………」

轟は足から氷を出してウヴァを拘束しようとするが、誰だつて二番煎じを食らう訳がない。ウヴァは迫る氷を軽く蹴り飛ばして氷を砕く。

「お前は手を抜いているのだろうか？だつたら今から俺はここから動かないで戦う。逃げたら話は別だが……………」

「余計なお世話だ……………」

轟は更に規模を大きくした凍結で仁王立ちしているウヴァを攻撃するが、完全体でも特殊能力を持たない完全体になると基礎能力が大幅向上するウヴァの前には張子の虎も同然。見掛け倒しもいいところだ。手で払つて氷を砕き、もう片方の腕で正拳突きをして拳圧で轟

を気絶させた。

「瞬殺ではないか……もつとマシな動きをすればいいものを……」

気絶した轟に確保テープを取り付けたウヴァはドカツと座り込み、身体から自らを構成している物のひとつであるカマキリセルメダルを取り出してボリボリと齧って暇を潰す……

「ぐえっ……クソが！もうちよいマシな飛ばし方はねえのかよ！」

着地できない絶妙な高さから落ちてつぶれたカエルみたいな声を出した爆豪が顔を上げると、目の前には4体の宇覇がいて……

「……」

「「……クワガタホーン」」

BZZZZZZZZZZZZ!!

「ぐあああああ!!」

「ふう……確保つと！」

『ヴィランチーム……WIIIIIN!!』

爆豪はそのままモロに放電を食らい気絶。宇覇に確保テープを巻かれてヒーローチームの敗北が決定した。

「……さて！講評の時間だ！今回のMVPは分かるかい？」

「はいー」

「分倍河原少年！誰だと思うかい？」

「ドレミー……あ、甘夢の事です。」

「正解だ！相手を散り散りにした後、破巖少年を混乱させて判断力を鈍らせて罠に誘導した事だ！そういう意味ではあの実況は破巖少年の意識を最上階に逸らすためのものだったね！……つと！時間も時間だし、私はそろそろ緑谷少年の様子を見てくるとするよ！」

「ドレミー、行くぞ」

「ですね。私達も緑谷さんの様子が気になるので見に行きますね？」

恐らく不自然に思われないう程度にオールマイトのトゥルーフォームを見るのが一番早い。早速俺達は保健室に突撃した。

## 保健室

ガラガラ……

「大丈夫か？緑谷」

「うん。何とかリカバリーガールに治せるって言われたよ！」

「おや？君達は……ヒーロー科かい？」

「はぐらかしても無駄ですよ？八木 俊典さん。……それともオールマイトと呼んだ方がいいですか？」

「!?……何を言っているんだい？こんなガリガリな男がオールマイトな訳ないだろう……？」

「私の個性って、他人の夢を見れるんですよ。なので全部筒抜けです。……ワンフォーオールの事も、緑谷さんが継承者だということも、貴方の先代の最期も……そして因縁の相手の事も」

これはマジだ。ドレミーは寝ている間、もうひとつの精神が夢の世界を管理している。誰がどこにいるかまでは分からないが、誰がどんな姿なのか、過去にどんなトラウマや嬉しい事を経験したかなどを夢として見れる。いつも握ってるピンク色の球体は夢の世界のドレミーが回収している悪夢の塊だそうだ。

「……分倍河原少年も知っているのかい？」

「はい。ドレミーが一人で抱えられない事だと判断して俺にだけ伝えてきました。大丈夫です。これをこれ以上広める訳にはいかないので」

これはウソ。俺らは転生者なので知っているのだが、ドレミーが実際に見れたのは先代……つまり、志村菜奈の最期とワンフォーオールの出来た顛末、そしてオール・フォー・ワンとの戦いについてののみらしい。

「……緑谷少年のサポートを頼めるかい？」

「ワンフォーオールの制御ですね？夢に出ていましたよ。どうすれば緑谷さんにコントロール方法を教えられるか悩んでいたのが……」

「手っ取り早いのは貴方の知人であるグラントリノを頼る事ですが、生憎雄英のスケジュールはキツキツですからまだ無理なので、今できるのは夢の住人と夢の中で組手をして実践することですね」

「……本当にできるんだね？」

「はい。まあ5%がひとまずの目標ですね」

「頼むぞ！」

「そんじや緑谷。……指、ちゃんと治そうな？」

「う、うん！」

## マスコミ突撃ガタキリバ

「……やっぱりいますね。マスコミ」

「邪魔だな……」

「あんなゴミ共、ヴィランだったのなら蹴散らせば済むものを……」

俺達は電柱の影からマスゴミマスコミを確認、雄英バリアーで退散するまで待機している。他のクラスメイトはマスコミに揉まれながら入る者も居れば、真面目にインタビューを受けている者もいた。

やがて雄英バリアーが作動してマスコミはすぐごと退散。ドレミー達もようやく入れると判断して校舎へと向かった。

「……ようやく雄英バリアーが動きましたね。さき、行きましょう?」

「全く、その下らん根性をもっと別に回せんのか……」

ドレミーはコソコソと立ち去っていくマスコミにバレないように雄英バリアーを通り、ウヴァは制服を着ていないので堂々と向かい、俺は今日の時の為だけに制服を脱いでウヴァと共に通った。

「……お前ら、マスコミを躲したのか?」

「はい。……何か問題がありました?」

「……まあいい。もうそろそろでホームルームの時間だから教室に行け」

相澤先生がマスコミをまるで知っていたかのような素振りだった3人を訝しんだが、ホームルームも間近だったので仕方なく通した。

「昨日の戦闘訓練お疲れ。Vと成績見せてもらった。爆豪、お前はもうガキみてえなマネするな。能力あるんだから」

「……わかってる」



相澤が爆豪に対して注意をすると、爆豪は俯いたまま返事をした。  
「で、緑谷は入試の時みたいに腕ブツ壊して一件落着か」

相澤に自分の事を言われた緑谷は、ビクツと肩を跳ね上がらせる。  
「個性の制御……いつまでも完璧に出来ないから仕方ないじゃ通させねえし通せねえぞ。俺は同じ事を言うのが嫌いだ。だが、それさえクリアすればやれる事は多い。……焦れよ緑谷」  
「っはいー！」

相澤が睨みをきかせつつも緑谷に助言をすると、緑谷はピシッと構えて元氣よく返事をする。

「さて、今日はお前らに……」

「学級委員長を決めてもらう！」

「「超学校っぽいキターー！ー！」」

「ハイハイ！俺やる！」

「僕のためにあるやつ☆」

「オイラのマニフェストは膝上30cm！」

「皆！静粛にしないか！ここは投票で決めるべきだ！」

相澤の学級委員長という言葉にクラス全体で騒ぎだし、我こそはと手を挙げていく。そして真面目な飯田が投票で決めるべきと言うが

……

「……いや！腕そびえ立ってんじやねえか！」

「出会ってすぐで、信頼も何も無いのにな？」

「だからこそ！ここで票を集めた者が相応しいのではないか!？」

「なんでもいいから早く決めろ。俺は寝る。」

飯田は腕がそびえ立ち、蛙吹が信頼も無いのに投票するのかと疑問を呈し、それを飯田がだからこそと反論し、相澤は眠たそうにして寝袋に籠り、さっさと決めろと催促した。

「……俺らはどうする？俺は飯田に入れるが……」

「まあ順当に飯田さんですかね……」

俺達はヒソヒソと誰に投票するか話し、飯田に入れることにした。

「ぼっ、僕が3票ウウウウ!?」

「悔しいですわ……!」

「おいコラデク!なんでテメエが3票も集めてんだよ!」

「俺に2票入っている……?一体誰が……」

( (自推しなかったんだ……) )

こうして委員長は緑谷、副委員長は同票だった八百万と飯田がジャンケンをした結果、八百万となった。

## 食堂

「……やはり狙うべきですかね?職員室」

「まああわよくば出鼻は挫きたいね。ウヴァ。職員室前で監視、頼めるかい?」

「……セルメダルを50枚だ。それでやってやる」

「ほんじゃ頼むわ。……相手にバレないようにな?油断してから仕掛けるんだ」

悪意の始まりである雄英侵入。それを阻止、或いは警戒強化に持ち込むために宇覇はウヴァを職員室に送った。ウヴァはセルメダル50枚を報酬に張り込みを許諾。そのままセルメダルを齧りながらこっそりと職員室へ向かった。

ウー!ウー!ウー!ウー!

『緊急警報発令!セキュリティ3が突破されました!生徒は至急屋外

へ避難してください！これは訓練ではありません！繰り返します……』

「ほら来た！ドレミー！ウヴァが怪しまれないように俺らも行くぞ！」

「あら？ウヴァさんに任せるのではないのですか？」

「いくらウヴァでも相手はアレだからなあ……一応分身出せる俺が遅れてでも行った方がね？」

職員室には2人の人影があり、ウヴァは物陰から奇襲するチャンス伺っていた。

「……カリキュラムは見つかったな？よし、帰るぞ黒霧……ん？」

「バカは見つかったな！」

ウヴァの奇襲を手だらけの男が回避して、黒い霧状のもう片方の人物に命令する。

「危ねえ！おい黒霧！さっさと逃げるぞ！」

『仰せのままに！』

ズズズ……

「ちっ！逃げられたか……」

「どうだウヴァ？情報は……」

「1-Aのカリキュラムを確実に取っていた。この目で確認した」

「おや？随分と職員室が荒らされているけど……」

根津校長が遅く出てくる。本当にギリギリアウトなタイミングだ。

「嫌な予感がしてな。ここに張り込んでた。そしたら一本釣りだ。奪われたのは恐らく1-Aのカリキュラム。その警備を強化しろ。少なくともオールマイトは警備につけろ」

「……わかったのさ。オールマイトにもそれとなく促しておくよ」

この後に飯田が騒ぎを収めた事で晴れて委員長となった。やはりそこは変わらないんだな……

そして悪意が迫り来る……

## 襲撃来てもガタキリバ 救助訓練でガタキリバ

「さて、今日のヒーロー基礎学だが、オールマイトに俺、そしてもう1人のプロヒーローの下行う」

「内容は昨日から一新……人命救助訓練を行う！」

「そんでコスチュームだが、着るかどうかは各自の判断に任せる。状況によってはかえってコスチュームが足枷になる場合もあるからな。」

「場所はここから遠いからバスで行くぞ。……あまり時間をかけるなよ?」

相澤先生の声と共にクラスはドタバタと準備を始める。俺はメダジャリバーを担ぎ、セルメダルで作りだした鞆に収めて覚悟を決めた。

「……行くぞ」

「さ、本番でどこに行くかは別として……覚悟は決まりましたね?」

「……ああ!」

ウヴァとドレミーの声に覚悟を決めた宇霸が答える。そして3人でバスへと向かった。

「みんな!バスに乗った順に席に座るんだ!」

飯田が早速委員長らしく皆を先導する。

◇◇◇バス内◇◇◇

「くそう……こういう形だったか……!不覚!」

「意味なかったね!」

「ぐおあああ!!」

飯田がバスの席の構造が予想と違うことに悔しがり、それを芦戸が慰めようとするが、逆効果だったようだ。

「緑谷ちゃん。私って、思ったことはなんでも口に出しちゃうの」  
カエルっぽい見た目の蛙吹が突然緑谷に言いだす。

「え、えっと……蛙吹、さん？」

「梅雨ちゃんと呼んで？ 貴方の個性……オールマイトにそっくりだわ」

「!!??」  
「そっそうかな!? どこにでもあるありふれた個性だと思うけど……」

（やっぱり分かりやすいな（ですね）。）

（もつとマシな誤魔化し方を覚えさせなければ……）

宇覇とドレミーが明らかに挙動不審な緑谷を微笑みながら見て、ウヴァは隠し事が得意でない緑谷をそっち方面で鍛えようか考えていた。そこに切島が割り込む。

「そうだけ梅雨ちゃん！ 第一オールマイトは自分の個性でケガしねえって！ こいつのは似て非なるものじゃねえか？」

「それにしても、増強型は派手でいいよなあ！ 俺の硬化は優秀っちゃ優秀なんだが、いかんせん地味なんだよなあ……」

切島が自身の個性にコンプレックスがあることを打ち明ける。だが、ヒーローマニアの緑谷にはそんなもの関係ない。どンドン切島を褒めちぎる。

「そんなことないよ！ プロにも通用する凄い個性だつて！」

「プロなあ！ でもよ、プロヒーローって人気商売な所あるじゃねえか。そうすると地味なのは致命傷なんじゃねえかなって思うんだ。」

「僕のネビルレーザーは派手さも強さもプロ並み☆」

「でもお腹壊すのはよくないよ!？」

「……☆」 チーン

青山の自信をまたもや芦戸が砕いて青山の表情を暗くする。

「やっぱり強さと派手さを兼ね備えた奴と言えば爆豪に轟、ドレミーちゃんに破巖、そんで宇覇だよなあ！」

「私は……まあ強いですね。客観的に見ても」

「でもドレミーちゃんはどっちかと言うと派手さというよりはシュー

ルさに磨きがかかっているような……」

「そう言われると嬉しいぜ……!」

「やっぱ破巖はシンプルさと強さが兼ね備わってるよな!」

「……そうか」

「あたりめえだ!」

「昆虫パワーは舐めちやアカンゼよ!」

「そう言えば宇霸ちゃんの個性は色々な能力を持つてるわよね? シルエットと色からして虫なのは分かったのだけれど……具体的にどんな個性かは知らないわね。たまにメダルを身体から出して食べてるし……」

「あー、それ気になってた! 宇霸の個性って一体なんなんだ?」

「そう言えば俺の個性ってドレミー以外には説明してなかったな。ちようどいいし説明するか!」

上鳴の言葉に5人がそれぞれの反応をする中、蛙吹が皆が思っていた疑問を発する。宇霸もちようどいいかと説明に入る。

「まずは個性名! 個性の名前は『ガタキリバ』! 頭はクワガタ、腕はカマキリ、脚はバッタの異形型だ! 何故かクワガタホーンは電撃が出るけどそこは気にすんな!」

「それで分身能力とメダルについてだな! 分身能力……俺はブレンチシェイドって呼んでる能力は一体につきこの……コアメダルが3種類必要なんだ。逆に言えばコレが用意出来れば無限に分身できるし、どれだけ分身しても強さはそのまま。全部オリジナルだから本体だけを倒す……みたいなのも不可能さ!」

「えっ……それ最強じゃね?」

「そうでもありませんよ? 大量の数には強力な範囲攻撃が効くものです。私の場合悪夢を見せてストレスで精神破壊なんて芸当もできるので最強とは言えないですね。ですがオールマイトには恐らく……時間さえかければ勝てるかと。単体相手には持久戦を仕掛けて疲れさせればいいので」

「次にメダルについてだな! 大きく分けてコアメダルとセルメダルが存在して、コアメダルは破壊不可、セルメダルはヤミー、屑ヤミーつ

ていう人口生命体を作り出せる。あとはこれ1枚でバイクとかを動かせるエネルギーになったり、俺とウヴァに取って食料にもなる……と、こんなもんかな!」

「…なにそれっおい……」

「上鳴、あんたアホになってるよ?」

「そろそろ着くぞ。話してないで準備しろ」

ひと通り説明を終えた宇覇の傍で上鳴がアホな言葉を発して耳郎にツッコミを入れられる。すると相澤先生がもうすぐ着くことを告げる。

◇◇??◇◇

「これ……USJかよ!?!」

「はい!これぞ僕が設計した、『嘘の災害や事故ルーム』……略して!

U・S・J!」

((ホントにUSJだった!!))

「H A H A H A! 私も来ちゃった!」

「オールマイト!」

((朝イチでのヒーロー活動は自重したか(みたいですね。))

どうやらオールマイトは朝イチでの勤務を根津校長に止められたのが最初からいるようだ。すると、宇宙服を着たプロヒーローの正体に麗日が気づく。

「スペースヒーロー『13号』だ!私、ファンなんだよね!」

「13号君は救助に秀でたヒーローだ!レスキューについては私なんかよりも学ぶことも多いだろう!」

「オールマイト……僕もそこまででは……」

「H A H A H A!むしろ私はどちらかというレスキューが苦手な方なんだ!この体格と個性の都合上、瓦礫とかは吹っ飛ばさなければいけないからね!下手をすれば救助対象を危険に晒してしまう!今回はどうすれば自分の個性で安全に救助に行けるかも学んで欲しい!



そういつた障害も乗り越えてこそプロヒーローってもんさ！」

「オホン。では、お小言を2つ、3つ、4つ……」

（（（増えてる……）））

「ご存知の方もいるかもしれませんが、僕の個性は『ブラックホール』。吸い込んだモノをチリに変えます。」

「それで炎や土砂を吸い込んで救助をしているんですよね！」

「はい。ですが……」

『人を簡単に殺せる個性』でもありません。」

「！！」

「今でこそ、法律によってヒーロー以外は公共の場での個性の使用は制限されていますが、1歩間違えれば、簡単に人殺しにもなってしまうでしょう。皆さんにもそのような個性を持つ人はいるのではないのでしょうか？」

「……………」

「今日の授業では、貴方達のチカラが人を助ける為のものだということを学んで帰ってくださいね？」

「ハイ！」

「ステキー！」

ズズズ……

「！ お前たち、動くなよ！」

13号の演説が終わると共に広場から黒い渦が出現し、大勢の人が出現する。

「なんだ？もしかして入試の時みたいにもう始まっているパターン？」

瀬呂の疑問を相澤が否定して警戒体制に入る。

「違う！あれは……ヴィランだ！」

「おお……やっぱカリキュラム通りだ。オールマイト……お前を殺す。黒霧、女、お前は13号の始末だ。ここは脳無と俺で何とかする』『どうかお気をつけて……』ズズズ……

「私に指図するな……」

「チツ……いい加減従えよ……まあいい。いくぞ、脳無」

## 深海からの転生者

「13号は生徒の避難を！ここは俺とオールマイトでやる！」

「先生、侵入者用センサーは！」

「もちろんありますが……！」

八百万がセンサーについて聞くが、13号からはセンサーが反応しなかった事を告げられる中、轟が冷静に分析する。

「現れたのはここだけか学校全体か…、何にせよセンサーが反応しねえなら向こうにそういったことができる個性やつがいるってことだな。校舎と離れた隔離空間、そこにクラスが入る時間割…、バカだがアホじゃねえ、これは何らかの目的があつて用意周到に画策された奇襲だ」

「13号避難開始！学校に連絡試せ！センサーの対策が頭にある敵だ、電気系の個性が妨害している可能性がある。上鳴お前も個性で連絡を試すんだ！」

「っスー！」

「先生とオールマイトの2人で戦うんですか!?あの数じゃいくら個性を消すっていつても!!イレイザーヘッドの戦闘スタイルは敵の個性を消してからの捕縛だ、正面戦闘は……」大丈夫だ緑谷。先生達を信じろ」……分かった！」

「緑谷、よく覚えておけ。ヒーローは一芸じゃつとまらない」

そう言つて相澤先生は階段を飛び降り、次々とオールマイトが取りこぼしたヴィランを捕縛してはヴィラン同士をぶついたりなどして気絶させる。

「皆さん！早く避難を!!」

『やせませんよ』

13号が生徒を避難させようとするが無情にも黒い霧のヴィランが生徒達の前に瞬時に移動して立ちばかる。

『初めまして。我々は敵連合。僭越ながら……この度ヒーローの巣窟、  
雄英高校に入らせて頂いたのは……』

平和の象徴オールマイトに息絶えて頂きたいと思つてのことです  
て』

突然の敵のカミングアウトに生徒達は思考が停止する。何せあの  
オールマイトを殺すと言つたのだ。

「本来ならば今頃オールマイトとあなたの相手をしているのですがイ  
レイザーヘッドがいる……何か変更があつたのでしょうか？まあ……  
それは関係なく……私の役目はこれです」

と同時に霧が噴き出そうとするが待つたをかけた生徒がいた。爆  
豪と切島だ。先に攻撃を仕掛けるが相手は霧状なので攻撃は通用し  
なかつた。

「はあ……黒霧さん、とりあえず私を水難ゾーンへ飛ばしてくれ。い  
いか？」

身長150cmほどの非常に色白で顔に真つ黒なマスクと奇つ怪  
な帽子をつけた白髪の少女が黒霧と呼んだ人物にUSJの水難ゾー  
ンへのワープを頼む。

『煉黒さん……分かりました。そこが貴方のホームグラウンドですか  
らね。いいでしょう。』

「2人とも下がって下さい！あとは僕に……」

黒霧が煉黒と呼んだ少女をワープさせると同時に13号がそう言  
うと13号の指先にある蝶番がガチャリと動き指先のブラックホー  
ルを起動すると、ヴィランの霧がみるみるうちに13号の指先へと吸  
い込まれていく……

『甘いですね！積極的にヴィラン退治をしなかつたツケが回ってきた  
のでは？』

だが、相手の方が1枚上手だった。ヴィランは自身を構成している

霧を展開、そして13号の背中にワープゲートを開けて13号の指先近くにいた自らと繋ぐ。

「しまったー！……吸い込まれる……！」

最初こそブラックホールの吸引に耐えていた13号のコスチュームだったが、すぐに背中部分にヒビが入り、背中と一緒に引き裂かれてしまい13号はドサリと倒れてしまう。

「や、やられた……！」

『さて、守っていた盾はこれで倒しました。貴方達は邪魔なので…散らして、罅り、殺す』

狼狽えていた生徒の大半をドーム状の霧で包んだヴィランは無作為にワープさせられて、残ったのは障子と、たまたま範囲外だった瀬呂、芦戸、砂藤、麗日、飯田の6人だった。

◆◆◆水難ゾーン◆◆◆

「さて、ここまでは予定通りですね……皆さん乗ってください！」

「あつぶねえ！」

「ケロッ！」

「クツシヨン!?ありがとうドレミーちゃん！」

「うわわっ！」

水難ゾーンにワープさせられたドレミーと宇覇、蛙吹、峰田に緑谷はドレミーの作りだした数個のベッドに乗せられて近くの船に軟着陸した。

「さて……要注意人物は先程の少女ですね……あの幹部格と思わしき



ランは全滅。白髪少女は耐電性のブーツでも履いているのかケロツとしてそのままこちらに近づいてきた。

「……大丈夫よ。あなた達に危害を加えるつもりは無いから。……目的はただ一つ。私を雄英で暮らさせてほしいの」

ある意味ヴィラン達よりもビツクリな事を言った少女は一礼をして敵意が無い事を伝える。

「……ちよつと待っていてください。貴方とそっくりな子の夢をこの手帖に書いた気がするので、もしかしたらこの子が本当の事を言っているか分かるかもしれません」

そう言つてドレミーは青い手帖をパラパラと捲り夢の記録を探る。

この手帖には全ての人の夢が夢の世界のドレミーにより勝手に記録されているのだ。ただ、こちらの世界のドレミーは実際に見るまで記録が分からない。手帖には1度夢の記録を見た人物をイメージすると勝手にページが捲られてその人物の所で止まる機能がついているのですぐに見つかる。

「分かったドレミー。……動くなよ？お前をまだ信用した訳じゃない。何者か分かるまでそこで待っている。…攻撃したと判断したらこちらから仕掛ける」

「……貴方の名前は？」

「煉黒 鬼姫。最近まで小笠原諸島の近海に住んでいたわ」

「……個性は深海棲艦で合っていますね？」

「ええ。貴女の個性で分かるのね？」

「はい。……皆さん、この人の言っている事は本当です。」

ドレミーは手帖をパターンと閉じて彼女の潔白を証明した。

「よかったわ。信じてくれて。早速で悪いけれどまずは広場にいる相手の切り札を潰しましょう？」

「……貴女は生まれ変わりって信じますか？」

「そうね……信じるわ。でも何故聞いたのかしら？」

「いえ、最後の確認ですよ。先程までの質問はその気になれば私に合わせられますからね。なのでこのような確認をしました」

「そう……」

## 脳無をボコボコガタキリバ

「いいぞ脳無…… ん？押されている？」

「なんてパワーなんだ……私と同等ではないか！」

「そりやそうだぜ！この改造人間の脳無はアンタを止めるためだけに作られたサンドバッグさ！……でもイレイザーヘッドが邪魔だな。やれ、脳無」

脳無と呼ばれている黒い大男はイレイザーヘッドの方に目玉をギョロリと動かして組み付いていたオールマイトを引き離し、イレイザーヘッドに一瞬で詰め寄り、イレイザーヘッドの腹を殴り、一撃で気絶させた。

「そんな……相澤先生！」

「一足遅かったですね……私は相澤先生を救助します。皆さんは隠れていてください」

ドレミーが飛んでひらりひらりとヴィラン達の攻撃を避けて相澤先生を助け出す。

「……煉黒でいいか？」

「それで構わないわ。……大方聞きたい事は脳無……あの黒い男のことよ。その事ね？」

「ああ。聞きたいのはアレを誰が仕留めるかだ。俺はまだパワー不足。ウヴァに頼らざるを得ないが、ウヴァとははぐれてしまった。……あそこに居たということは異形型だろ？アレに勝てるパワーがあるなら頼みたい。俺はあの手男やるから」

宇覇と煉黒はどちらを狩るか隠れながら相談する。

「分かったわ。気をつけてね？あいつは5指で触れられるとアウトな個性持つてるから。あと、何か刃物があると助かるわ」

「分かった。……刃物ならこのカマキリソードを使ってくれ。切れ味は保証する」

「そうか。助かる。……変身」

煉黒が宇覇が渡したカマキリソードを握り、変身と言うと、煉黒の姿が変化を起こし、頭部の帽子はフードへと変貌し、滑走路を模した



頑強な尾が生え、服装はパーカーにビキニとなり、表情はマスク越しでも分かるほどの狂戦士のように狂った笑みを浮かべる『戦艦レ級』となった。

そして宇覇はオースキャナーを握りしめ、メダルをスキャンし……

《left》キンツ！ 《/left》

キンツ！

キンツ！

「……分身！」

クワガタ！カマキリ！バッタ！

ガクタツ！ガタガタキリツバ！ガタキリバ！

「ブレンチシエイド！」

「はっ！」「はっ！」「はっ！」

「食らえ！」

「！ 生徒の1人か！」

宇覇は分身して死柄木に襲いかかり、死柄木は間一髪で回避して分身に5指で触れようとするが、分身はすぐさまコアメダルに分解されて死柄木の手は空を切る。

「なっ!?コレが本体じゃねえのか！」

「さ、本物がどこにいるか当ててみな。最も、見つけた所で勝てないけどな……！」

「DETR OIT…がはっ！」

(しまった！)

脳無の攻撃を迎撃しようとするが、オールマイトがDETR OIT SM ASHを放とうとするが、活動時間が間近になったせいで吐血。脳無の拳に吹っ飛ばされると思いきや、黒い小さな影に遮られ、脳無の拳はそこで止まった。

「むー！貴様はさっきのヴィラン!?何故生徒と同行している！何故私を

庇う！」

「オールマイト、話は後でね？まずはこのじゃじゃ馬をしつかり馴けないと……」

脳無が煉黒はこちらを裏切ったと見なし、煉黒に迫りくる。確かにスピードはオールマイトクラスだろう。だが、動きは至って単調で見えさえすれば簡単に見切れる。

「はあ……パワーだけは1級品ね。だけどそれ以外が終わってるわ。失敗作と評するべきかしら。でも、サンドバッグとしては及第点ね！」

そう言うと煉黒は脳無のもう片方の腕を掴み、カマキリソードで脳無の身体を切り落とし、さらにハンマー投げの要領でぶん投げ、脳無をUSJのドームごと吹っ飛ばした。

「よし……200mは行ったわね！」

(なんてパワーなんだ……確かに私を助け、生徒に危害は加えなかった……だが、彼女はヴィラン……ここで仕留めなければ……)

「あぁー！待って待って！私は雄英で暮らしたいだけだから！」

「……へ？」

「クソっ！脳無がやられた！期待していたあの女には裏切られた！完全にゲームオーバーだよ……撤退だ黒霧！」

「チツ……すばしっこいな……もう追いつかない……」

宇覇はここで死柄木を捕まえようとするが、予想以上に死柄木が素早く、途中から隠れていた黒霧の所まで逃げられてしまった。

「……君は何故雄英で暮らしたいんだい？」

オールマイトが疑問を発する。すると、あまりにも意外な答えが返ってくる。

「小笠原諸島をうろつくのは飽きた！あと、セルキーとかいう奴が追っかけてくるし！こちとら深海で目が覚めたんだぞ!?あそこがわたしの家なんだよ！ホーム！故郷！出身地！それなのにさ！聞いてよ！あいつがなんて言ったと思う?!「密航者め！」だよ!?冤罪にも程があるわ！」

「あー、つまり、君は捨て子なんだね？」

「……まあ、それでいいわ。兎にも角にも！わたしの家、用意しといてね！」

「なんかグイグイ来る子だったなあ……！不味い……もう制限時間間際だ！……セメントス君！」

「オールマイト……無茶すぎですよ……今日の通勤時にマツスルフォームを使うなって根津校長にはあれほど言われてたじゃないですか……」

「いやー！人を助けるお節介野郎こそヒーローなんでね！そこは忘れちゃ「オールマイト君？あれ程言ったのにまだ足りなかったんだね？」……根津校長！」

「まあ、煉黒君は雄英で保護する事に決めたのさ。彼女の要望でもあるからね！……まあ相澤君には仕事を増やすことになるけど……いつか！相澤君ならできるね！」

「？」

## 体育祭でレッツラガタキリバ 追加で編入ガタキリバ

「……で、なんで私は拘束されてんのさ」

ヴィラン襲撃による臨時休校の日、煉黒は校長室にベルトで拘束されながら根津校長と話していた。煉黒のパワーなら簡単に引きちぎれるのだが、ここで暴れても不味いので大人しくしていた。

「いやー、オールマイトにはああ言ったけど、君はまだ僕に自分は潔白だと証明できていないね？そういう事さ！一応……ね？」

「はあ……水難ゾーンの生徒が証人になるはずです。そっちで証拠取ってください」

「そう言うと思って呼んでおいたよ！入っていいよ！」

「失礼します……」

「女の校長先生の肖像画は……無いか……」

「ケロッ。失礼します」

「しっ、失礼します！」

「おや？煉黒さんですね。どうしたのですか？」

「こいつが宇覇の言っていた煉黒か。……成程、自由になりたいという欲望が強いな」

根津校長の許可と共に証人の宇覇、峰田、蛙吹、緑谷、ドレミー、そして護衛のウヴァが入ってくる。

「さて、まずはドレミー君から証言してもらおうかな！」

「証言よりも私の手帖が証拠になるかと。少々お待ちを……」

夢日記の煉黒の欄を開いたドレミーは根津校長に見せ、元から雄英侵入時に裏切る予定だったという事を証明した。その後根津校長の欄も見せた。この手帖は個性で勝手に書かれる上に、嘘は絶対に書かれないという特性があるので証明にはもってこいであった。ドレミーの記録している夢とは、記憶や欲望、そして恐れている事が現れるという現象。例えば背が低いことがコンプレックスの人は身長が伸びる夢をよく見る、峰田がスケベな夢をよく見るなどが挙げられ

る。

「……うん。これで証明できるね。個性で作られる物ばかりは偽造で  
きないから証拠としては最適だ」

「それじゃあ、君の処遇を決定するよ！」

ドレミーの証拠で満足した根津校長は煉黒の処遇をその場で決  
める。

「君は雄英の寮で保護、そしてその間教育を行う為に1―Aに編入す  
るのさー！」

『……ええ!?!』

根津校長の言葉に煉黒も6人も驚愕する。流石に予想していな  
かった煉黒は本当にいいのかという目で根津校長を見る。

「ちよつと手続きは面倒だけど僕が何とかするから安心するのさ！」

「あの、雄英に寮はないですよね？」

「いや、ここ最近寮の建設を計画していたからそれが早まるだけなの  
さ！ちようどいいからさっさと建てちゃっておくのさ！」

蛙吹が寮が無いのにどうするのかと聞くと、今から建てるという言  
葉が返ってきた。

◇◇翌日◇◇

「あれ？雄英にあんな建物あつたっけ？」

「なんでも、寮を建てる計画が前々からあつたそうだ。きつと要望が増えて立てられたのだろう。ハイツアイランスというのか……」

芦戸と飯田がいつの間にか建っていた寮に疑問を浮かべたが、雄英のやることはスケールがデカイのでまたやってるのか…程度に思い、そのまま教室へと向かった。他の生徒達も概ねそのような反応をしていた。

◇◇HR◇◇

「尾白、あの尻尾の火傷跡は大丈夫か？」

「リカバリーガールにすぐに治してもらったよ。ほら、このとおり！それよりも破巖君の傷は？」

「ああ、あれは自分の個性の反動で出来たやつだからほっとしてる。その方が戻った時にさらに硬くなるんだ」

（相澤先生は来ないだろうし誰が来るかな……もしかしてオールマイトだったりして）

火災ゾーンで共に戦った尾白と破巖は互いの心配をし、お互い問題ないと伝えあう。そして芦戸はHRにはどの先生が来るのか考えていた。

「皆、おはよう」

「大丈夫だったんですか!? 相澤先生！」

相澤が教室に入ると、早速耳郎が大丈夫かと心配する。

「肋が少し折れただけだ。ばあさんにすぐに治してもらった。……さて、早速の所悪いがこのクラスに新しい生徒が入る事になった。入ってきていいぞ〜」

リカバリーガールの治療で復帰したと返した相澤はその新しい生

徒を軽そうに呼んだ。

ガラガラ……

「今日から1—Aで学ぶことになった煉黒 鬼姫です。よろしくお願  
いします」

「「ヴィランンンンンン!?」」

「……失礼なこと言うんじゃない。煉黒は誰も傷つけてないし、なん  
ならオールマイトのピンチを救ってくれた奴だぞ?」

「まあ、いろいろ思う事はあるでしょうが、頑張って馴染めるようにし  
ます」

「それで、ヴィランの襲撃があつた中悪いが新たな戦いが迫っている  
……!」

相澤先生の新たな戦いという言葉にクラスのほとんどが息を飲む。

「雄英体育祭が迫っている!」

「クソ学校っぽい来たアアア!!」

相澤先生の言葉に切島達何人かが興奮するが、耳郎、尾白、砂藤の  
3人から不安視する声が聞こえる。

「ヴィランに侵入されたばっかなのに体育祭なんかやって大丈夫なん  
ですか?」

「また襲撃されたりしたら……」

「今回は大丈夫だったとはいえ、次も大丈夫って保証は……」

「逆に開催することで雄英の危機管理体制が盤石だと示すって考えら  
しい。警備は例年の五倍に強化するそうだ。何より雄英の体育祭は  
お前らにとって最大のチャンス。プロに見込まればその場で将来  
が拓けるわけだ。年に一回……計三回だけのチャンス。ヒーロー志  
すなら絶対に外せないイベントだ!」

とある探偵事務所

「…遂に雄英体育祭が始まるのか……」

「お前の言う『原作』の記憶で一番新しいものだったな。この先はどうするんだ？」

ある探偵事務所で24歳程の男性が、テレビで雄英体育祭が近日開催されるといふニュースを見ながらそう零す。そこに半分緑、半分黒の姿である仮面ライダーWがこの先の方針を問う。

「変わらないさ。助けて、ガンダムへと近づく。それ以上もそれ以外にも今は求めない」

「そうか……」

そこにあるのは悪意か、それとも善意なのか……それはまだ分からない。

ただ一つ、分かる事がある。彼らもまた、転生者だという事なの  
……



## 特訓と違和感、そしてガタガタガタキリバ

昼休み、水難ゾーン組は煉黒と話をしていた。これは実際に話している水難ゾーン組で話す事でクラスメイトの警戒度を減らすという狙いだ。

「なあなあ！煉黒の個性ってなんなんだ？」

峰田が早速煉黒の個性について聞き出す。

「私の個性は深海棲艦。簡単に纏めると艦船を人型に圧縮した感じの個性ね。使えるのは空母、重巡、そして弩級重雷装航空巡洋戦艦。」

「弩級重雷装航空巡洋戦艦!?見たことも聞いたこともないぞそんな船！」

「まあ、全部架空の艦船がモデルの可能性が高いからね。艦種に関しては気にしたら負けだよ」

「あー、煉黒ちゃんでもいいか？」

「ん？あんたは……」

「俺は破巖 碎拳！個性は『砕竜』！硬いトカゲになるぞ！」

「煉黒ちゃんだな！俺は切島 鋭児郎！個性は『硬化』だ！皆を守る男らしい個性だろ？」

「あら……似た者同士なのね？改めて自己紹介ね。煉黒 鬼姫よ。個性は深海棲艦。擬人化した艦船になれるわ」

切島と破巖をはじめにすこしづつクラスの警戒心が解けていく。どうやらしつかりと馴染めたようだ。そこに宇覇が話をもちかける。

「煉黒、体育祭に向けて俺とドレミーと一緒に特訓しないか？」

「……分かったわ。そうね、寮にある私の部屋でやりましょ？根津校長に無理言っつてめちやくちや頑丈にしたから大丈夫よ」

こうして宇覇達と特訓の約束を交わした煉黒。その後普通科による敵情視察が起きたが、心操がヒーロー科に入っているためか特に大事にはならなかった。

◇◇◇ハイツアイランス地下室◇◇◇

宇覇、ドレミー、煉黒、ウヴァは煉黒の部屋へと入った。そこには光が少なく、例えるなら夜のビーチだった。

「うわっ…暗めのプールに砂浜…確かに無茶言ったなこりや…」

「私のお気に入りよ。で、特訓って何するの？」

ハイツアイランスの地下室が煉黒の部屋だ。煉黒が特殊な個性の為、想定していた部屋ではダメだったので急遽増築。そしてこのような（めっちゃ金かかっている）部屋ができた。

「っと、その前に質問だ。…もし、もしかしてだけど…君って転生を体験したことある？」

「…あなた達も転生者という訳ね。えっと、原作知識は？」

「そうだね…超常解放戦線までなら」

「その超常解放戦線はよく分からないけど、私は職場体験までなら知ってるわ」

「じゃあステイン戦までは知ってるんだな。…この体育祭は死柄木達の動きを気にしなくていい場所だ。本当はインゲニウムを引退に追い込ませるのは良くないんだが、俺達は学生だからこれは無理。だから強くなる。この先を見据えてね…」

「そろそろ話が脱線しすぎそうなので特訓の内容について聞きたいのですが…」

「おっと、そうだったね。今回やるのは個性伸ばしの訓練さ！」

「個性伸ばし？」

宇覇の言葉に2人は頭に？マークを浮かべる。そこにウヴァが説明を入れる。

「簡単に説明すれば筋トレと同じだ。個性を使い続けて限界を超える。そうすることで身体がその限界に耐えられるように上限を上げる。その繰り返しで個性が強くなったり、新しい能力を得られる。つまり…死ぬほどキツイぞ」

「個性を伸ばすと言っても、私も含めてここにいるメンバーはどう伸

ばせば?」

「そうだね……例えば俺だったらウヴァと組手かな。例えばウヴァとの戦いで俺のカマキリソードが刃こぼれしたとしよう。そうすると、治った部分の周囲が切れ味抜群になって、さらに頑丈になる。バツタレッグで飛び続けると跳躍力が上がる。クワガタホーンの電撃を出し続けて威力上昇。分身は勝ちたいという欲望で増殖する。俺を例にしたらこんな感じかな」

「成程……じゃあ私の場合は筋トレしながら艦載機とかを出せばいいか」

「じゃあ私は悪夢から物を作り出すスピードの上昇を狙って何度も変化させればOKですかね」

「うん、本当は伸ばす方向性が分かる個性があればいいんだけど、こればかりは模索しなきゃいけないかな。まあ、個性の部位じゃなくても鍛えた部位が強くなる訳だから基礎も鍛えられる」

こうしてその日は個性伸ばしの訓練を皆より一足先に行う3人であつた。

翌日、変わらず個性伸ばしの訓練をしていた3人。しかし、途中ウヴァと組手をしていて宇覇の様子がおかしくなる。

《left》プテラ! 《left》

トリケラ!

テイラノ!

「! 今の感覚は……?」

「どうした宇覇! 動きが止まってるぞ!」

「待ってくれウヴァ。なんか……なんか今、身体に異物があるのを感じたんだ……」

「異物? だがお前の身体にはコアメダルとセルメダルしか入っていないように見えるが……」

「……気の所為? いや、そうじゃない可能性も……今は考えるのはよそう。ごめんウヴァ、続きやろっか!」

「さあ、来い！」

◇◇◇グラウンドβ◇◇◇

「切島！尾白！もつとだ！もつと強くなるぞ！」

グラウンドβでは、破巖、切島、尾白の3人が集まって互いの個性で殴りあっていた。

「おう！しつかし、よく考えたな碎拳！お前の言う通り確かに硬化時間が伸びてる気がするよ！」

「俺もなんだか前より尻尾が太くなってる気がする。こりや効果的だ……」

「俺の個性は自分の起こす爆発を食らって甲殻が硬くなるからな！だから尾白や切島にも同じ事が言えるんじゃないやねえかと思ってやってみた！」

どうやら碎拳は自身の経験から予想して、図らずとも個性伸ばしを行っていたのだ。それを共有する為に切島達と鍛えているのだろう。

こちらも時間ギリギリまで特訓を続けて、次の日の授業はついで行くのでギリギリであったが何とか追いつく事はできるぐらいには回復を繰り返して少しづつ強くなった。

そんな日が続き、遂に体育祭当日となった……

## 選手宣誓ガタキリバ

### 待合室

「皆準備は出来てるか!?もうじき入場だ!!」

「コスチューム着たかったなー……」

「公平を期すため着用不可なんだってよ。」

「普段つけているマスクとか個性でついてるやつははOKなんだって。だから私のこれはセーフらしい」

「普通科とかはコスチューム無いもんな…あつ、この菓子美味しい。」

「ふっふっふっ……特訓の成果を活かして戦いますよ……!」

「ウヴァ、今回は俺だけでやるそうさ。ウヴァがいるといろいろと不都合があるって先生から言われた」

「そうか、頑張るんだぞ宇覇。たとえ俺が居なくても強いと証明しろ!」

皆が思い思いの方法で時間を潰していると、突然轟が緑谷に声をかける。

「轟君……何?」

「客観的に見ても実力は俺の方が上だと思う。」

「へ!?うっ、うん……」

自分でも当たり前前だと思っている事を言われた緑谷は、キョトンとしていた。

すると次第に轟の語気が強まる。

「お前、多分オールマイイトに目エかけられてるよな?別にそこ詮索するつもりはねえが…お前には勝つぞ」

「おお!?クラスナンバー3候補が宣戦布告!?!」

「急に喧嘩腰でどうした?直前にやめろって……」

轟の宣戦布告に、上鳴達はざわつき切島は仲裁に入った。

「仲良しごっこじゃねえんだ。何だっけいいだろ」

「轟君が何を思っ僕に勝つって言うてんのか…は、分かんないけど

…そりゃ君の方が上だよ…実力なんて大半の人に敵わないと思う

…客観的に見ても…」

「緑谷も、そーゆーネガティブな事は言わねえ方が……」

緑谷が自分を卑下すると切島がフオローしようとするが、緑谷は前を向いてさらに続けた。

「でも……みんな、他の科の人も本気でトップを狙ってるんだ。僕だって遅れをとるわけにはいかないんだ！ 僕も本気で獲りにいく！」

「……おお。」

そう言った緑谷の目に迷いはなかった。

すると轟は僅かに目を見開き、少し困惑したようだ。

それぞれの思いを抱え、A組生徒達は入場した……

『雄英体育祭!! ヒーローの卵たちが我こそはと鎬を削る、年に一度の大バトル!! どうせテメーらアレだろ!? こいつらだろ!! ヴィランの襲撃を受けたにも拘わらず鋼の精神で乗り越えたステイルエツグ!! ヒーロー科ア!! 1年〜! A組だろおお!!』

プレゼントマイクの紹介と共に、A組の生徒達が入場する。

「わあああ……人がすんごい……」

「大人数に見られる中で最大のパフォーマンスを発揮できるか……! これもまたヒーローとしての素養を身につける一環なんだな」

「めっちゃ持ち上げられてんな……なんか緊張すんな爆豪……!」

「しねえよただただアガるわ」

「そういえば選手宣誓はどうするのですか?」

「喧嘩売る。そんだけ」

「宇霸君は好戦的なんだね……」

ドレミーが選手宣誓をどうするか宇霸聞くと、宇霸は喧嘩を売ると宣言して煉黒に驚かれる。そんな中プレゼント・マイクが次々と生徒の紹介をする。

『B組に続いて普通科C・D・E組……!! サポート科F・G・H組も来たぞー! そして経営科……!』

普通科、サポート科、経営科の生徒達も入場する。

だが、あからさまにヒーロー科ばかりが注目されているので特に普通科の生徒達は不満そうだった。

「選手宣誓!!」

過激なコスチュームをした18禁ヒーロー『ミッドナイト』が、壇上に立ちピシヤンと鞭を鳴らした。

「18禁なのに高校に居てもいいものなのか……?」

「いい!」

思わず眩く常闇に被せ気味に峰田が肯定する。

「静かにしなさい!! 選手代表!! 1ーA 分倍河原 宇覇!」

「ハイ!」

「そういえば宇覇さんが首席でしたね……」

そうドレミーが言うとう、普通科の女子生徒が嫉妬なのか付け足すように言った。

「ヒーロー科の入試な」

壇上に立つ宇覇。彼が言う選手宣誓は……

「宣誓! 今回の体育祭はヒーロー科が総なめします! なので努力してないだらけていた普通科の方はそうならないように精々頑張ってください! 上から待ってます! 悔しいならPlus ultraしてみな! 以上! 選手宣誓に見せかけた宣戦布告でした!」

やる気ないやつは帰れという宣言だった。

「調子乗んなよA組コラア!!」

「ふざけんなテメー!!!」

「死ねえー!!!」

「その角へし折ってやるー!!!」

「どんだけ自意識過剰だよ!! この俺が潰したるわ!!」

当然B組や他の科の生徒達は怒りを宇覇にぶつけた。

同じA組の生徒からも、非難の声が上がった。

「何をやっているんだ宇覇君?!?!」

「こつちにヘイトが向かってんじやないか！」

「あらら……これは私たちも頑張らないとですね……」

「うっわ……大胆すぎんでは……」

「そうだな、手抜き野郎や努力不足の奴は帰れって言ったつもりなんだが、ダメだったか？」

「いやダメでしょ!?!」

そんな騒ぎの中、壇上ではミッドナイトが競技の説明をする。

「さて、それじゃあ早速第一種目行きましょう！」

「雄英って何でも早速だね」

ミッドナイトの説明に、麗日がツツコミを入れる。

「いわゆる予選よ！毎年ここで多くの者が涙を飲むわ!!さて運命の第一種目!!今年は……コレ!!」

ミッドナイトが指し示すプロジェクターには、『障害物競走』と書かれていた。

「障害物競走……!」

「計11クラスでの総当たりレースよ!コースはこのスタジアムの外周、約4km!我が校は自由さが売り文句!ウフフフ……コースさえ守れば何をしたらって構わないわ!さあさあ、位置に着きまくりなさい……」

説明が終わると意図的に狭めに設計されたであろうスタートゲートが開き、ゲート上部に設置されたランプが点滅を始める。

「まだ、まだアレは温存です……!」

「さて、アレで行きますか!」

「……見てろよ、ウヴァ。お前の言う通り俺1人で十分だって証明してやる」

横一列に並んだ宇覇、ドレミー、煉黒の3人は原作知識により競技の内容を知っているので適切な力加減を知っている。ハナから1位は狙っていないかった。もちろん狙っているのは安全な2位。

ハチャメチャになる雄英体育祭が今、始まる!



皆で妥協してガタキリバ

「スターシート!!」

合図と共に生徒が押し合い圧し合いしながら前へ前へと進み始める。

『さあ実況はプレゼント・マイクと、解説のイレイザーヘッドでお送りするぜ！Are you ready?』

『ところで序盤の見どころってなんだ?』

『……今だよ』

ビシッ!ビシビシッ!

「予定通り!」

「凍結は地面にしか来ないので浮けば問題なしですね」

『Change Abyss Beetle!!』

イレイザーヘッドの言葉と共に、突然足場が凍結して、大半の生徒は身動きが取れなくなってしまう。それを知っていた3人は予め決めていた方法……宇覇はスタート地点の壁を蹴って移動、ドレミーはベッドに乗る、煉黒はしなやかな動きができるネ級に変身して装甲をパージ。身軽になった状態で生徒を踏み台にして凍結を回避する。

他の生徒も何人か凍結を回避、或いは突破したよう为先頭の轟を猛追する。

「さて、最序盤の節は突破した……お次はやっぱり……」

『さあ!早速第1関門!迫り来るロボ軍団!誰彼構わず襲い来る!ロボ・インフェルノ!ヒーロー科の入試のロボが相手だ!』

轟達先頭集団が見上げると、そこには入試のO P t 仮想敵まで混じっていた。しかも見ただけで少なくとも四〜五体はいる。

「これが入試のO P t……もつとマシなもん用意してくればよかつたんだがな……」

「ホントに邪魔ですね……こういう図体だけのノロマは避けるに限ります」

「火力でねじ伏せてもいいけど避ける方が早く先頭付近に戻れる!」

「……まあ前に倒したんだし無視しよ」

轟は凍結でOPtを凍らせるが、3人は構うだけ無駄と判断して迂回して進む。3人とも機動力抜群なので動きの鈍いOPt達仮想敵の間をスルスルとすり抜けていく。

「轟……よっしゃー俺もいつちよ……どデカイ1発キメるか！」

そう言うのと破巖の腕が黒曜甲に覆われて緑色の粘菌を纏い、脚を恐竜のもののように変化させてOPt目掛けて飛び上がり……

「時限式爆砕拳！」

破巖の一撃はOPtの装甲をへこませたが、辛うじてOPtは動いた。しかし、粘菌の色が徐々にオレンジ色に変色して爆発を起こす。今度こそOPtは動かなくなり、機能を停止する。

「決まったーよし、竜人形態ー」

破巖は遅れを取り戻す為に体力温存の為に取っておいた竜人形態であつという間に先頭に合流する。

しばらくすると先頭集団が一瞬足を止める。彼らの目の前に広がっていたのは……

『この関門ちよろすぎたか？じゃあお次は第2関門！』

『落ちればアウト！それがイヤなら這いずりな！ザ・フオール！』

「跳べばOK！ハアツ!!」

「ベッドに乗ってれば勝手にゴールしてくれるので楽ですね。妨害はこちらの操作で避ければいいので、まるでマリオカートをやっている気分になります」

「ジャンプ力……よし、足りるなー」

先頭で妨害されるのを避けた3人はそれぞれバツタレッグ、ベッド浮遊、ネコの姿勢での跳躍であつという間に渡りきり先頭になる。

「……ドレミー、煉黒。俺思ったんだよ」

「なんですか？……次の騎馬戦で何か変化でもあるのでも言うのですか？」

「あー、俺はその次のガチバトルの事考えてた。……今年からヒーロー科が22人じゃん？だから騎馬戦以降のセーラインが緩くなるんじゃないかなくて。俺らみたいにならずに抜けている奴がいるからシードがあるかもしれないじゃん？」

「だったら戦闘回数を減らせる可能性の為にここで1位取っておいて騎馬戦で1000万ポイント取りつつ暴れるという訳ですか……わざわざ1000万を奪うのも面倒ですし、なにより面白そうですね。その話乗りました！協力して1位を取りましょう！」

「……まあ、暴れられるならいいや。騎馬戦にしてもちようど私たち相性いいだろうし。んじゃ、予定変更してヲ級で後ろのメンバーにちよつかい出しておくよ」

さらに先を見据えて騎馬戦で協力する事を決めた3人はドレミーのベッドに乗り、宇覇は次に備え、煉黒はヲ級に変身して後続を艦載機で妨害する。

『オイオイ！突然先頭の3人が協力しだしたぞ！どういう事だ!?』

『あいつら……1位を取る事にはあまりこだわっていないようだな。だがヒーローとしては協力する事は重要だ。そういう意味ではいい方法だな。極論1位で通過しなくても次は通れる。それを見越してあいつらは協力をしているんだろ』

プレゼント・マイクは先頭で発生した突然の協力に困惑するが、イレイザーヘッドは合理的だと評する。

本来なら先頭で争ってるはずの爆豪と轟は煉黒の艦載機に絶妙なタイミングで攻撃されてなかなか距離を詰められない。それどころかどんどんどレミー達に距離を離されてしまうではないか。

『さて第3関門！辺り一面地雷原の怒りのアフガン……なんだが、先頭のあいつら浮いてるから地雷無視するだろうし、用意する予定だった対空ミサイルは寮建てちゃったから予算が足りなかったんだよな……あ、地雷原は殺傷性はないから踏んでも問題ないが、音と吹っ飛び方は派手だから踏むと大幅ロスになるかもだぜ！』

「さて……仕上げに俺も参加するぜ！ブレンチシエイド！」  
「お前も俺にならないか？……そうか、残念だ。俺にならないなら殺す！」

「何訳わかんねえ事言ってるんだ分身野郎！」

「さあ、俺と永遠に戦い合おう！」

「邪魔だ……！」

BOMB!

「あつごめーん！地雷踏んじやった！」

「そんな……読まれてたなんて！」

宇覇が三体の分身を出して爆豪達に殴り掛かり妨害する。もちろん緑谷には緑谷が溜めた地雷を踏んで起爆して妨害。1位になる奴らの可能性を徹底的に潰した。

「うーん、ここは煉黒が1位になるか！騎手で力を発揮しやすいのは煉黒が1番だろうし、煉黒が適任の筈だ！という訳で投げるぞ！あそくれっ！」

「!? きやああああ!!!」

『!?宇覇の奴が煉黒をぶん投げたぞ!?!』

『いまいち意図が掴めんな……』

そのまま煉黒、ドレミー、宇覇の順にゴールインしてしばらくすると、轟、爆豪、破巖、飯田、切島の順に入着していった……

## 騎馬戦と最凶パーティー

「さて！予選通過者の45名も決まったところで、今度は第二種目の発表よ！早速〜？これ！」

「騎馬戦……か。」

モニターに表示される第二種目。そこにはやたらと大きくギラギラと光るフォントで書かれた『騎馬戦』の文字が映っていた。

ルールは簡単。今から15分間のインターバルが取られるので、その間に2〜4名から成るチームを作る。個性の使用は自由だが、悪質な騎馬崩し目的での使用は禁止。普通の騎馬戦と違い、騎馬が崩れても失格にはならない。では、どう戦うのか。

15分間の制限時間の間に騎手が付けているハチマキを奪い合い、終了時に合計ポイントの多い上位5チームを除いて全てが失格となるのだ。

すなわち、次に進めるのは最大20人となる。

ハチマキに書かれるポイントは、チームメンバーの持つそれぞれのポイントの合計。45位から5ポイントずつ、個人の持ちポイントが増えていく仕組みとなっている。

「もちろん、単にポイントが上がっていくだけじゃ面白くない！ということで一位の煉黒ちゃん！あなたの持ちポイントは……私達の期待と試練の意味を込めて1000万ポイントよ!!」

「そしてそして！1位の子達には次の種目で有利になるわよ！頑張つて1位を狙うもよし！堅実に2位を狙うもよし！さあ！チーム決めの始まりよ！」

「んじや予定通りに3人で……」

「俺も混ぜてくれないか？」

ドレミーの声に重ねるように赤い籠手をつけた男が話しかけてきた。

「ん？あんたは……」

「おっと！紹介が遅れたね！俺はB組の梅花 誠一だ！触れたものを

強化する個性だぞ！」

「よし！相性いいし入っていいぞ！」

「あ、騎馬は私一人で構いませんか？秘策があるので、それを使いたいのです」

「秘策？」

「ブレーメンの音楽隊みたいに肩車して戦うのか？」

「いえいえ……こうするのですよ！」

そう言ったドレミーが四つん這いになると、顔を除く体の周りにもこもこと白い毛や人工的な突起物が出現し、ドレミーを覆っていく。

次第に白毛のぬいぐるみのようなボディとメカニカルな四脚・尻尾を持ったマテリアルから頭と襟だけを出した状態になったドレミーが見える。

前方に付きだしたドレミーの頭には巨大な金色の角のようなものも備えられている。

もこもこのボディ正面、ドレミーの顔の下部にはまた別の目と口のような意匠もある。

ボディ側面には先端が後方に折れ曲がった巨大な赤色の翼のようなものがのびている他、ボディの翼の上部の位置には大砲のようなものが三門、側面方向に向かって付き出している。

メカニカルな脚部、尻尾部には関節の継ぎ目や内部構造もみられ、さらに脚部先端には指や爪に相当するランディングなどの機能も持つと思われる可動部位もみられる。

「これが私の秘策、『ドレキング』です！どうですか？素晴らしいでしょう！」

「あー、うん……」

「すげえな！ロマンと奇抜さを両立している素晴らしい姿だ！」  
「ここが砲門？何が出るのかしら……」

梅花はちよつと微妙な反応だが、宇覇と煉黒は興味津々でドレミーは満足そうにいつもの笑みを浮かべる。

やがてチーム決めの時間が終わり、全ての騎馬が位置に着いた。

やはりドレキングは目立つようで、他の騎馬とは一線を画したオーラが出ている。

「そんじゃ司令塔は俺でな？分身で死角は無くすから暴れな！」

『3！』

「全員俺の倍加でステータスを底上げだ！」

「この日の為だけにこれを習得したと言っても過言ではありません……ふっふっふっ……」

『2！』

「艦載機異常無し！オツケーよ！」

「よし、お前ら行くぞ！」

『1！』

「了解！」

『スターーーート!!』





間が使えるであろう個性は宇覇のガタキリバ（単体）、煉黒の深海棲艦、そして梅花の倍加だ。騎馬のドレミーは悪夢をストックしていないと強みである物質創造とドレキングの変身ができない為唯の力持ちにしかならないので除外。そんなウザ……厄介な個性の物間チームはさっさと封殺しておくのが吉。

……断言しよう。決してウザイからではない。

「艦載機発進！目標……物間チーム！」

異形の艦載機が煉黒のヲ級の帽子から大量に発艦し、物間の騎馬に機銃（ゴム弾）、魚雷（ブート・ジヨロキアエキス入り爆弾）、爆弾（目くらまし用ペイント入り）が雨あられと降り注ぎ、円場と回原の個性で防ぐが、しばらくすると追加の艦載機が編隊飛行を組んでやってきて、物間（だけ）にゴム弾やブート・ジヨロキアエキス入り爆弾、目くらまし用ペイントが当たっていく。

「なんで僕だけなんだよお!!」

「二「なんかウザいから（です）！」」

「A組……なんて野蛮なんだ！」

ブート・ジヨロキアエキス塗れになってその直後にハチマキを取られたのにまだこちらを煽る物間。ホントはお前洗脳の個性なんじゃないかって程の根性だ。これがツンデレとかだったら良かったが、拳藤のテンプレ手刀のイベントがよく発生している所を見るにそれはきっと無いだろう。

「分身野郎！ウザ顔！マスク女ア！ついでにモブ！死ねええええ!!」

BOMB！BOMB！BOMB！

「ついでにモブ!？」

「マスク女!？」

（意外としつくりくる……）

梅花と煉黒は爆豪のネーミングに少し傷ついたが、宇覇とドレミーは何処かこのネーミングに納得してしまっていた。

「甘いぜ爆豪！俺らは地獄の特訓を経て一皮剥けたんだよ！」

そう言うと宇覇の分身がドレキングの首周りのモコモコの部分から上半身だけ出してカマキリソードを構え……

「痺れる！とうろう蠅螂電刃！」

「当たるか！」

爆豪は危険を察知して爆破で方向転換をして宇覇のカマキリソードを空振りさせるが、帯電したカマキリソードの外を流れる電流が爆豪に接触。瞬く間に爆豪を感電させて動きを止めるが、瀬呂のテープで地面に落ちるすんでのところまで回収された。

「痺れる……爆豪！次アレ食らったらもう助けられないぞ！この電撃すげえ残る！」

「動けねえから一旦下がるぞ！その間くそ髪とハンバーグは前方を荒らせー！」

「くそ髪じゃなくて切島な!？」

「誰がハンバーグみてえな頭じゃ!？」

なんと爆豪の騎馬は前騎馬が切島と破巖の2人の超攻撃型の騎馬だった。瀬呂がテープ回収をし辛いが器用にやってのけている。

爆豪が他の騎馬を切島と破巖を突撃させて体が痺れる中ハチマキをどんどん回収していく。やはり爆豪は才能も素晴らしいが、対応力の高さが最大の強みだろう。

「さてお次は……緑谷達か！」

「その1000万よこしやがれください！目立つにはその1000万が必要なんです！」

「発目さん!?!……とりあえず1000万はいただくよ！煉黒さん！」

「梅花！俺の頭に触れろ！」

「了解！」

「行け黒ダークシャドウ影！狙うは1000万だ！」

『アイヨー！』

「無駄無駄無駄無駄ア！クワガタホーン！」

BZZZZZZZZZZZZZZZZZZ!!!

『グエツ！』

「常闇君！今回は下がって別の騎馬を狙おう！」

「……了解だ。黒影、下がれ！」

『チョット休ませ……』

常闇が黒影を出してハチマキを取らせようとするが、梅花の倍加で強化されたクワガタホーンの電光で黒影が怯んでしまい緑谷達は黒影を常闇の体内に仕舞わせて一時撤退をする。

「やっぱり緑谷の騎馬は機動力高いな！あれは無理に追わない方が吉だなー！」

「ですね。……さて、1番厄介なのが来ましたよ」

「そう言われて光栄だぜ！」

「俺らが1位を取る……！」

「挑戦させてもらうぞ！宇霸君、煉黒君、ドレミー君！」

「勝つのは私達ですわ！」

ドレミーの声と共に轟の騎馬がやってくる。やはり上鳴と轟の高火力、飯田と八百万の汎用性が厄介だ。

「けど……騎手が手抜きに奴に負けるつもりはないね！」

「手抜きだと……？」

「お前は全力で戦ってないだろ？だから勝てない。さっさと失せろ！」

「上鳴、アレやれ。八百万は準備できてるな？」

「喰らえ必殺……無差別140万V！」

BZZZZZZZZZZZZZZ!!!

「甘いですね。ウォールメエメエ！」

「ネーミングセンス！」

上鳴の無差別140万Vを変わったネーミングセンスの技……羊の壁で防ぐドレミー。だが、ここで突破されるのは轟達にとって想定内。すぐさま二の矢をつがえていた。

「レシプロバースト！」 ドドドドドドドドドド！」

「わーとられたー……」

飯田の切り札、『レシプロバースト』で轟チームが回収したハチマキ

は……

「なっ……！1000万じゃない！これは鉄哲チームのハチマキだ！」

「タイムアップ！全ての騎馬は止まりなさい！」

ボコッ！

「ふう……サンキュ！ドレミー、こんな事思いつくとはね……」

「はい。ドレキングの中身って空洞があるんですよ。悪夢をストックするタンクの部分に騎手の1人である宇覇さんの分身が1000万つけて入って頭のクワガタホーンだけ出しておけばヒントはあるから取れなくはない1000万の出来上がりです♪」

なんと騎手が複数なのを利用して煉黒が取られるフリをして騙し、本命の宇覇はドレキングの体の中に隠れていたのだ。しかもその気になれば引っこ抜けたのでミッドナイトはセーフと判定している。そして集計が始まって次の種目の進出チームの発表が始まる。

『1位！隙を生じぬ2段構えで1000万を守りきった煉黒チーム！  
2位！最後の最後で一杯食わされた轟チーム！3位！怒涛の攻撃でハチマキを奪い去ったまさに重戦車の如き動きをした爆豪チーム！  
4位！拳藤……あれ!?いつの間に入れ替わったんだ!?心操チームがランクイーン！そして5位！ギリギリセーフで滑り込みした緑谷チーム！』

「ワオ、清々しいまでに原作通りの順位。さて、1位になったからなにか有利な展開になるらしいけど一体何かな……?」

## なんだか暇な1回戦

『頼れるのは己だけ！持ってるもんを全て使って駆け上がれ！ガチンコバトルの始まりだ！』

『早速トーナメントの発表といくぜ！運命のトーナメントはア……これだア!!』

「ちよつと待ってください!!」

「あら？尾白君に……耳郎ちゃんね！どうしたのかしら？」

「あの……私達、騎馬戦が始まってから終わるまでの記憶が無くて……このままじゃこの体育祭の趣旨に反すると思うので棄権したいんです。お願いします！」

「……うーん……」

「……」ゴクリ

「そういう青臭いの好み！許可します！空いた2枠には6位の拳藤チームから入れるわ！」

（（好みで許可しちゃった!!））

『ほんじゃちよつと待っててくれよ！トーナメントを書き換えなきやいけねえからな！』

『さて！トーナメントの発表だ！1位のチームはあるご褒美があるぜ！』

プレゼント・マイクの声とともにトーナメント表がモニターに映される。

Aブロック

シード 分倍河原 宇覇

緑谷 出久 対 心操 人使

瀬呂 範太 対 轟 焦凍

上鳴 電気 対 塩崎 茨

飯田 天哉 対 発目 明

シード 梅花 誠一

Bブロック

シード 甘夢 獏

庄田 二連撃 対 破巖 碎拳

常闇 踏陰 対 八百万 百

鉄哲 徹鐵対 切島 鋭児郎

麗日お茶子 対 爆豪 勝己

シード 煉黒 鬼姫

『見ての通り1位の煉黒チームはシード権が与えられるぜ！手の内を見せる頻度が減る訳だ！』  
「宇霸さんの言った通りでしたね。私達はシードのようです。しばらく観戦に徹するとしましょう」

『早速緑谷 対 心操の対戦だ！』

俺とドレミーの2人はクラスメイトと少し離れた場所で観戦していた。ちなみに煉黒は昼寝している。

……たった今緑谷達の試合が終わった。

「……全く同じ展開でしたね」

「だな。ただ、ひとつ気になるのは緑谷の個性が一瞬だけ体全体に使われた気がするんだ」

「フルカウル習得まで間近と言ったところででしょうか。夢での特訓が効いているようですね」

緑谷はフルカウルの前兆を見せつつも心操の洗脳を自爆で解除。その後背負い投げで決めた。

次に戦うのは俺だからちようどいいしフルカウル習得まで一気に近づけようと決めた。

瀬呂 対 轟

「……最早公開処刑ですね」

「無駄が多い一撃ではあるな。DVお父さんへのお前のチカラ不要だからアピールに躍起になってるわけだ」

「戦う時はちやちやつと左使わせてくださいね？緑谷さんに勝ったら貴方があれやらなきやいけないので」

「はあ……手のかかるフレイザーさんだこと……」

轟は瀬呂のテープ拘束を無視して巨大な氷の傾斜を展開。オーバークイルもいとこな範囲の氷で瀬呂を封じた。

上鳴 対 塩崎

「……ぶふっ！ダメだアレ…見ると笑いが……！」

「2人の状態の差が激しいのもツボに……！」

上鳴のアホ面と塩崎の至って真面目な仕草が悪魔合体してクソシニールな絵面が出来上がって会場全体が爆笑の渦に包まれた。

正直あれを笑うというのは無理な相談だ。

飯田 対 発目

「……なんか地味っちゃ地味ですね。この試合」

「プレゼンは他所でやれと言いたい自分がある。というか飯田は利用されてるのにサポートアイテムを外さないあたり真面目だな……」

発目の大暴走とも言える試合という名のプレゼンは発目の場外で締まった。飯田の唾然としている顔がまた同情を誘う。

庄田 対 破巖

『冴えない顔のフタエノキワミ！庄田 二連撃！対するは特徴的な爬虫類系リーゼント男！破巖 碎拳！』

「この勝負、どちらが「破巖一択。花京院の魂を賭けてもいい」……さいますか」

「それでは……始めっ！」

「竜人形態！」

「速い！ ぐふっ！」

「庄田君戦闘不能！破巖君の勝利！」

『早っ!? さつきから速攻の試合が多いな！さて、次の試合は八百万 対 常闇だ！』

「ほらな？ 破巖の瞬発力は凄まじいから一瞬で距離を詰めて腹パンでフィニッシュ。この戦法はインターン編に来るミリオ先輩と似た戦法だね。攻撃を個性で避けて腹パン。……これインターン編大丈夫かな……」

「ああ、服が脱げる先輩のことですか。あの人の対策も考えないとですぬ」

常闇 対 八百万

「私が八百万さんなら手榴弾で怯ませてから一気に詰め寄ってあえて創造せずに殴り合いに持ち込みますね。黒影単体が強いのは中距離ですから常闇さんを相手する途中に創造すればいいのでそれでチエックメイトです」



「俺だったらスタングレネードで怯ませてスタンガンで常闇に接近戦かな。できるだけ密着すれば黒影がサポートできないから常闇が唯のカラス男になる」

八百万は常闇の速攻で場外。盾で抵抗するも黒影のラッシュに考える時間を貰えなかったのが敗因だろう。

切島 対 鉄哲

「あり？なんか切島が押ししてる。原作だったら互角のはずなんだけど……」

「心做しか尾白さんの尻尾も前より太くなってたので誰かが個性伸ばしをしたんでしよう」

切島が個性使用時間の差で勝利。持久戦ではあったが切島はさほど疲弊していないようだ。

麗日 対 爆豪

「……惜しかったな」

「麗日さんが見誤っていたのは爆豪さんの対応力の高さが強みだということですね」

麗日は爆豪の爆破でできた瓦礫をバレないように浮かして一気に解放。流星群のように落として爆豪を瓦礫で潰そうとするが、爆豪は片手で大規模爆発を起こして瓦礫を消し飛ばし、麗日を場外に吹っ飛ばした。

途中、会場からブーイングが巻き起こったが、相澤先生の一声ですぐに静まった。

「……さて、まずは俺だな。行ってくるわー！」

「頑張ってくださいね〜」

俺は緑谷との試合に向けて待合室に向かった。

## 準々決勝 シード編

宇覇 対 緑谷

『クワガタ！カマキリ！バッタ！対人戦なら誰にも負けねえやべえ奴！分倍河原 宇覇！ 対するは今の所影が薄い緑谷 出久！』  
「うっ！」

「そんな事言わなくてもいいだろ……」

プレゼント・マイクの自然にぶち込まれた悪口に心にグサツときた緑谷を俺は心配し、本気でプレゼント・マイクの本名をバラしてやろうか検討した。

「それでは〜？始めっ！」

「緑谷、お前の個性、コントロールしてみろ。それから戦ってやる。その方が楽しそうだしな！」

「！……うん！」

「ブレンチシエイド！」

（（4人でやれば屋内でのグラントリノの素早さを地面だけで再現できる筈！））

宇覇は分身してステージを縦横無尽に駆け巡る事で緑谷を翻弄しながら軽く切りつけるなどしてチクチクと細かく攻撃する。

（夢の中のグラントリノとの戦いを思い出せ……！）

対して緑谷は目を瞑り気配を探知しようとするが、夢の中のグラントリノ並に素早いのが4人で動いているため防戦一方だ。

「ぐっ……！」

「〜!!いい加減習得しろ！ 痺れる！クワガタホーン・スタンサンダー！」

しびれを切らして宇覇はクワガタホーンの電撃を麻痺させるためのもので変化させて緑谷に浴びせる。電撃には気配などある訳ないので緑谷はモロに食らってしまい痺れて倒れ込む。

「さあ立て……習得したんだろ？今は麻痺で体が言う事聞かなくても個性はコントロールできている。……痺れるのが解けるまで待つてやる。」

「……あり、がとう、宇覇、君……」

俺は緑谷の体の痺れが解けるまで待ち、緑谷が立ち上がった瞬間に戦闘態勢に入る。

「「さあ……来い！」」

「フルカウル……5%！」

緑谷が力を込めると、緑谷の体を緑色の電流が走って気配が強まる。

瞬間、緑谷は俺達に突っ込み分身の1人に殴りかかる。

「瞬発力勝負か？なら負けてないぜ！」

スキヤニングチャージ！

分身を消した宇覇はオースキヤナーでコアメダルをスキャンして身体強化を行う。

個性伸ばしで素のスペックで本編オーズのカタログスペックを出せるようになった宇覇の身体強化だ。当然ワンフォーオール5%の出力など簡単に上回る。

やがて宇覇が緑谷を押しついき、遂に場外へと蹴り飛ばした。

「緑谷君場外！分倍河原君の勝利！」

「負けた……！」

「おいおい、何も成長しているのはお前だけじゃないんだぜ？お前は確かに周りより遅れてる。でもな？引き離されてる訳じゃないんだ。少しづつだけど周りとの距離は縮んでいる。それを忘れんじやねえぞ！ 緑谷！」

「宇覇君……ありがとう！」

俺は緑谷の手を取り緑谷を起こし、救助ロボの所まで運んで次のシードの試合を観戦する準備をした。緑谷の所にはオールマイトが来るだろうが知ったこっちゃやない。こっちは転生者かもしれない梅花 誠一の素性を探りたいんだよ。

俺は観戦席に戻り次の試合を見る。ドレミーはもう待合室に行つて入れ違いにでもなったのか見当たらない。

『中堅な感じは未だ拭えず！飯田 天哉！ その強さは無限大!? 梅花 誠ー!』

「それでは……始めっ!」

「レシプロバースト!!」ドドドドドドド!!

飯田がレシプロバーストで速攻を仕掛けようとするが、既に梅花はそれを見ているので来るのは予測していた。最低限の動きで回避して飯田の突進を受け流す。

「ぐっ!もうタイムリミットが……!」

「……これでOK!それっ!」

「飯田君場外!梅花君の勝利!」

梅花はレシプロバーストの反動で動けなくなった飯田を抱えて場外へと投げ飛ばした。

「そう簡単に尻尾は掴ませないか……」

これだけでは転生者かどうか判断できない。仕方ないので俺はドレミーと破巖の試合を待つことにした。

甘夢 対 破巖

『お前ホントに獺なのか!? 変幻自在の夢の支配者! 甘夢 獺! ヘヴィ なリーゼントが特徴的なオラオラ系! 破巖 碎拳!』

「ふふふ……破巖さん、勝つのは私です!」

「ドレミーちゃん……俺のマジパワーを見せてやんよ!」

破巖が切り札を切ると宣言し、ドレミーはそれに応えるためにドレキングへと変身する準備をしはじめた。

「それでは……始めっ!」

「これが俺のグレートな真の姿だ……!」

竜人形態の破巖がドレミーと同様に四つん這いになると、破巖の体



「いえいえ……元々あのドレキング・ページを体育祭で使うとは思っていませんでしたよ！ドレキングは使い所が限られるので、破巖さん相手にしか使えない技でもありますし……とにかく、いい戦いでしたよ！」

「おう！次は負けねえぞ！」

爆豪 対 煉黒

『頭爆発ツンツンボーイ！爆豪 勝己！イレイザーが大好きなネコにもなれるぜ！煉黒 鬼姫！』

『人の趣味をサラツとばらすんじゃねえ。次やったらお前の本名をここで公表するぞ？』

『それは勘弁してくれ！ イレイザー！ な！ な!?!』

『誰が爆発頭じゃ！』

「相澤先生ネコ好きだったんだ……」

「それでにや〜？始めっ！」

「先手必勝！<sup>A.P.ショット</sup>徹甲弾オ！」 B O M B！  
「！」

爆豪の速攻により貫通力の高い爆風がレ級になっている途中の煉黒に襲いかかる。

爆豪は仕留めた、或いは致命傷にまで追い込んだと思ったのかニヤリと笑い、次の爆破の準備に入る。

だが、爆煙の晴れた先に見えたのは変身を終えた無傷の戦艦レ級だった。

「なあ……その程度の爆発で吹っ飛ぶと思ってんのか？」

「あ？なんで無傷なんだよ……！」

「ツマンネエノ……バイバイ」

そうやって煉黒は砲撃で爆豪の立っている地面ごと吹き飛ばし、硝煙の匂いが立ち込める中、煙が晴れた先には爆豪が倒れている姿が映っていた。

「……………！  
爆豪君戦闘不能！煉黒ちゃんの勝利！」

## 準々決勝でガタキリバ

轟 対 宇覇

「いいか？俺は右だけでお前に勝つ」

試合直前、俺は轟に呼び止められる。

「……訳を話せ。話はそれからだ」

「……………分かった。お前のことだろうから俺の親父がエンデヴァーなのは知っているな？」

「ああ。……その火傷、エンデヴァーに？」

「いや、俺の母さんにつけられた。……俺の親は個性婚で結婚した。母さんは親父に無理矢理病院に入れられて、それつきり会っていない。俺は親父が憎いんだ。母さんをあんなにしたあいつが……家族を壊したあいつが憎い！だからあいつのチカラの象徴である左は使わない。母さんのチカラの右だけで勝つてあいつを否定するんだ！」

「……そんな覚悟でヒーロー、なれると思ってるのか？」

「！」

「確かに話を聞く限りお前の親父さんはクソツタレだね！……でもな、プロヒーローとしては誰にも負けない奴だと思っぜ？オールマイトとは違うベクトルではあるだろうけど、途中で歪んじまったのかもしれないねえけど、伊達でNo.2を張ってねえぞ、あいつは。人を助けるのに手は抜かねえ、常に全力。それがプロヒーローだ。……だけとお前はどうか？半分の力だけで勝つ？寝言は寝てから言うもんだ。……轟、お前のそのやり方はお前の親父と同じことなんだぞ！それをやったらお前はクズなプロヒーローの仲間入りだ！否定したいなら、全力で戦えよ！勝って、勝って、お前の、お前だけの力だって証明してみせろ！」

「……」

俺の言葉に轟は押し黙る。

「別に今すぐやれって訳じゃねえ。俺との戦いの途中でもいい。その次でもいい。けどな。楽して助かる命なんて無いんだよ！いつかは向き合わないと何処かで大きく後悔するぞ！」



「宇覇……分かった。お前とは全力で戦う」

「そうだ！それでこそヒーローを目指す者、轟 焦凍だ！」

轟は俺の説得で少し吹っ切れたようで、とりあえず俺と戦う時はずも使う事を約束した。

『数も質も兼ね備え、無双の如き戦いで緑谷との戦いを制した分倍河原 宇覇！ 巨大な氷壁で瀬呂を閉じ込めた！轟 焦凍！』  
「来い！轟！」  
「いくぞ……！」

互いに戦闘態勢に入り、今にも戦いの火蓋が切られそうになる。

2人は今か今かとミッドナイトの合図を待つ。

「それでは……始めっ!!」

「ブレンチシエイド！」

「さあ……」

「シヨータイムだ！」

「お前の弱点はこれだろ？がてんひょうへき穿天氷壁！」ビシビシビシ！

「甘いぜ轟！俺が範囲技を使えないなんていつ言った？セルウエーブ！」ジャラジャラジャラジャラ！

轟の氷と宇覇のセルメダルの津波にも見える攻撃がぶつかり合い、拮抗する。

「ほらほらほらア！早く左を使わねえとジリ貧になるぞ！俺の体内のセルメダルはそれこそ無限にある！今は有限だけど、少なくとも今のお前が左の相殺無しで一度に出せる氷の何倍も出せるぞ！」

宇覇の宣言通り、次第に宇覇の体内から溢れるセルメダルが勢いが弱まっていく轟の氷結を押ししていく。

「ぐ……！母さん！俺、なりたいヒーローになるよ！」

ゴオオオオオオオオオ!!

「焦凍オオオ！そうだ！それでこそ俺の最高傑作だ！」

エンデヴァーが何やら叫んでいるが、俺たちには何も聞こえない。

ただ、目の前の相手を吹き飛ばさんと、今出せる全力でぶつかりあう。

「これが俺の全力だ！くらえ宇覇！ぼうれいねっば膨冷熱波！！」

「不味い！すぐに壁を……!?!」

セメントスがコンクリで出来ている地面に触れて個性で壁を作ろうとするが、ウヴァがセルメダルを出してセメントスの手首を覆う。そして手を出すなど首を振る。

「そう来なくつちやな！……セルバーストオ！！」

互いの攻撃がぶつかるその瞬間、空気が爆ぜた。そして爆煙が晴れた先に立っていたのは……

「……勝ったぞおおお！！」

「轟君戦闘不能！分倍河原君の勝利！」

「ほら立て轟。……ちやちやつとケガ治してもらって母さんに会ってこいよー」

「ああ……ありがとう、宇覇」

「うつつ……これぞアオハルだわあく！！」

「何やってるんですかミッドナイト……」

宇覇が轟の手を取り、それをミッドナイトが号泣しながら涙を拭き、ミッドナイトのぐつちやぐちやの顔にセメントスがドン引きする。

(ウヴァさんは体育祭の後、セメントスに小一時間説教されましたやっぱりウヴァさんだ)

ここからは俺が疲労で倒れて保健室にいたので、ドレミーに聞いた限りで話をしよう。

塩崎 対 梅花

速攻。その一言でこの試合は片付けられてしまう。

梅花は塩崎の茨をなんと無理矢理引きちぎり、怯んだ隙に梅花が塩

崎を投げ飛ばしたのだ。

会場全体が啞然としていた。なんならプレゼント・マイクなんて顎が外れかけてたらしい。

常闇 対 甘夢

ドレキングにすぐさま変身して重量差で黒影を押し潰したらしい。しかも物理的に輝きながら。あまりの光景に常闇は宇宙猫していたそうだ。

煉黒 対 切島

最早いじめだったそうだ。切島の硬化しながらの攻撃をレ級でニヤニヤしながら受け止めて、硬化時間が切れたら用済みと言わんばかりに投げ飛ばしたらしい。

「次は……梅花か。さて、行ってくるわ、轟」

「……頑張れよ、宇霸」

俺は梅花と戦う為に保健室を出て会場へと向かった……

## 準決勝でガタキリバ

宇覇 対 梅花

『体はメダルでできている！分倍河原 宇覇！対するは個性がバイバインと被ってないか？梅花 誠一！』

「うちの父さんとは似て非なる個性なんだけどな……」

「えっ、お前、バイバインがお父さんの!？」

「ああ、梅花には教えてなかったな。……あまり広めないでくれよ？父さんから止められてるから」

「分かったー……じゃあ、いっちょ始めますか!」

仁義父さんはあくまでも自分の実力で有名になりたいから、俺が原因で有名になるのは嫌!……らしい。サイドキックからの話を聞く分には。

「それでは……始めっ!」

「ブレンチ……!?!」

宇覇が分身をしようとすると、突然体に違和感が走る。

《left》 プテラ! 《left》

トリケラ!

テイラノ!

「ぐう……!ああああああああ!!!」

「大丈夫か宇覇!明らかに様子がおかしいぞ!」

「……不味い。あの力は……恐竜メダルの力! おいミッドナイト!今すぐ宇覇を眠らせろ!宇覇が耐えているうちに早くするんだ!」

宇覇が突然苦しみだすと、梅花は動きを止め、ウヴァが宇覇の体の異変をグリードとしての本能で感知してミッドナイトに今すぐ止めるべきだと警告する。

「止めるって……分かつ「待ってください、ミッドナイト先生……もう少し、もう少しデ……!」……分かったわ。でも、何時でも眠らせられるように準備するわ。セメントスも壁の準備をしておきなさい!」

『おいおいどうした!? 宇覇の奴、急にうずくまって……………!!』

プレゼント・マイクが話すとほぼ同時に宇覇の体から紫とマゼンタのメダルが計8枚飛び出し、宇覇のコアメダルを引き剥がそうとする。

それを宇覇は息を切らしながら無理矢理メダルを握って抑え、体に再びしまい込み、ひとりでに浮いたオースキャナーを握り、装填されている虫系コアメダルを読み込む。

《left》キン! 《/left》

キン!

キン!

「はあ、はあ、はあ……………変身!」

クワガタ! カマキリ! バッタ!

ガクタツ! ガタガタキリツバ! ガタキリバ!

ガタキリバのコンボソングと共に宇覇の体が徐々に黒ずみ、ウヴァ憑依分身体のようなカラーリングとなり、オレンジ色の複眼は禍々しい紫色へと変化した。

「……………梅花、この状態をもたせられるのは長く見積もっても10分! その間に方をつけるぞ!」

「……………そう来なくっちゃね! これが俺の今出せる全力だ! 倍加倍率……………10倍!」

「A・ブレンチシエイド……………!」

梅花が身体能力を10倍にし、宇覇は今の姿と全く同じ分身を1人だけ生み出す。

「それって全力で来てるんだよな! 2人に抑えないと暴走しちゃうんだろ!」

「もちろんだ……………太古の蠅螂電刃!」

梅花の籠手と宇覇のカマキリソードが拮抗してぶつかる。そしてもう1人の宇覇が梅花の後ろから切りかかるが、今の梅花は空気の流れなども感じ取れるため、死角がほぼ0になっている。梅花は間一髪

で避けるが、無茶な体勢で回避したため、隙が生まれてしまう。  
「……これでカタをつけるぞ!」

スキヤニングチャージ!

宇覇がトドメと言わんばかりに分身を戻してメダルを読み込み、  
A・クワガタホーン・スタンサンダーで梅花を痺れさせ、A・カマキ  
リソードを投げて切りつけ、最後にA・バツタレッグの蹴りで場外に  
追い込んだ。

「梅花君場外!宇覇君の勝利!」

「ミッドナイト……モウ限界でス……」

「分かったわ!」

ミッドナイトが個性の眠り香で宇覇を眠らせる。

結局俺が目覚めたのは決勝の少し前だった……

甘夢 対 煉黒

「ぐっ……いい加減止まったらどうなんですか!?!」

ドレミーがドレキングの状態でレ級と力比ベをして拮抗している。  
全体的に高スペックであるものの、重量だけはその体躯の割にあまり  
ないドレキングでは陸上でのデバフによって重量のあるレ級にあま  
り差をつけられなかった。

「鍛エタのは私もなんだぜ?くくくく……」

ドレキングは既に弾用の悪夢を全て消費。補充には多大な隙を晒  
すためここからはレ級との純粋なパワー勝負になる。

「……ウラア!」

「ぎゃあ!」

レ級の尻尾がドレキングの顔に噛みつき、ドレミーは怯んでしまい  
力が抜け、その隙に煉黒が一気にドレキングを押し出して場外へと持

ち込んだ。

「甘夢さん場外！煉黒ちゃんの勝利！」

「負けました……20分も粘ってこれですか……痛覚遮断の機構もつけないとですね……」

「ふう……流石に私も疲れたよ……さて、最後に宇覇が相手かあ……勝てるかな？」

「……宇覇さん、危うくプロテイヤになる所でしたからね。念の為用心してください」

「わかってるって……」

## プトテイラノ決勝戦

『いよいよ決勝！己の暴走を抑え込んで戦う男！分倍河原 宇覇！対するは全てパワーでねじ伏せる！煉黒 鬼姫！』

「煉黒……俺は全力で行く。だから……このコンボを使う。いいな？」

そう言っつて宇覇はプテラ、トリケラ、テイラノのコアメダルを一枚ずつ体内から取り出した。

「！ちゃんと制御出来るのか？」

「一度抑え込めたし、内蔵を削って体内のほとんどをセルメダルとコアメダルに変えたから今の俺は限りなくグリードに近い。だから大丈夫だ」

煉黒がプトテイラコンボへの変身を制御できるか疑うが、宇覇は既に対策を施しているようだ。

宇覇が変身の意志を見せると、嵌められているコアメダルがその意志を汲み取るように外れ、代わりにひとりでに恐竜メダルが装填された。

「さあいくぞ……変身！」

《left》キン！ 《left》

キン！

キン！

《left》プテラ！ 《left》

トリケラ！

テイラノ！

プットツテイラノザウルス！

「はあ、はあ、はあ……」

「そウ来なくツチャな……！」

見事プトテイラコンボを制御した宇覇に応える為に、煉黒は今出せる最高出力のレ級で真つ向から叩き潰すことにした。

『おいおい！宇覇のやつ、見た事ない姿になったぞ?!プテラ、トリケ



ラ、テイラノ!? あいつの個性は虫の能力と分身だろ!？」

『あのメダル……準決勝で出てきたメダルだな。あんな事もできるよ  
うになったのか……』

プレゼント・マイクが突然のプトテイラコンボに驚愕し、イレイ  
ザーヘッドが冷静に分析する。

「分倍河原君……それ、ちゃんと制御できてるのね？」

「大丈夫デス……しつかり制御シテイマす……」

ミッドナイトがプトテイラコンボを制御できているのか宇覇に問  
い、宇覇は常時制御できると答える。

「……その姿でも問題ないとして許可するわ! さあ、R e a d y……  
? G O !」

「オラア!」ズボオ!

宇覇が恐竜メダルの力を込めて地面に手を入れて、テイラノサウル  
スのアギトを模した戦斧、メダガブリューを引きずり出す。

「驚イタ……モウメダガブリューヲダセルノカ!」

「うらア!!」

「ソソナ大振り当たルカよ!」

興奮して言葉のほとんどがカタコトになっている煉黒に宇覇がメ  
ダガブリューで切りかかるが、単純な軌道の攻撃のため簡単に避けら  
れてしまう。

「今度ハコツチの番だナ!」

「G A A A A A A A A A A A A A A A A!!」

煉黒が全門斉射で突進してくる宇覇を止めようとするが、宇覇は雄  
叫びを上げながら構わず突進し、煉黒にメダガブリューをぶつける。

「!? 個性が……使えない! 人間態に戻された!」

「安心しろ……しばらくすれば治る……さあ、トドメだ!」

宇覇は体内からセルメダルを2枚取り出してメダガブリューに食  
べさせ、バズーカモードに変形させる。

『ガブツ、ゴックン! プットツテイラノヒツサーツ!!』

「はああああああ……セイヤアアアア!!」

ドツゴオオオオオン!



## 表彰式でガタキリバ

「梅花、やった張本人が言うのもなんだけど、大丈夫か？」

「大丈夫！何本か骨は折れたけど、リカバリーガールが治せる範囲のものだから宇覇は心配すんな！」

宇覇がギプスや包帯などをつけたボロボロの梅花を心配する。が、梅花は問題ないと元気いっぱいに答える。

そんな中、ミッドナイト先生が表彰式に移ると説明する。

「さあ！表彰式に移るわよ！メダルの授与はもちろんこの人がするわ！」

「H A H A H A H A！」

「私がああああ……」

「我がヒーロー！オール「メダルを授与しに来たア！」オ！」

「「被りまくりましたね（だな）」」

「……もっかい言っちゃ……ダメ？」

「「ダメ（です）」」

「お、おほん！まずは甘夢少女の表彰だ！奇抜な策のオンパレードにおじさん腰が抜けちゃったよ！だけど煉黒少女にパワー負けしてしまったのは地力不足かな！それさえ克服すれば文句なしの1番だったかもしれない！これは己の未熟さとして受け取るんだ！」

「ふふふ……ありがとうございますオールマイト。あ、これをどうぞ」  
そう言ってドレミーは懐からデフォルメされたドレミーが描かれた枕を取り出す。

「？ 甘夢少女、これは？」

「私の個性で作った甘夢印の快眠枕です。快眠を保証し、さらに悪夢を見にくくなるので、わざわざ来てくれたお礼として是非どうぞ……」

「おお！最近寝付きが少し悪くてね！助かるよ！」

オールマイトはドレミーから快眠枕を受け取って次の表彰に移る。

「さて、次は煉黒少女だな！パワーでのゴリ押しも相手が格上だと意味を成さない！テクニクも磨いてオールマイティに戦えるように

するんだ！君の課題はそこかな！でも、重戦車の如き快進撃は素晴らしかったよ！はい！という訳で君は2位のメダルだ！惜しかったね！」

「悔しい！でも受け取ります！」

煉黒は少し涙目になりながらもレ級の姿でメダルをしっかりと受け取る。

「H A H A H A！時にはそうやって受け止めるのも大事さ！さて、いよいよ1位の表彰だ！分倍河原少年！」

「……宇覇と呼んでください。分倍河原は義父さんと被るので」

「おっと、これは失礼！……君の決勝戦のあの姿、もしかしてだけど……あの斧で切りつけられると個性が一時的に使えなくなるのかな？」

「はい。ちよつと待ってください。……ふん！」ズボオ！

オールマイトの質問に答える為に宇覇はメダガブリューを表彰台から引きずり出す。

「このメダガブリューとあの姿……プトティラコンボは全てを無に帰す力を秘めています。なので使うのは控えるつもりです」

「うむ！力には責任つてのが必ず伴う！それを理解しているなら問題ないね！君の力は破壊者にも守護者にもなれてしまう。だからこそ制御できた君は素晴らしい！という訳でコレ！1位のメダル！これで君のメダルコレクションが増えたね！はい、どうぞ！」

「「謹んで受け取ります！」」

「what!?!宇覇少年！分身したらメダルが誰に渡せばいいか分からなくなる！戻してくれ！」

「「あつ……ジャンケンで誰が受け取るか決めるか！さーいしよーはぐー！ジャ〜ンケン……ホン！」」

「よっしやー！じゃ俺で！」

ちよつとしたアクシデントがあったが、宇覇はメダルをしっかりと受け取る。

「さて！今回ここに立ったのは彼等だった！しかし！ここに立つ可能

性があつたのはここに居る全ての人にあつたのも事実だよ！皆さん！  
！確実に次代のヒーローの芽は伸びてきている！さあ！ご唱和ください！  
「セーラーの！」

「ニクス 「お疲れ様でした！」ウルトラ！……ええ!?」

「あ、あはは……みんな疲れてるかなって……オホン！気を取り直して！  
もう一度！セーラーの！」

「ニクスウルトラ!!」

職場体験でプトキリバ  
ヒーロー名でもガタキリバ

「今日のヒーロー情報学はちよつと特殊だ。」

(ヒーロー情報学はそんな得意じゃないんだよな……)  
宇覇はヒーロー情報学が苦手だ。逆にドレミーは得意な方だそう  
だ。

「コードネーム……ヒーロー名の考案だ！」

「二胸膨らむヤツキターー!!」

「ヒーロー名か……」

「お前らにはプロヒーローから指名を受けている奴もいるんだ。それ  
じゃあ発表するぞ。」

甘夢	4930人
宇覇	3251人
煉黒	2123人
爆豪	1295人
轟	1859人
破巖	760人

・  
・  
・  
・  
・  
・

「今年はどうつかの誰かさん達を筆頭に暴れまくったせいで複数人同時の指名が多くなって、それでいて偏った数になった。……分倍河原、甘夢、煉黒。特にお前らはやりすぎだ」

(（ホントにあの3人が大暴れしたからなあ……))

(私が1番は意外ですね……てつきり宇覇さんかと思っていました)

(宇覇とドレミーに負けた……あの二人は私よりもヒーロー活動での汎用性高いからなあ……)

(個性消しだとかやっぱビビる奴がでるのかな……)

「今回はこの指名のためのヒーロー名考案という訳だ。仮とはいえ少しでもふざけた名前にすると……」

「地獄を見ちゃうわよ!」

「ミッドナイト先生!」

「ここでのヒーロー名がそのまま定着する人もいるからね!」

「俺はそこら辺のセンスが怪しいからな。ミッドナイトさんに任せる事になった。俺のヒーロー名だってマイクが決めたやつだしな。」

「それじゃ、10分後に聞いて回るわよ!」

20分後、続々とヒーロー名が固まる中、宇覇達はヒーロー名が決まった。

(……まあ、無難にこれだな)「ミッドナイト先生、決まりました」

「見せてみなさい!」

宇覇が出したボードには、無限のイニシャルが描かれていた。

「? 無限? どういった意味があるのかしら?」

「いえ、これで終わりではないです。ここに更に円を1つ足して……」  
宇覇は、マジックペンで∞に丸を1つ付け足して000のイニシャルを書いた。

「無限のその先を意味して、オーズです。どうでしょうか?」

「ええ! 貴方の個性ともベストマッチ! だわ! 採用!」

「では次は私が。私の名字からとって、ドレミー・スイートです!」

「採用!」

「爆殺卿!」

「違う、そうじゃない。次よ！」

「……じゃあ私が。深海ノ姫 ハデス はどうでしょうか」

「……よし、貴女の個性のダークな感じが反映されていていいと思うわ！」

「！ 爆殺帝！」

「まずは殺を抜きなさい！」

爆豪は何がなんでもヒーロー名に殺を入れる使命にでも駆られているのだろうか……

いつもの3人は煉黒の部屋で体験先の一覧表を見ていた。ウヴァは一足先にアパートへと帰ってドレミーと宇覇の料理を作っている。

「……めぼしいのはエンデヴァー事務所、ホークス、ミルコ、ベストジーニスト、シンリンカムイ、エツジショット、……ファットガム事務所は論外だな。下手したら義父さんとかち合って義父さんに連れ出されかねない。他にはリユーキュー事務所……ん？サー・ナイトアイ事務所がある？他には……!?!」

宇覇がめぼしい体験先を探していると、1つだけ、見覚えはあるが、本来なら絶対ないはずの事務所が目に入った。

「仮面ライダー事務所?! ドレミー！ 煉黒！コレ見てくれ！」

「なんですか突然……つて、仮面ライダー事務所？……宇覇さんの所にのみ来ていますね。少々お待ちを……」

ドレミーが手帖を取り出してパラパラとめくる。

煉黒がハンモックから降りて宇覇の握っている紙をひったくる。

「仮面ライダー事務所って……もしかして、転生者の集まりだったり？」

「……俺、ここに行く。ドレミー達はどこに行くんだ？」

「……私はエンデヴァー事務所ですかね。ステインを可能なら止めた



いので。経験もそれなりに得られそうですし」

「私はまだ決めてる途中。あつ、こことかどうかかな！」

「……煉黒には合うっちゃ合うけど、ここに行くのか？もつといい所があるような気もするが……」

その日は時間ギリギリまで煉黒の体験先を決めていた……

宇宙ーキター!!からのソイヤア!……の前に止まるんじやねえぞ……

職場体験当日、宇覇は宮城県にある仮面ライダー事務所へと向かった。

「ここが仮面ライダー事務所か……看板もまんまだな。それにしても、なんか部活動の部室みたいな感じの看板だな……」

宇覇はリュックに入れたメダガブリューとメダジャリバーを取り出し、見つめる。

「解析が正しければメダガブリューと恐竜メダルは俺の個性で生まれたものなんだよな。……俺は何故、プトティラに変身できたんだ?」

少し前に俺はメダガブリューと恐竜メダルの解析の為にウヴァとメダジャリバーを作ってくれた会社……『鉄華団』にメダガブリューと恐竜メダルの解析をかける為に。

「オルガさん!来ましたよ!」

「おお!宇覇じゃねえか!待って……!」

「うわっ!」

オルガと宇覇に呼ばれた男は宇覇に抱きついて突然出てきたヒットマンからの銃弾の雨から宇覇を守る。

銃弾の雨に晒されているとどんどんオルガの体に穴が空いていく。

「団長!?何やってんだよ!団長オ!!」

「うおおおお!!」バン!バン!バン!

「はあはあはあ……。なんだよ、結構たんじやねえか。ふつ……」

「だ……団長……。あつ……。ああ……」

「なんて声出してやがる……。宇覇ア!」

「だって……。だって……」

「俺は鉄華団団長オルガ・イツカだぞ。こんくれえなんてこたあねえ」

「そんな……。俺なんかのために……」

「団員を守るのは俺の仕事だ」

「でも！」

「いいから行くぞ。皆が待ってたんだ。それに……」(ミカ、やっと分かったんだ。俺たちにはたどりつく場所なんていらねえ。ただ進み続けるだけでいい。止まんねえかぎり、道は続く)

「俺は止まんねえからよ、お前らが止まんねえかぎり、その先に俺はいるぞ！だからよ……」

止まるんじゃねえぞ……」

キーボーノハナー

「……復ッ活ッ!!」

「またやってるのかお前らは……」

「まあ、なんだ。挨拶みたいなものさー！」

「ウヴァもやればいいじゃん！結構どう来るか楽しいよコレ！今回は珍しくバナニラでしたね！」

「ああ、今日は何かいことがあっても……」

「新しいオルガBBが出たりして！」

俺は鉄華団団長の五河オルガさんいつものテンプレをしながらウヴァに2人して呆れられる。これはオルガさんと会う時はいつもやってる。

「さて、体育祭で出したメダガブリューと恐竜メダルの解析がしたいんだろ？うちの研究班に任せろ！」

10分後……

「解析終わったぞ！」

「相変わらず仕事が早いな……で、メダガブリューと恐竜メダルはどうなんだ？」

「解析が正しければどっちも宇覇の個性で出来たもんだ！……ただ、増殖方法があるみたいなんだ」

増殖方法？と宇覇達が首を傾げていると、オルガが説明を入れる。

「お前の恐竜メダルはお前以外の周囲から負の感情を微量ながらも吸い取って生成していたんだよ。もうお前の体にも少しづつ増えてると思うぜ？……宇覇は雄英襲撃を実際に受けたんだろ？お前の体はいわば欲望増殖マシンだ。周囲の欲望でセルメダルが増える原理と同じだな。……これからも気をつけるよ？ヒーローってのは絶対に負の感情と隣り合わなきゃいけねえ。何時でもコントロールできるようにしておくんだぞ！俺からは以上だ。セシリアを待たせる訳にはいかねえから俺はここでおさらばさせていただくぞ！」

「……周囲の負の感情を吸い取って生成……か。ウヴア、職場体験当日までプトティラの制御訓練するから相澤先生に連絡しといて。……絶対に暴走なんてするものか！」

宇覇は静かにケツイを満たしたのだった……

以下、GF少尉の書いたもののコピペです！一部作者の編集アリですが……

名前：五河オルガ（イツカ・オルガ）

年齢：20歳

性別：男性

身長&体重&容姿：第二期オルガ団長

#### 【概要】

名前を日本式にしただけのまんまオルガ団長。

個性もあまり使いどころがなく、物理的に超虚弱体質のためヒー

ローではなくコスチューム製作専門の株式会社【鉄華団】の社長をしている（才覚は結構ある模様）。

ロボ系列のコスチュームや雄英のあのロボの製造を担当する中規模会社を父親から引き継ぐ形で社長に就任しているが、容姿からしてまんまなので実はソレスタルビーイングの団長であつたりする……かもしれない。

メンタル面では間違いなく最強の人。（例に挙げるとディアボロのゴールド・エクスペリエンス・レクイエムのアレを平然と耐えているのと同じ）

本人も案外この個性を楽しんでいたりする（辟易しながら）  
原作知識はアニメから。

実は既に既婚しており、どういう因果かシャルロット（IS）が嫁である。嫁の方もなんだかんだ言っただう死ぬのかを毎日楽しんでいるような……

尚、部下の三日月はアトラとやっぱりあの娘とくっついている。

#### 【個性詳細】

個性：オルガBB（ネットの玩具）

その名の通り、BB物を使用できる、もしくは強制的にそのイベントに移行されるだけの自動発動型個性。

基本ステータスからHP1、防御力天元突破というピーキーを過ぎた残念個性で、肉壁にしかない。

そしてとにかく些細な事で臨死体験するのでかの梅干し先生でもメンタルやSAN値がゴリゴリ削れる。

矢受けの加護ももちろん健在で、ヒーロー、ヴィラン問わず飛び道具は彼に磁石のように吸い付いて飛んでくる。

故に現場を曇らせるわヴィランにも心配されるわと、色々とネタ個性である。

寿命以外では死なないが、攻撃力はほぼないし体がおかしな変形をするもんだからウィジランテ活動は程々にしている（殴

自己紹介するときはいつも死にかけ。

建物から出るときはどこからか何かしら飛んできてキボウノハ

ナー

これがオルガクオリティである（  
しかもマフティードダンスも普通にできる！（誰得）

今度こそ宇宙ーキター!!からのソイヤア!!そして  
不思議な女の人

「すみませ〜ん、分倍河原 宇覇とウヴァです!職場体験に来ました  
!」

「邪魔する。……随分とごちゃごちゃな部屋だな……」

俺は仮面ライダー事務所の少しボロめのドアを叩き、反応が無かつたのでギイと音を立てながら開ける。

そこには、左に近未来な家具が、右には茨と果物の意匠を取り入れた家具が置かれていて、左右に1人ずつ、それぞれリーゼントの不良のような男と、お人好しそうな男がソファに座っていて、2人は疲れているのか、片方は大きないびきをかきながら眠っていた。

「……起きろ!職場体験に来た意味が無くなるでは無いか!」

「……んあ。……! す、すまねえ。昨日はちよつと強い奴を追ってたからな。ご覧の通りだ」

「えつと……分倍河原 宇覇とウヴァです。よろしくお願いします  
!」

ウヴァが怒声をあげると、いびきをかいていたリーゼントの男が目  
を覚まして謝る。

宇覇はその見覚えのある顔に困惑するが、確証を得られていないと  
考えて追求することは無かった。

「俺は如月 弦太郎だ!こっちで寝ているのは葛葉 紘汰!事務はこ  
いつに任せつきりなんだ。昨日の仕事後処理が結構難儀してな  
……こうなったら半日経たないと起きないんだ。そつとしいてく  
れ」

如月 弦太郎に葛葉 紘汰。どちらも聞き覚えのある名前だ。

「よし、早速だけどパトロールだ!……ヒーロー名は?」

如月は不思議な形状のアイテムを懐から出し、腰に装着して学ラン  
を着ながらついて来いとジェスチャーして、振り返りヒーロー名を聞  
いてくる。

「オーズです！仮面ライダーオーズです！」

「！……ここじゃ先輩だな！」

如月が意味深な言葉を言うと共にドアを開けて事務所を出る。

「あら、体育祭で優勝した子かしら？もしそうならサイン、貰えるかしら？」

「いいですよ！」

宇覇は17歳程の高身長的女性にサインをお願いされ、〇〇〇のサインを書く。下にHappy birthday!!という文字も添えて。

「独特なセンスをお持ちなんですね。ふふっ……」

「こうすればすぐに分かるでしょう？サインの記念すべき第1号として誕生祝いとして追加でサービスもしました！」

「それは光栄ね。世界に一つだけのサイン……素晴らしいわ」

「では、俺はこれにて」

「貴方、名前は？」

「ヒーロー名ならいいですよ。……オーズ。仮面ライダーオーズです！」

宇覇は名前を聞かれたので、ヒーロー名ならばと思い、オーズと答える。

「オーズ……覚えてたわ。ありがとうね？オーズ」

そう言つて女の人は手を振りながら立ち去っていった。

「おばちゃん！いつもトンカツオマケしてくれてありがとな！ん？

どうしたんだオーズ。……あの人が気になるのか？」

「……なんか、やたら花の匂いがしたんですよ。花畑にでもいたのかな……」

「……ここら辺には花畑なんて無いぞ？」

「観光客ですかね……なんだか不思議な人でした」



「観光客……ねえ」

その後、特に事件も起きずに1日が終わった……

## 黒く蝕む外套の噂

「そういうえば如月さん、先日の厄介事ってなんだったんですか？」

仮面ライダー事務所の部屋で宇霸が如月に昨日の出来事を聞いてくる。

「……オーズもヒーロー志望なら知つといた方がいいな。……ジャバウオックの事を」

「ジャバウオック……不思議の国のアリスに出てくる架空の生物の名前だな。リユークユウのような個性か？」

ウヴァがヴィラン名から個性を推理し、如月が正解だと答え、ジャバウオックの説明に入る。

「ジャバウオックは殺人以外の犯罪……主に総額にして1億に上る金品の窃盗、不法侵入、個性不法使用、公務妨害、器物損壊により指名手配されている女性ヴィランだ。……こいつが中々厄介でな。そいつはヒーローヴィラン問わず密かに人気があつてな。そいつらの妨害のせいで書類は増えるわ現行犯で逮捕できないわで散々なんだよ！なんだか俺自身もあいつの相手はやりづらいしよ……」

「面倒な相手ですね……」

「個性の方も厄介なんだ。個性名『黒蝕竜』。発動異形型と呼べいいか……？まあ複合型なのは分かっているんだ。普段は個性で作られるドレス状の戦闘服を着ていて、体育祭の破産って奴みたいに異形の生物に変身もできる。鱗粉を周囲に撒き散らして発火させて目くらましとかをしたり、異形の生物になってパワーでゴリ押しもしてくるんだ。対応力の高さなら俺の個性も負けないんだが……何せサイズだけはどうしようもねえ。それで苦戦して、時間を稼がれて協力者の手引きで逃げられる。戦い方はいつもこうだ」

「……強いただけでなく、引き際がわかつていてかつ逃げ足が早いのか。ヴィランとしては1番厄介な奴かもな」

「最近こちら辺に出没している情報が増えているからオーズも気をつけるんだぞー！」

「はー」

「了解だ」

こうして俺たちは次の日に備えてぐっすりと眠った……

以下、蹴翠 雛兎さんが書いていただいたプロフィールです！

敵名：ジャバウオツク

名前：黒姫 竜火

年齢：不明

性別：女性

身長：約160cm

体重：不明

個性：【黒蝕竜 ゴアマガラ】

ゴアマガラの力の行使、及び、ゴアマガラへの変化

【発火】

まわりに小さな火を発生させる。レンジは彼女が見えてる範囲であり、指を鳴らすことで発動する。上記の個性と合わせることでにより大爆発を起こすことも可能である。トリックがあるようだが……

概要

殺人以外の犯罪：主に総額にして1億に上る金品の窃盗、不法侵入、個性不法使用、公務妨害、器物損壊により指名手配されている女性ヴィラン。見た目は完全に黒蝕の竜姫である。

ヒーローからは『ヴィジラント擬きのヴィラン』『悪意を持って正義を成す者』『悪意ある悪意を犯罪によって潰す女性』、一般市民からは『ダークヒーロー』『ヒーローのようなヴィラン』『裏世界のヒーロー』と評されている。

中々に強く、主に使う能力も異形型と発動型の複合型な為、一度発動してしまい、異形と化すと、もはやその後は個性消去などの抑えが

効かない為かなり逮捕に苦戦を強いられる羽目となり結果その逃げ足の速さも相まって逃げられる羽目となる。

しかも、起こす犯罪全てが未解決事件を解決する為や悪意ある犯罪者を叩き潰す為で、その上殺人を起こしていないどころか無関係な人物は傷一つつけていないことから余計にタチが悪かったり。（この為、一部のヒーローからは犯罪者ながら現行犯以外の時は姿を見かけても見逃してもらったりする事がある）

性格はかなり優しく、正義感が強い。また、子供好きであり子供が傷つけられると恐ろしいほどまでに激昂する。

一部のファンからは、言葉使いが上品な為、実は元大金持ちのお嬢様なのではないかと言う噂もあったり…。

なお、黒姫はモンハン『は』知っているが転生者ではないのでこの世界が物語の世界であることすら知らない。

また、オールマイトの怪我とトゥルーフォームを昔から知っている人物の1人でもある（なんならその状態を知っててオールマイトを助ける為にヴィランをしているなんて話も…）

実は隠れファンや協力者がかなりいる為に、中々ヒーローや警察達の捜索が進まない。もちろん警察やヒーローの中にもおり、基本潜伏してる為、余計捕まりづらくなっていると言う裏話があるそう…。

## 花咲く狂怖 前編

「……なんだって？頭に花が咲いた人を見たって？」

職場体験2日目、如月がパトロールをしていると奇妙な出来事を八百屋のおじさんから聞いた。

「ああ、常連さんの1人にパンジーが頭に咲いていたんだ。本人は気にしてないって言ってたけど、あの人の個性は指を2倍の長さに伸ばすもんだしなあ……誰かの個性でもこころ辺じや花を咲かす個性なんて聞いた事無いし……」

「……もしかしたら思い当たりがあるかもしんねえ。八百屋のおやっさん！情報ありがとなー！」

「おう！がんばんなー！」

如月がありがとうと言いながら八百屋から離れ、宇覇の所に駆け寄る。

「オーズ！今日はパトロールは切り上げる！事務所に戻るぞ！」

「はい！」

「了解だ」

事務所に戻った如月達は起きていた葛葉に奇妙な噂を起こせそうなヴィランについて聞く。

「葛葉！頭に花咲かせるヴィランって聞き覚えあるよな？」

「……おはようございます、如月さん。……確か、ルナティック・フラワーという名前のヴィランが当てはまった筈です。身長は170程、いつも黒い日傘を持ち歩いている、個性は『花咲病』で体に花を咲かせる。……治療法があるが、治療法はバラバラで本人の意思でのみ治療法の違いに関わらず外せる。……基本的に無害なヴィラン。噂の範疇を出ないけど、最近は花咲病を発病させて欲しい人物にのみ絞ってやっているそうだ。だが、やっている事は犯罪だ。オーズ、ウヴァ。君達も注意してパトロールに望んでくれ」

「はー」

「……」

宇覇は威勢よく頷き、ウヴァは静かに頷いた。  
そして事件は夜に起きる……

今回は青野薔薇さんの案を採用させていただきました！

名前：花咲 狂姫（はなさき きょうき）

敵名：ルナティック・フワラー

誕生日：4月21日

年齢：17

性別：女性

身長：約175cm

体重：本人の要請で閲覧禁止（閲覧したら頭に真っ赤な花を咲かせる事になります）

装備品：仕込み銃の黒の日傘（闇職人に注文したモノ。マシンガンになっており、銃弾や攻撃系個性も防げれる矛にも盾にもなれる代物）

個性：花咲病（はなさきびょう）

#### ◆個性説明

身体から花を咲かせる個性。発病対象者によって花の種類、開花する場所の部位は異なる。（花の種類、開花する場所の部位はお任せします）

『病』の為、治療可能。ただし、発病対象者によって治療法が異なる為、治療法が分からずそのままにする者も居る。ただし、治療法の差異に関わらず共通している事があり、無理矢理花を引っこ抜こうとすると養分が一気に吸い取られて衰弱死するので注意。（治療法以外に『花咲病』を治すなら彼女本人に治させる他ありません）

『花咲病』の花は発病対象者から栄養を吸い取って咲いている為、対象が死ぬまで自然に枯れる事は無い。

また、身体から咲く花の量が多ければ多い程、吸い取られる栄養も

多くなる。

栄養を吸い取られる発病対象者の食事の量は、通常の2倍になる。  
(勿論、身体から咲く花の量によって変わる)

また、発病対象者が死亡した場合、花が今まで吸い取った栄養を発病対象者の死体に与え始め、身体の腐敗を防ぐ為、『花咲く美しい死体』となる。『花咲病』を患っていた期間だけ腐敗の進行が防がれる。

#### 概要

前世では花が好きで花屋を営んでいた24歳の女性だが、ネットで偶然、架空病の『花咲病』のイラストを見て虜になってしまう。

「嗚呼、実際に人間の身体から花が咲いたら、どれほど美しいのだろう………」

それほどまでに『花咲病』に魅入られた彼女は、事故でトラックに跳ねられ死亡する。

転生後、ヒロアカの世界に転生したと理解し、個性が『花咲病』と理解した彼女は内に秘めていた狂気を我慢する事が出来ず、14歳のとある日に学校のクラスメイト全員に『花咲病』を発病させる。この時は、個性の暴発という事で注意を受ける程度だったが、その後も自身の欲求に耐えられず、次々と相手を『花咲病』にさせて自ら敵(ヴィラン)なるのだった。

ただ、本人は『身体から花が咲いた人間』の见たいという欲求の為に『花咲病』を発病させているだけで、それ以外に害を為す事をしない。むしろ、その欲求が無ければヒーローにもなれたのである。その為、必要以上に相手から花を咲かす事もしないのである。

ただ、自身に敵対する相手には必要以上の花を咲かせて栄養を花に吸い付かせて弱らせるようで、本質はヴィジランテに誓い敵(ヴィラン)である。

ファンも居るようで、『花咲病』を自ら発病させたいというファンも居れば、死ぬまで『花咲病』を患い、葬式では火葬ではなく土葬を頼む者まで居る。

原作知識は、『ヒーローインターン編(壊理&オーバーホールと接触

時)』『敵連合VS異能解放軍編(死柄木、泥花市を壊滅させて勝利する)』まで。

彼女がジャンプを買い始めた時、ヒロアカは『ヒーローインターン編』をやっていた為、『ヒーローインターン編』前のヒロアカの内容は知らない。

知らないからこそ、敵(ヴィラン)になって『花咲病』を発病させまくっていた。

なお、前世では24歳の為、知識はそれなりにあるが転生後の14歳の事件以降、学校に行っていない。

花が好きなので、花を大事にしない奴は天誅。

『花咲病』の発病対象者に害を為す存在も天誅。(マスゴミも含まれません。とあるマスゴミが発病対象者に悪質な内容で取材した後に、天誅されてトラウマになった)彼女の敵連合とオバホ、異能解放軍は大嫌いです。

他の敵対組織の敵対理由

敵連合

アイツ等の個性は、『花を壊す』から

オバホ

エリちゃんを実験動物にした外道許すまじ

異能解放軍

性格、幹部メンバー、色々と無理

口調は、「です」、「ます」。

一人称、私

二人称、貴方／貴女

ブチギレモードの二人称

お前、貴様

容姿

黒髪のショートで瞳の色は赤の美しい顔。服は、『童貞を殺す服』と呼ばれた白のブラウスに紺色のスカート。黒のロリータシューズを履いている。(後、すごく……美脚)



## 花咲く狂怖 後編

「また身体に花が咲いた奴が見つかったアアア!?」

夕方のパトロール中に情報収集をしていた如月が駄菓子屋で素っ頓狂な声を上げる。

「まあ落ち着きな如月くん。危害は無いらしいし、本人も気にしていないでそのままにしてるって言ってるし……」

「それは危険な花なの!花咲病って個性で生やした殺人花なんだよ!」

「でも特に変化は無かったぞ?別にアホになったりしてないし……」

「それ以上にやばいんだよ!少しづつ養分を吸い取って殺すんだ!とにかく!花咲かされたら病院で診てもらえよ!」

「お、おう……」

如月は駄菓子屋のおじちゃんに注意するよう呼びかけて宇覇の所へ戻った。

「クソっ!たかが花って意識が強すぎる! みんなあんまり重く受け止めてないな……どうすりゃいいんだ……?」

「いつその事こちらから探し出して仕掛けますか?」

「あら、また会ったわね。どうしたの?」

如月達が悩んでいると、凜とした聞き覚えのある声が聞こえる。

「あ、昨日の……」

「ここで会ったのも何かの縁ね。自己紹介をしましょうか。私は花咲はなさき狂姫きやうき。旅する花屋さんよ。この辺りはいい花が咲いているわね……」

「? そうなんですか?」

「ええ。とっても素晴らしくて美しい花たちよ。と言っても、あまり理解してくれないんだけどね……」

花咲さんは少し儂さを醸し出しながら話す。

「そうなんですか……」

「さて、貴方達にもいい花が咲きそうだわ……」

「え？」

「！ 如月さん！頭に花が！」

「てめえ……ルナティック・フラワー本人だな？」

「仕方ねえ……戦闘を許可する！個性も思いつきり使い！」

如月が頭の辺りを探ると、1本の花が咲いていた。

ルナティック・フラワーと判断した宇覇とウヴァは戦闘態勢に入る。

「ふふふ……あの人の言っていた事は本当ね。確かにいい花が咲いた……この前わざわざ保須市まで立ち寄った甲斐があったわ！」

恍惚とした表情となり、ルナティック・フラワーは上機嫌になる。

「逃がすか！」

「あら、ここで捕まるのはゴメンね。それに、最近は自殺志願者に絞ってやってるのよ。慈善事業だし、何より無理矢理引っこ抜いたりしないからwin-winの関係なの。花を咲かすのを邪魔して欲しくないから、それを伝えるためよ。はい、その花は外してあげるわ。ではごきげんよう……」

ルナティック・フラワーがウヴァ達に追われそうになるも、指をパチンと鳴らして持っていた傘の骨から花びらが舞い、姿をくらまされた。

「大丈夫かお前達！」

いつの間にか頭の花が外れていた如月が2人に駆け寄る。

後にルナティック・フラワーとの遭遇について事情聴取が警察により行われ、こうして波乱の職場体験は終わりを告げた……

ドレミー編に続く……

## 夢の支配者の職場体験 夢の支配者と半冷半熱とヘルフレイム

エンデヴァー事務所の前で轟はドレミーとばったり出会う。

「……お前もか。ドレミー」

「はい、No. 2なら得られることは大きいので。……何か不都合があったでしょうか?」

「……いや」

「……そういえば、最近エンデヴァーさんの夢の内容が変わっているんですよね……」

「……夢の内容?」

変化した夢の内容に轟が興味を示す。

「よく夢の住人の方のオールナイトだけを見つめていた夢がほとんどだったのですけれど、最近はオールナイトとその近くにいる家族を見つめているらしいのです。……あの人も少しずつ変わろうとしているのかもしれない。自覚の有無は別としてですが」

「親父が……家族を?」

「あの人なりに仲直りしたいのですかねえ? まあ、頭の片隅にでも留めておいてください」

「……そうか」

ドレミーが轟にエンデヴァーの夢の変化を伝えていると、エントランスから受付の女性が駆け寄ってくる。

「轟 焦凍様、並びに甘夢 様。お待ちしております。到着次第、コスチュームに着替えて社長室に来るように、と社長より申し付けられております。更衣室へのご案内しますので、こちらにお越し下さい」

「分かりました。轟さん、ここはどちらが素早く着替えられるか競走です。早着替えはヒーローの基礎スキルになるかと」

いや、ならねーよ!と周囲のサイドキックは一瞬思ったが、何故か

一理ある気もしたので、後日早着替えの練習をするか検討したそうな……

「……」

「ふふふ、私の圧倒的勝利ですね。轟さん、エンデヴァーと同じぐらい地……シンプルなコスチュームなのですから、素早く着替えられるかは重要かと」

「なんでそんなに早着替えを念押しするんだ……？」

「サラツと俺と焦凍のコスチュームをバカにしたな貴様!？」

「してません」

「だが地味と言お「言ってますせん」………まあいい。お前達のヒーロー名を聞こう。まずは焦凍、お前からだ」

「チツ……俺のヒーロー名は『シヨート』だ」

「シヨート……自分の名前から取ったか!いい名前だ!」

轟が舌打ちしながらヒーロー名を答えると、エンデヴァーは平静を装いつつも内心では歓喜していた。『焦凍』という名前は親である自分たちが考えて付けた名前だ。それを自らヒーロー名にしたというのだから、父親でもあるエンデヴァーとしては嬉しかった。……実際は考えるのを面倒くさがった轟が適当に付けたヒーロー名なのだが、それは秘密だ。

そしてドレミーの番になる。

「では、私の番ですね。名字の甘夢から取って夢の支配者、ドレミー……スイートです。どうですか?いい名前でしょう?」

「ああそうだな、いい名前だ」

「おやあ……?焦凍さんの時とは随分と態度が違いますねえ?……ああ!もしかして最近エンデヴァーさんが焦凍さん達家族に謝る夢を見ていたのはそういう事なんですかあ!」

ドレミーはニヤニヤとドレ顔でエンデヴァーを煽り、エンデヴァーのプライベートをサラツとサイドキック達の前でバラすというゲスい事をした。

サイドキック達の半分以上は生暖かい目でエンデヴァーを見守る

という、ある意味拷問に近い事をしてしまった。

当のエンデヴァーはプルプルと羞恥で震えており、ほっこりした顔をしているサイドキック達は後でしつかりとしごいてやる事を誓った……

「焦凍！甘夢！お前たちは未熟だ！仮免すら持たぬ身でヒーロー名を名乗るなど烏滸がましい！サイドキックたちや他の者たちがお前たちをどう呼ぼうが俺は関知せんが、俺はお前たちの実力を認めるまではヒーロー名では無く、名前で呼ぶことにする！いいな！」

「はい、轟 炎司さん！」

「どっちだよ。というかなんで親父の本名知ってるんだ？」

「何故貴様は人のプライベートにずかずかと入り込むのだア!!」

「出会って数秒でテノヒラクルーする人に発言権はありません。この手帖のお陰で昨日どこにいたか、どんな夢を見たのか、全てが書かれており、プライベートは筒抜けです。焦凍さんの場合は母親に会っている夢が多いですね」

「そうなのか」

「夢の世界の住人は感受性が高いので、欲望のまま行動することが多いのです。あ、エンデヴァーさん、この後個人でお話があるのでよろしいでしょうか？」

壮絶な親子喧嘩？

「……本当なのか!？」

「本当です。轟 燈矢君は生存しています。……なんなら捕まえました」

「捕まえた……? どういう事だ!？」

「こういう事です」パチン!

エンデヴァーによる人払いが済んだ中、エンデヴァーとドレミーの  
みがある部屋でドレミーが指を鳴らす。すると、ピンク色の球体が突  
然現れてパチンと弾ける。

球体が弾けた所に居たのは……

体が継ぎ接ぎだらけとなった轟 燈矢を大きくしたような男であつ  
た。

「燈矢……なのか?」

「クソ親父……!」

大粒の涙を流すエンデヴァーとは対照的に男は憎しみを込めた表情のまま体から炎を放出する。

「燈矢……! 会いたかった……!」

「会いたかったよ……これでお前を殺せる……!」

「燈矢……何故……!」

「そこまでです。お二方」

男が今にもエンデヴァーを焼き殺しそうな状況の中、ドレミーが割って入り仲裁する。

「貴方達、ケンカは被害の無い所でやって下さい。……互いに思いつきり暴れられる場所を用意するので少々お待ちを」

そう言つてドレミーは宇宙色の渦を発生させ、どうぞと言つて2人が入るのを促す。

男が渋々と渦に入り、エンデヴァーもそれを追いかけるようにして渦に入る。

◇◇◇  
◇◇◇  
◇◇◇  
◇◇◇

「( )は……?」

「何処かと思つたら俺を捕まえて放置しやがった場所じゃねえか……」

夜のように夜ではない不思議な空間に2人が別々の反応をしていると、ピンク色の球体が現れて弾け、ドレミー?が見えた。

「ようこそ、夢の世界へ。貴方達には夢の世界の住人と戦ってもらいます」

「……さっきの奴とは別の奴だな?」





親子喧嘩終了。再び集いかける家族

「ぜえ、ぜえ、ぜえ……」

「はあ、はあ、はあ……」

「はい、ミルクココアです」

「すまない……」

「……」

夢の相手と（ある意味壮絶に）戦っていた荼毘とエンデヴァーは息を切らしており、ドレミーにぬるめのミルクココアを渡される。エンデヴァーと荼毘は受け取りグイッと一気飲みする。

「……さて、互いの心情も分かった事ですし、仲直りです」

「……すまない、燈矢。俺はあの時なんて事を……父親失格だ……」

「気づくのが……遅すぎなんだよ……クソ親父……」

そう言い合い2人はドサリと倒れる。

「あらあら……これは軽度の疲労ですね。今日の職場体験はペアになっちゃいましたね。どうします？現実世界の私が暇になっちゃいました」

「うーん……轟さん呼びましょうか。この2人を家に返してあげましょう」

「となれば早速連絡ですね。轟さーん……」

ドレミー（現実世界）が宇宙色の渦を開き轟を呼び出す。

「うおっ。ドレミーか。5時間も何をしていたんだ？」

轟が宇宙色の渦からにゅつと出てきたドレミーに驚き、5時間も何をしていたのか聞いてくる。

「ようやく親子喧嘩が終わりましたね。エンデヴァーさんと轟 燈矢さんを家に送ってほしいのです。住所を教えてくださいればそこにワーブさせるので」

「……ちよつと待て。今、燈矢って言わなかったか？」

ドレミーの爆弾発言により轟のよく出しているポーカーフェイスが瞬く間に崩れる。

「はい。あなたのお兄さんですね」

「でも顎の骨だけが見つかったって親父は……」

「まあ、実物を見れば分かりますよ。ささ、この中に……」

「……親父と……誰だ？」

「あ、髪染めてるので分かりにくいですよ。彼が轟 燈矢ですよ」  
「本当に……燈矢兄さんなのか？」

「はい。何らかの手術により燈矢さんは顎の骨を取り戻しています。……どこのルートからなのかは本人の夢を通しても掴めませんでした。まるでそこだけ『意図的に』記憶が抜け落ちたような感じでしたね。まあ後ろめたい者が施したのは確実です。さて、床でお兄さんを寝かせる訳にはいかないでしょう？ 早めに家に案内しないと……おや？ エンデヴァーさんは起きたようですね」

「ぬう……焦凍、家に帰るぞ……ぐう……ぐう……」

「……2度寝したな」

「2度寝しましたね。運んであげましょうか。ではエンデヴァーさんの方が重たそうなので、ジャンケンで負けた方がエンデヴァーさんを運ぶということでしょうか？」

「……最初はグー——」

結局エンデヴァーはドレミーが運ぶことになった。——  
軽々と背負っていたが。

「……兄さん、ぐっすり眠っているな」

「そりゃあ夢の世界のエンデヴァーさんとお話してましたからね。……正直私でも引くレベルで泣きまくってましたよ？これがその音声です」

ドレミーがイヤホンを轟の左耳に取り付ける。

『燈矢アッアッアッアッアッアッ!!すまない……俺が悪かったッ……ああああああああ!!』

「……キモッ」

「夢の世界の住人は感受性が高まるんですが、ここまで極端なのはごく少数ですので安心してください。……ちなみに夢の世界の轟さんは——」

「勘弁してくれ……」

◇◇轟宅◇◇

「では私はこれにて。家族水入らずのまま過ごしてくださいね?」

「……ありがとう。燈矢兄さんを助けてくれて」

「いえいえ、私だって卵とはいえヒーローですから」

「……じゃあな、ドレミー」

「ふふふ……良い夢を……」

歩いて帰っていくドレミーを見届けた後、轟は玄関からエンデヴァーを——ちゃんと丁寧に——引き摺り、燈矢を背負って玄関を開ける。

「ただいま、冬美姉さん、夏雄兄さん」

「おかえり焦凍……その人は?」

「燈矢兄さんだ。こんな姿だけど生きていたんだ……母さんにも伝えないとな……」

「……ここは……俺の……家?」

「燈矢兄さん……」

「おかえり」

## 悪夢（ナイトメア）・パニック

職場体験3日目、エンデヴァー事務所で異変が起きた。  
それはパトロールに向かう直前の事だ。

「よし、全員揃ったな……ぐう……!?」

「親父！ あ、あああああ!!」

「皆さん、どうしたんですか!?!」

突如ドレミーを除く全てのメンバーが倒れて苦しみだし、凄まじい量の汗をかき始めた。

少しすると黒い霧が倒れた人達に発生してまとわりつき、ドレミーは霧から何かが出てきたのを見る。

「はあ……怠リイのです。面白そうだったから仕掛けたのにこんなピンポイントに天敵がいるなんて……」

霧から現れた、サイズが完全にあっていないダボダボの実験服らしきものを着た黒と白の髪の少女と思わしき人物はドレミーを心底嫌そうに見ていた。

「貴女は……少なくともヴィランなのは間違いないですね!」

ドレミーは少女をヴィランと判断。宇宙色の渦を展開して夢の世界へ強制的に引きずり込んだ。

「お互い自分の土俵に入った……ってとこかな? まあいいや。ここならいざと言う時に逃げれるし」

（私を天敵と言い、この夢の世界にさして驚きもしない……相手は私に似た個性なのは確実!）

「逃がしませんよ……!」

「私は飽きたし、後は虎馬に任せよつと」

そう言つて女性は悪夢に包まれて追跡ができなくなつてしまった。

「虎馬……トラウマ? 彼女の追跡もしたいですが、今はエンデヴァーさん達の事が心配ですね……夢の世界の私に彼女の追跡を任せて、もしもの時は“彼”に力を借りましょう」

そう言つてドレミーは宇宙色の渦で倒れていたエンデヴァー事務

所の社員達を夢の世界に引きずり込む。

案の定、過去に存在した凶悪犯罪のヴィランなどがいた。これが彼女の個性で生み出した虎馬なのだろう。

エンデヴァーの場合はヴィランとしての轟 燈矢が沢山のヒーローを燃やし尽くす光景、焦凍の場合は、最もギクシャクしていた時の家族の光景と、轟親子のものは特に深刻であった。

「さて……轟親子のトラウマは私が対処するとして……来ましたね」

「わーたーしーがー……!!」

「夢にも来たッ!!」

「いつもすみませんね、夢の世界のオールマイト。……私はエンデヴァーとその息子のトラウマ処理をするので、他の力技で解決できるものは頼みましたよ?」

「全く、人使いが荒いね甘夢少女は! ま、ヒーローはお節介をしてなんぼだからね! とうっ!」

オールマイトは次々と虎馬をちぎっては投げ、ちぎっては投げを繰り返して、どんどん凶悪ヴィランの虎馬を倒していく。

「むむむ……これは中々面倒な程こびりついたトラウマですね。少々勿体ないですが、手っ取り早くルビーで終わらせますか」

ドレミーは、悪夢祓いのチカラを持つルビーを掲げて悪夢から轟親子を解放し、エネルギーの供給源であろう悪夢が消えた為、彼らに取り憑いている虎馬は次第にシルエットが薄くなり、最終的に消滅した。

しばらくすると、夢の世界のオールマイトも虎馬を退治し終わったようで、夢の世界でのパトロールへと戻った。

「……困りましたね。一応彼がいるとはいえ、ステインが捕まえられるか……」

結局、エンデヴァー事務所のメンバーが目覚めたのは次の日の朝で、その間にヒーロー殺し、ステインは“3人”の雄英生徒によって捕まえられた。

以下、蹴翠 雛兎さんからのアイデアをベースに1部作者の独自解釈を含めたものです！

名前：虎馬 悪夢（コウマ メア）

年齢：不明

性別：女性

身長：低い！

個性：『ナイトメア・マスター』

以下、能力毎に分類

『悪夢』

簡単にいうならば、ダークライのナイトメアの性能：なのだが、こちらは起きていても、代わりに幻覚として『悪夢』を見せつけることが可能。悪夢の内容に関してはある程度操作することは可能だが、その人物が最も恐れることか、起きて欲しくないことが多い傾向にある。（ただし、正夢として起こり得る予知夢に近い『悪夢』も見せることも可能である）

個性の性質としては転生者のドレミーと似ているが、こちらは使い方は限られており、相手にとって『悪夢』である様でなければならぬという条件がある。弱点は夢を操れるものと悪夢払いの力を持つルビーである。

後述する『トラウマ』『予知』とあわせることで更に凶悪なものとなる。

『トラウマ』

相手の思い出したくない過去、一番嫌な記憶、黒歴史を操る能力。

一言に操るといってもただ操るのではなく、『触れた相手のトラウマを作成する』『相手のトラウマを深刻化する』『トラウマを再現する』『別の人のトラウマをある程度形を変えて入れ替える』『起こること全てをトラウマにする』e t c : と突拍子のない内容でなければ、トラウマに関することならなんでもできる為、色々と幅広く扱える。また、一定以上トラウマが発生すると《虎馬》と呼ばれる存在が発生。それを排除するまですずっと、生きる気力を失ってワンピースのネガ

タイプホロウを受けた状態となる。(排除方法は《虎馬》が具現化する夜に直接殴るなどして倒すか、心操などの精神干渉できる個性持ちは虎馬に取り憑かれてるものに干渉することで心の中に入り込める為、それで倒すか、彼女にお願いして消してもらうしかない)

なお、悪夢を見せることでトラウマにすることもできる為、本来できない筈の突拍子もない出来事をトラウマにすることも可能にすることができると言える。

また、虎馬達のエネルギー源は主に悪夢からの供給となっている。トラウマが残酷なものであればあるほど消費エネルギーも増大する。

### 『予知』

簡単に言えば、また相手の過去を見たり、未来を予言することができる能力。使用できる時間は1時間まででその後、使い切ったら12時間のインターバルがある。

使う為には『オン』と『オフ』を口に出さなければいけない。

勿論、サー・ナイトアイのものとは別物なので注意。

### 概要

サイズが完全にあっていないダボダボの実験服を着た黒と白の髪の毛の少女(?)。

性格は陰湿かつマイペースかつ超弩級のSだが、子供の前ではどんな状態であれ完璧なまでの近所の優しいお姉さんを演じ切る。

普段は悪夢の中で過ごしている模様。

オール・フォー・ワンが脳無の試作として生きたまま個性を与えたのだが、その結果苦手意識のあった彼女はすぐさま彼へと能力を行使しトラウマを植え付けた為、現在では彼にとって(オールマイトほどではないにしろ)恐怖の対象の1つであり、一番会いたくない人物リストに入っている。

というか、彼女の存在そのものがトラウマと化している。

時折、悪夢の中から出てきてはヒーローっぽいことをしている模様。(そしてそれと同時に犯罪(強盗と不法侵入)をし、ついではかりに不特定多数の誰かにトラウマと悪夢も植え付けてゆく。つまり、差し引いて考えるとクツソ迷惑)



犯罪者であることと、そのオール・フォー・ワンの元手下ということもあつて現在警察とヒーローから捜査されているものの、中々捕まらない人物の一人である。

口癖は「怠リイのです」らしい。

## 炉心核は砕けない 北斗と碎竜

ここは群馬県グンマータウン。仲良くモヒカンが暮らす世紀末タウンである。治安はお世辞にも良くないが、活気に溢れた良い街だ。そこに1人の少年(勿論ターバンのガキではない)、破巖 碎拳が訪れる。北斗事務所というヒーロー事務所という場所で職場体験をする為なのだが……

「ヒヤッハー!! 金を出せえ! そしたらこの女は解放してやる!」  
強そうなモヒカンがナイフを振りかざして銀行強盗をしていた。周囲の見た目は強そうなモヒカン達もナイフにビビって手を出せない。

(ホントは個性使ったらダメだが……やるしかないか!?)

破巖が構える中、上下レザーのジャケット(袖なし肩パッド付き)とパンツを着用しており、ジャケットの下にシャツを着込んで、レザーの色はブルーもしくは黒、右腕にはリストバンド、左腕にはバンテージと、何故か統一しないものを巻いている男が来る。

「なんだあてめえ! 近づいたらぶっ殺すぞ!」

モヒカンがそう叫んで男にナイフを振り下ろすが、突然男がジャケットを引き裂いて奇声をあげる。

「ほああああたあ! アータタタタタタタタタタタタタタタタタタ  
ほああああたあ!」

北斗 百裂拳

「ん〜? おめえのパンチなんて蚊ほども効かねえなあ!」

そんなモヒカンの言葉を無視して男は振り返り……

「お前はもう、お前はもう、死んで気絶している」

「うわらば!」

ナイフを持っていたモヒカンは変な声をあげて倒れ伏し、白目を剥いて気絶していた。

「お前が破巖 碎拳だな？ 俺は霞 ケンシロウ。ケンと呼んでくれ」

「ハ、ハイっす！」

破巖は木造建築の二階建ての家に連れられた。立て札には北斗事務所と書かれている。

「ここが北斗事務所……」

「……入って構わない」

「お、お邪魔します……」

ケンシロウに促されて破巖が家に入ると、3人の男がちゃぶ台を囲んで座っていた。銀髪で色黒の大男が碎拳を見定めるように見つめ、黒髪の細身の男が茶をすすりながら破巖を興味深そうに見て、珍妙なヘルメットを被った男がケンシロウに茶々を入れる。

「む？ ケンシロウ、彼が破巖 碎拳か？」

「彼がケンシロウの目になつた男……」

「ケンシロウ、おめえが弟子とるなんて、明日はオールナイトがこの家を壊しにでも来るのか？」

「あ、あの！ 破巖 碎拳ッス！ 今日からしばらくお世話になりませう！」

破巖がペコリと頭を下げると、銀髪の大男と細身の男は頭に手を当てて、ヘルメット男は呆れるようなポーズをとる。

「ケンシロウ……俺達の事を離さないでここに連れて来たのか？」

「ちゃんと説明はしろとトキの兄者から散々言われてたじゃないか！」

「む……すまないジャギ。忘れていた」

ケンシロウはどこかうっかりしている所があるようで、ケンシロウはジャギと呼ばれた男に説教され始めていた。

「トキ……？ !! もしかして、秘孔の個性を持つトキさんですか!？」

霞 トキ。特殊なツボの位置を把握出来る、『秘孔』の個性を持つ医者で、特別に医療に個性の使用許可を貰っている数少ない者である。

その腕前と、鍼を使うことから奇跡の鍼医師とも呼ばれており、医学界では、日夜秘孔の位置を突き止める為の研究がされる程と言われればどれだけ有名か分かるだろう。碎拳も幼い頃、碎竜の個性がコントロール出来ずに重傷を負った時、トキの秘孔治療により一命を取り留めたことから恩を感じていた。

「ああ、私がトキだ。確か破巖君は自身の個性のコントロール不足で重傷を負った子だったかな？」

「覚えていてくれたんですか……！」

「患者の事を覚えておくのは悪い事ではない。それに、特に君は印象に残っていただけさ……さて、私の話ばかりではなんだし、ラオウ兄さんも自己紹介をしたらどうだい？」

「……うむ。数日間は同じ屋根の下暮らすのだから話した方が良いか。我が名は霞 ラオウ。世間からは拳王の称号で呼ばれていた者だ」

「……もしかして！ 無個性でありながら、個性ありでの無差別格闘技の大会で颯爽と現れ、並みいる強豪をその拳ひとつで真っ向から叩き潰し、その次の大会を最後に忽然と姿を消した……あの世紀末覇者ラオウ！ 俺、ファンなんです！」

「もう良い。昔の話だ……」

ラオウはどこか不満そうな顔でそっぽを向く。ようやくジャギによるケンシロウへの説教もちょうど終わったようで、ケンシロウが立ち上がって破巖についてくるように促す。

「……まあいい。ケンシロウ、今回の説教はこれくらいにしておいてやる。弟子の事を待たせる訳にもいかんからな」

「ぬう……破巖、ついてこい。あそこはここからかなり遠い。通り道と侮るな」

「？ はい……」

◇◇山道◇◇

「い、移動って山になんの用なんですか!？」

「修行だ。君には2つの技術を学んで貰う。……闘気と水影心だ。君にその2つを覚え、君が良ければインターンで様々な技を教える。闘気は勿論、水影心は俺の持っている技の中で一二を争う習得難易度だ。……死にはしないだろうが、待っているのは地獄だぞ……」

「闘気と水影心……俺、絶対に習得してみせるッス！」

破巖はそう意気込んで山道を登る。その先が本当に地獄だと知らずに……

修行は辛いよどこまで

「あんぎやああああ!!」

破巖が今している修行は滝行。……勿論ただの滝行ではない。元々硬い外皮を持つている破巖には、特別コースとしてケンシロウが上流から流木を大量生産。その流木が破巖の体に打ち付けられる。最早やっっているのは滝行ならぬ、多木行である。

しかも滝の流れも強いため、地味に痛いし、破巖の皮膚は高压水流が苦手なので尚更痛い。

「よし、あと10分はやるぞ」

「ひiiiiiiiiii!!」

ケンシロウの実質的な死刑宣告に顔を青ざめさせる破巖。だが、修行は勿論これだけではない。

「ぜえ、ぜえ……少し休け「次は個性を使わずに指による刺突で薪を割れ」……はい？」

破巖が倒れそうになるも、ケンシロウは秘孔を突いて疲労を打ち消す。破巖はそのまま指で突いて薪を割る修行に移される。

「いつでえええ!!超痛えよオ!!!」

「突き指か? ならこの秘孔を……よし、治ったぞ」

「治ったアアア!?!」

「つべこべ言わずに薪を割るんだ。修行は始まったばかりだぞ」

「ひぎiiiiiiiiii!!」

◆◆帰り道

「……」

破巖は考えた。オーラの的なものである闘気は分かる。だが、技を見て盗む水影心はこの修行と関係ないのではと……

(……まだ気がついていないか)

そう、ケンシロウは無意識のうちに同じ技を覚えさせる為に合間合間で北斗神拳の技を使っていた。だが、破巖は1ミリも気づいていなかった!

「つかれた……」

「疲れたのか？ ならこの気持ちよくなりながら爆死する秘孔を「お願いだからやめてください……」……そうか、楽になると思っただがな……」

かすれた声で答えるも、ジャギの冗談にトドメを刺され破巖はこの日、ぐっすりと眠った……そして、目が覚めると……

「……んあ？ ……ああああああああ!!?」

「うるさいぞ破巖……修行に遅れてはならない。今日もするぞ。朝食は山小屋に用意してある水と乾燥食品だ」

ケンシロウに櫓に乗せられたまま引きずられて山道にいた。

#### ◇◇職場体験最終日

「あだだだだ……滝行のせいで腰が……!」

「……」

破巖は多木行で腰を痛めてしまいが、ケンシロウは腕を組んで放置する。

「……クソオオオオ!!」

破巖は連日の地獄の修行で遂に頭がおかしくなってしまう、自分でケンシロウがよく突いてきた辺りに指を突き入れる。

「……あれ？ 痛みが引いた……」

「……」

ふと、ケンシロウの方を見てみると、ケンシロウの周囲にオーラのようなものが見えた。

「……こうか?」

破巖がケンシロウの真似をしてみると、破巖の周囲からオーラが湧き出てきた。その闘気は荒々しく、破巖の個性であるブラキディオスの性格を表しているかのようであった……

「……見事だ、破巖。水影心と闘気の習得を一度に終わるとはな……」

今回俺が教える事はもうない。残りの時間は休むぞ  
「…………いよっしやアアアアアアアアアア!!」



## 混沌とした場とヒーロー殺し 鳴海探偵事務所

「しっかし、探偵事務所なのにヒーローってどういう事なんだ……？」  
保須市の大通りで梅花 誠一はそう独り言ちる。彼が選んだのは鳴海探偵事務所。調べた所、2人で1人のヒーローというのがキャッチコピーの変わったヒーローで、最近株を上げているのを知ってここを選んで来たのだ。

「おー、あつたあつた。ここが鳴海探偵事務所か……」

大通りから外れていて、少し錆びている探偵事務所の看板の下にあるインターホンを鳴らし、梅花は相手を待つ。

少しすると、一人の男がドアを開けて出てきた。

男の容姿は、外ハネの黒髪を持ち、右側（向かって左側）が文房具によって留められている髪型に、指穴付きカットソーの上に見た事のないブランドのロングパーカーを着用し、クロップドパンツを合わせ、地球を模した飾りのついたネックレスを首から下げている服装だった。

「やあ、鳴海探偵事務所にようこそ。僕はフィリップ。Wヒーロー・仮面ライダーWの半身さ」

「…半、身……？」

フィリップの妙な自己紹介に首を傾げる梅花。それにフィリップは顎に指を置いて仕方ないかと呟く。

「そうだね。合体して変身するヒーローって思えばいいさ」

「……あー、何となく想像できました」

「……さて、早速だけど仕事の説明をしよう。梅花君、最近この辺りでよくニュースになっている、“ヒーロー殺し”は知っているかな？」  
フィリップが椅子に座り梅花にヒーロー殺しについて知っているか問う。

「あ、はい。なんでも、各地でヒーローを殺してまわっているヴィラン

だつて……」

「うん。それがニュースで流されている内容だね。……でも、僕の個性で見た所、彼は思想犯だ」

「フィリップさんの……個性？」

「僕の個性は『地球の本棚』。本を媒介する事によって発動するデータベースのようなものがあつてね。僕の相棒が色んな人に聞き込みをして、僕の個性でヴィランの正体や素性を検索する。これが鳴海探偵事務所の基本スタイルなんだ」

「……それで、ヒーロー殺しの事はなにか掴めたんですか!？」

「そうだね。まず、この保須市に滞在しているのは確実。次に判明しているのは容姿、個性、戦闘スタイル……そして、ヒーローを殺し回るという理由は英雄回帰という思想の下行っているそうさ。簡単に説明すれば、見返りを求めないのがヒーローで、それ以外はヒーローの資格はないという考えだ」

「……でも、それでヒーローを殺すなんて間違ってます!」

「そう、そこなんだ。思想がどれ程高尚なものでも、その為に人を殺したらその時点でアウトだ……つと、とりあえずヒーロー殺しの話はここまでにしよう。まだ情報が不完全なんだ。僕の相棒が調査を終えるまでは君の個性を鍛える」

「俺の、個性……」

「さあ、早速奥にある部屋で軽く君の個性を見ようかな。僕は準備をするから待っていてくれ」

「はいっすー!」

梅花が奥の部屋に入ると同時に、フィリップは浅く思考の海に入る。

(……まさか翔太郎と離れ離れになつて、こんな世界に無理矢理連れ出されるとはね……まあ、彼も翔太郎に似ているから今はそれなりに何とかなっているけどね……)

思考の海から上がったある事を思い出すフィリップであった……

## ヒーロー殺し

「さて、体育祭の映像を見たが、君は個性の使い方が大雑把すぎる」  
少し物が少ないガレージにて、フィリップは梅花にそう告げる。

「大雑把……？」

「僕の個性で調べただけだけど、君の個性の性質って、エネルギーの増幅とほぼ同じなんだ」

「エネルギーの増幅……もしかして、エネルギーの総量と容量を大きくする個性……っていう意味ですか？」

「そうだね。例えるなら、どんどん電池を大きくしていく感じなんだ。それで、使い方が大雑把って言った理由は、何でもかんでも構わず大きくしてしまっているからさ」

フィリップの説明をどんどん理解していく梅花。

「例えるなら、沢山の風船をひとつの口で膨らましている感じかな……。それだと息切れが早くなるし、弱いヴィランへの手加減も難しくなる。……そこでだ。膨らます風船の数や種類を絞る」

「攻撃力だけを上げたり、防御力だけ上げたり、個性の持続時間を上げたり……。そうすれば息切れは自然と遅くなるし、コントロールもより繊細にできるはずだよ」

フィリップの言う通り、梅花の課題は早すぎる息切れであった。手っ取り早く息切れ対策をするにはうってつけであり、すぐさま梅花は自身の個性で倍加を繰り返し試行錯誤し始める……

「……くうっ！ はあ、はあ、はあ……」

夕方、個性の連続使用により遂に倒れる梅花。フィリップも頃合かと思いい切り上げようとする。

その瞬間、ガレージのドアが開く。

「お、こんなところにいたのかフィリップ！ こいつが梅花 誠一だよな？ 俺は左 正太郎！ 仮面ライダーWの半身だ！」

「ふう……その説明、ちよつと前にもう聞いてます……」

体力を回復させるために梅花がガレージの床に寝そべってる間、フィリップと正太郎が何かを話していた。しばらくすると、フィリップが白紙の本を取り出して、時々ホワイトボードに何かを書き込んでいく。

「梅花君、明後日は保須市の路地裏を中心にパトロールするよ。どうやらヒーロー殺しはそういう薄暗い所で出没しているのが証明された。万が一、一人でヒーロー殺しに遭遇したりといった危ない時はこれを使うんだ」

そう言つてフィリップは蜘蛛のような腕時計を渡す。蜘蛛の腹と胸の辺りに黄色いUSBメモリを模した物が刺さっており、梅花が手に取ると、腕時計が動き出して梅花の手首にしがみついた。

「このスパイダーショックは糸を出したり発信機を飛ばせる。これで上手く時間稼ぎをするんだ」

「……はいっすー！」

保須市の路地裏でフィリップと正太郎、そして梅花がパトロールしていると、梅花のスマホに二通のメールが届く。それに気づいた梅花がメールの内容を確認すると、どんどん顔が青ざめていく。

「フィリップさん！ 正太郎さん！ エンデヴァー事務所でトラブルがあつてエンデヴァー事務所の人達はパトロールに向かえないそう

です！ それと、変なメールが来ました！」

「……正太郎、これは関係性自体はない。だけどこの座標、ここからかなり近いね……この座標で起きていることに対しての妨害、そう考えるべきかな？　すぐに向かおう」

実際は唯の偶然なのだが、その偶然が2人の雄英生を大いに苦しめていた。

バタフライエフェクト……それは原作改変を望む転生者に立ちはだかる、とても巨大な壁である。Aを救えば、本来救われる筈のBが殺されるというように、保須市の大通りは5体の脳無によつて混沌としていた。一体の脳無は地元のとあるヒーローが抑えているが、他の脳無はエンデヴァー事務所という最高戦力が居ないため、本来の何倍も苦戦していた。

黒い脳無が一人の名も無きプロヒーローを叩き潰そうとする。

そこに、一条の赤い粒子が通り、一体の脳無を輪切りにした。

その粒子は残像を残しており、それを見た者は、ロボットのようないた目であつたと語つた……

腕が棘に覆われた脳無が一瞬でプロヒーローとの距離を詰め、串刺しにしようとした。そこに何本ものレーザーが脳無の体を貫き、脳を破壊された脳無は機能を停止する……

周囲のプロヒーローの証言によると、空には青い翼のようなものを背中に生やしていたロボットが飛んでいたとのこと……残像のロボットとの関連性は不明である。

「ぐっ……！」

梅花達が座標に到着すると、飯田と一人のプロヒーローが倒れており、フルカウルを発動している緑谷がボロボロになりながら戦っていた。

「お前の血、貰つたぞ……」

赤い布を各所に巻いた男が血を舐めとると、途端に緑谷は動きを止

めて倒れてしまう。

「緑谷！ フイリップさん！ 正太郎さん！ 個性の使用許可を！」

「……プロヒーロー、仮面ライダーWの名にかけて、梅花 誠一の個性使用許可を与える！」

梅花がファイティングポーズをとり、正太郎が赤いバックルのようなものを腰に巻いて、緑色のUSBメモリを模したもののボタンを押す。それと同時にフィリップの腰に巻かれた、全く同じ見た目のバックルに紫色のUSBメモリを模したもののボタンを押して入れる。サイクロン！ ジョーカー！

メモリを挿した途端、フィリップが倒れて、正太郎の体を薄いポリゴンのような物が覆い、緑色の右半身、紫色の左半身のデザインが施され、その冠する名を表すW字のアンテナが現れ、最後に白いマフラーが巻かれる。これが2人で1人のヒーロー……いや、仮面ライダー。仮面ライダーだ。

『「さあ……お前の罪を数えろ！」』

## 英雄回帰と日常の素晴らしさ

「ハア……貴様が噂に聞いた仮面ライダーWか。本物が見極めさせてもらうぞ……」

『梅花君は自己強化しながら緑谷君を助け出してくれ。まずはこいつを抑える』

ヒーロー殺しが刃こぼれしている日本刀を構え、フィリップの音がエコーしながら響き、仮面ライダーWが疾風の如きスピードで駆けてヒーロー殺しに回し蹴りを入れる。

「速い……ハア、スピード重視のヒーローという事か……?」

「おっと、切り札をそう易々と話す訳にはいかねえんだ。フィリップ、ヒートメタル使うぞ!」

梅花が緑谷を下がらせたのを見た仮面ライダーWは、どこからともなく赤色のメモリと銀色のメモリを取り出して、ダブルドライバーのサイクロンメモリとジョーカーメモリを入れ替えた。

ヒート!メタル!

仮面ライダーWの右半身が赤色に、左半身が銀色に変わり、メタルシャフトによる力強い棒術でヒーロー殺しの連撃を真っ向から弾く。

「戦闘スタイルが変わった……? 先程までスピード重視の戦い方だったが、色が変わってからはパワー重視に変わった……ハア、厄介だな……」

「ご明察。言っておくが、パワー勝負に関しては負けないぞ!」

仮面ライダーWはメタルシャフトの先端を赤熱させて更なる連撃を叩き込む。ヒーロー殺しもカウンターの要領で何度か攻撃を入れるが、メタルメモリによってもたらされる強靱な肉体に刃が阻まれてしまう。

「チツ、血が無ければ……」

『『トドメだ!』』

メタルシャフトの重い一撃が腹に入ったヒーロー殺しは怯み、隙を晒してしまう。

ヒート！メタル！  
マキシマムドライブ！

赤熱していたメタルシャフトに炎が纏われ、それを垂直に振り回す仮面ライダーW。脳天に直撃したその一撃は、遂にヒーロー殺しの意識を刈り取った。

「ふう……梅花君、ヒーロー殺しをスパイダーショックで拘束しておいてくれ。俺達は……」  
ルナ！トリガー！

『これで君達の護衛をする。外部からの妨害が入る可能性があるからね……っと、すまないね緑谷君』

ルナメモリとトリガーメモリに変えてルナトリガーに変身する仮面ライダーW。

気絶しているヒーロー殺しを、動けるようになった梅花が引きずり、飯田がネイティブというプロヒーローと支え合いながら歩き、応急処置を済ませた緑谷が意識を失っているフィリップを背負いながら、昔仮面ライダーWを見たことがある気がして気になっていた。

大通りの脇道から1人の小柄な老人が現れる。

老人の割にはコスチュームっぽい格好をしているなど梅花が思った瞬間、緑谷を見た途端に形相を変え、老人とは思えない速度でこちらに接近してくる。

「ん!? 何故お前がここに!!」

「グラントリノ!!」

「緑谷、知り合い?」

「うん、僕の職場体験先のヒーロぶふう!!?」

「座ってるつつつたる!!」

その老人を見るなり緑谷は声を上げ、梅花が聞き、緑谷が彼の説明しようとした瞬間、顔をグラントリノに蹴られていた。

「まア……よくわからんが、とりあえず無事なら良かった。生き延びるのが最優先だ」

「グラントリノ……ごめんなさい……」

グラントリノが怒りながらも安否を確認し、無事確かめている



と、足型がついた緑谷が謝る。

するとグラントリノが出てきた細道からぞろぞろと他のプロヒーロー達がやってくる。

その中の、骨っぽい一人が仮面ライダーWの前に出てくる。

「ン？ 仮面ライダーWじゃねえか。久しぶりだな」

『やあボーンズ。ヒーロー殺しは捕らえたよ』

「そうか。ウチの事務所はエンデヴァアの旦那が倒れたせいで苦労したが、引退する程の怪我人も特に出なかったぜ」

「……！ ヒーロー殺し！」

「偽者が蔓延るこの社会も、徒に力を振りまく犯罪者も、肅清対象だ。

全ては、正しき社会の為に……！ 正さねば……！ 誰かが……！ 血に染まらねば……！ 英雄を取り戻さねば!! 来い、来てみる贖物ども……！ 俺を殺していいのは本物の英雄、オールマイトだけだ!!」

その鬼気迫るオーラに、殆どの人は動けなくなった。仮面ライダーWとボーンズは話を聞いて、己の考えを話そうとした……だが、一人の勇敢な少年は動いた。

「お前が……そんな事を語るな！ お前の言う正しい社会の……為なら何を……したっていいのかよ！ たくさんの……人の幸せな未来を奪ってまでやる事かよ！ この……わからず屋が！」

「……見事だ。……貴様、名はなんという」

梅花がそう言って籠手の着いている方でヒーロー殺しを震えながら殴った。その時のヒーロー殺しの表情は、まるで救われたかのようにだった……

「梅花……誠一だ……覚えとけバカヤロー……！」

「そうか……梅花 誠一……覚えたぞ」

「っ!?伏せろ!!!」

ヒーロー殺しがそう言った途端、グラントリノは空中から迫り来る何かを察したのかこの場にいる人全員に聞こえるくらいの声で叫ぶ。翼の生えた脳無が此方に向かって飛んできたのだ。

「!?」

女性ヒーローがそう声を上げた瞬間、滑空して来た脳無は攻撃して

くるのではなく、フィリップを降ろしていた緑谷を捕らえて上空へと飛び立った。

「緑谷君!!」

「え、ちよ……!!」

不意の連れ去りに身動きが取れなかった者達の中、飯田が叫ぶ。かなりの速度で飛び立つ脳無にグラントリノは自身の個性が届かなくなるかと悟ったのか冷や汗を流す。

「やられて逃げてきたのか…!?!」

「『任せろ』」

脳無が逃走成功すると思いきや、大量の銃弾とレーザーが正確に脳無だけを貫いて脳無が墜落。緑谷は仮面ライダーWのルナボダイの伸びた腕で回収された。

「……! ヒーロー殺しが居ない!」

「アレは時間稼ぎって事だったのか!」

ヒーロー殺しが消えた道には、ヒーロー殺しのものと思われる滴った血が文字を象っていた……『ウメバナセイイチよ、いつかまた会おう』と……

期末試験でもガタキリバ  
帰ってきたぞ雄英に

「アッハツハツハ！マジか!!マジか爆豪!!」

A組の教室では切島と瀬呂が大声で笑い爆豪に指を指す。

No.4 ヒーロー、ベストジーニストの元へ職場体験に行った爆豪は普段の爆散髪とは裏腹に、なんとベストジーニストそっくりのピツチリとした8:2の髪型になっていたのだ。

「笑うな！癖ついちまって洗つても直んねえんだ。おい笑うな！ブツ殺すぞツ!!」

本人も相当気にしている様でその身体はプルプルと震え今にもキレそうになっていた。そこに宇覇とウヴァが入る。

「……爆発させれば治るだろ。それでもダメなら俺の放電で焦がしてやる」

「ぬうん！」BOMB!

ウヴァの助言? により元に戻った爆豪。

「なんだかんだ言つてウヴァちゃんもA組に馴染んできたわよね」

「今までは空気がみたいな感じだったけど……なんて言うか、A組になった! って感じ!」

「何それ……まあ、ウヴァはウヴァだよね……」

「おい、どういう意味だお前ら」

順番にそう言つてウヴァに軽く問い詰められると、芦戸は話を変えて職場体験の話を持ち掛ける。

「あ、そういうえば響香ちゃんも職場体験どうだったのー?」

「無視するな!」

「え?ああウチはデステゴロさんの所に行ったけど、めぼしい活躍は人質取つて立て籠つたヴィランを捕まえたくらいかなあ……」

「へー!ヴィラン退治までやったんだ!羨ましいなあ!」

「避難誘導とか後方支援だけで、実際交戦はしなかったけどね」

「それでもすごいよー!」

「いやいや本当それぐらいだよ。暇な時間は街中走り回って体力作り。ぶつちやけ学校の授業よりしんどかった。」

耳郎は耳朵のプラグを指で回しながら苦笑して答える。  
すると、今度は蛙吹が自身の体験の話をする。

「私もトレーニングとパトロールばかりだったわ。」

一度隣国からの密航者を捕らえたくらい」

「それすごくない!!?」

「そうかしら?」

「いや、十分凄い体験だよそれ…」

驚く芦戸に蛙吹は首を傾げると耳郎がそう言う。

ふと、麗日が通りかかったのか蛙吹は麗日に声を掛ける。

「お茶子ちゃんはどうだったの?この一週間」

「…とても、有意義だったよ」

麗日は白目となり気を解放している様なオーラを放ちながら喋る。

※闘気ではありません

その息は白く、何かに目覚めた様な表情だった。

「目覚めたのねお茶子ちゃん」

「バトルヒーローのどこ行っただっけ」

蛙吹、耳郎が拳を突き出し素振りをする麗日を見てそう言う。

彼女はゴリゴリの武闘派ヒーローガンヘッドの元へ職場体験に行き、対人戦の基礎を学んできたらしい。

麗日を椅子に座って見ていた上鳴と峰田は若干引いており、上鳴は呟いた。

「たった一週間で変化すげえな…なあ、お前んところはとうだったのよ?」

「変化?違うぜ上鳴」

上鳴の問いに峰田は指を振るとその指の爪を噛み始め震え出す。

「女つてのは…元々悪魔のような本性を隠し持ってるのさ!!」

「Mt.レディのところで何見た…?それやめろ」

ガジガジと爪を噛みながら答える峰田に上鳴はその行為を止める。

「さて皆さん、おはようございます。……はあ」

「あ、ドレミーちゃんおはよう。……？　なんか様子がおかしくないか？」

「ああ、破巖さんの事を見れば分かりますよ……すごく……世紀末でした」

「おはようみんな。切島、俺は皮むけたぞ……！」

少しげんなりしていたドレミーの後ろから、明らかにオールマイトよりもヤバい画風の破巖が教室に入る。

「……誰?」

「ああ、なんかいつの間にか画風がオールマイトよりもゴツくなつてたんだ……ほら、鬨気も出せるぞ……」

((麗日ちゃんよりも明らかにヤバいのがいた!!))

「鬨気……あつ(察し)」

「修行、辛かったんでしょね……」

宇覇が破巖の体験先を何となく察し、ドレミーは手帖を見てヤバすぎる修行メニューに口をあんぐりと開けていた。

続けて煉黒が入る。

「ふう……おはようみんな」

「煉黒も元気無いな……大丈夫か？」

「あー、うん。ちよつと個性がね……」

煉黒も煉黒で苦労していたようだ。後で話を聞くべきだろうか？　宇覇とドレミーは考える。

「それにしても……危なかったのは緑谷に飯田、それでB組の梅花だよな……」

「ヒーロー殺し……逃げたんだよな(原作乖離か……ドレミーが言っていたエンデヴァー事務所での件といい、5体が増えていた脳無とい……何より、明らかに原作より数の多い指名手配ヴィラン……)もしかして、仁義父さんみたいな物語のキーになる存在の未来を変える……と、それを補填する為の何らかの作用がある……?」

「確か梅花君、ヒーロー殺しに名指しされていたんだよな……」

宇覇が原作乖離の事を考察していると、上鳴がふと、軽い気持ちで言葉を発した。

「でもさあ、確かに怖えけどさ。尾白動画見た？アレ見ると一本気つつーか執念つつーか、カツコよくね？とか思っちゃわね？」

「上鳴くん……！」

「え？あつ……飯田……ワリ！」

上鳴の言葉に慌てて緑谷が止めに入る。

ステインの行動に飯田の兄がやられた事を思い出して上鳴は咄嗟に飯田に謝罪する。

保須事件の一件以来、動画サイトで一般人が投稿したのかヒーロー殺しステインの執念についての動画が上げられていた。

それをメディアによって明かされた彼の思想は『英雄回帰』と呼ばれており、その主張は『ヒーローとは見返りを求めてはならない。自己犠牲の果てに得うる称号でなければならぬ』というものであった。

彼の言葉とそのカリスマ性に惹かれ動画は瞬く間にランキング1位となり、上鳴の様にかっこいい等と言う人達も増えている様だった。

そして、梅花の叫びによって、『英雄回帰』の思想を無闇矢鱈に振り回すべきでないという考えがもたらされ、やるなら手段を選び、時間をかけて行うべきという声も強くなっている。

そして、上鳴が爆弾発言をしてしまったかと恐る恐る飯田を見ると、彼は口を開いた。

「いや……いいさ。確かに信念の男ではあった……。クールだと思う人がいるのもわかる。ただ奴は、信念の果てに肅正という手段を選んだ。どんな考えを持とうともそこだけは間違いないんだ。俺のような者ももうこれ以上出さぬ為にも!!改めてヒーローの道を俺は歩む!!」

「……うん。ヒーロー殺しは途中で道を間違えちまったんだろいな。

飯田、英雄回帰の思想を正しく伝えるには、お前みたいな奴が必要なんじゃないか？」

「うむ！……とりあえず次の授業に備えて席につきたまえ！」

## レースも負け無しプトキリバ

午前の授業が終わり、午後のヒーロー基礎学の時間となったA組生徒達は学校から少し離れた特殊な運動場へと集合していた。

工業地帯を催したその場所はとても運動場とは言えない光景だった。

流石雄英高校。……だが、どうやってこんな大規模な建造物を建てているのだろうか？

そんな中、授業が始まる時間が差し掛かると、何処からともなくオールマイトがヌルつとA組の前へと現れた。

「ハイ、私が出来た。ってな感じでやっていくわけだけでもね。ハイ、ヒーロー基礎学ね！久しぶりだ少年少女！ 今日元気か!？」

「ヌルつと入ったな」

「久々なのにな」

「パターンが尽きたのかしら」

珍しくいつもより（比較的）自然に現れたオールマイトに生徒達はボソボソと言うと「尽きてないぞ。無尽蔵だつーの」と強がる様な表情を浮かべ脂汗を流す。やはり嘘をつくのが苦手すぎる。

すると緑谷がオールマイトのコスチュームを見て興奮気味に「ゴールデンエイジのコスだああ!」と言うと、オールマイトは苦笑して口を開いた。

「職場体験直後って事で今回は、遊びの要素を含めた救助訓練レースだ!」

オールマイトのその言葉に、コスチュームの損傷により体操服を着ている飯田は質問をするべく勢いよく拳手をする。

「救助訓練ならUSJでやるべきではないのですか!？」

「あそこは災害時の訓練になるからな。だけど、今回求めているのはちよつと違う! 私は何て言ったかな?」

「レースですか?」

「YES! そうレース!!」

オールマイトは人差し指を立てて尋ねると、瀬呂が答え、オールマ

イトは頷き説明をし出した。

「ここは運動場γ！複雑に入り組んだ迷路のような細道が続く密集工業地帯！5人2組と6人2組に別れて1組ずつ訓練を行う！私がどこかで救難信号を出したら一齐にスタート！誰が1番に私を助けるかの競走だ!!勿論、建物への被害は最小にな！な！」

「指差すなよ……」

スススと1番やりかねないと言わんばかりにオールマイトは爆豪に指を指し、爆豪は嫌がる様にそっぽを向く。

そしてすぐにオールマイトは最初の1組目のメンバーを選び、その6人はスタート地点へと移動する。

「じゃあ初めの組は位置について！」

「「「はいっ！」」」

オールマイトの指示に、瀬呂、芦戸、飯田、破巖、緑谷、煉黒の6人が返事をする。

位置に立つ5人を他の生徒達はオザシキという謎の場所でモニター画面を見て待機をしていた。

「飯田、まだヒーロー殺しと戦いの傷、完治してないんだろ？見学すりゃいいのに……」

「クラスでも機動力良い奴が固まったな」

「うーん、強いて言うなら緑谷さんが若干不利かしら……」

待機の生徒達はモニター画面の6人を見てそう言っていると耳郎が隣に座る八百万に画面を見ながら話しかける。

「確かに体育祭の時に使いこなしてたみたいな感じだったけど、宇霸達が凄すぎて……」

緑谷は個性の扱いの熟練度に関しては圧倒的ドベ。

そして今回のレースなどどう足掻いてもフルで個性を使えば怪我を免れない。慣れない力をどれだけ使いこなしているかがカギだった。



2人はそう思いながら話していると、他の生徒達は誰が1位になるか予想し、言い合っていた。

「俺は破巖……あー、やっぱ瀬呂が一位っ！」

「トップ予想な。いやいや、煉黒だろ！ アイツってスピード重視の姿があるしな！」

「オイラは芦戸！ アイツ運動神経すげえぞ！」

「デクが最下位」

切島、上鳴、峰田が1位を予想していると、聞いていた爆豪は緑谷をビリと予想する。また、麗日と蛙吹も口を開いた。

「怪我のハンデがあっても飯田君な気がするなあ」

「ケロ」

機動力と言えばエンジンの飯田。入り組んでいて、直線の少ない地帯と言えどその脚力とスピードで駆け抜ければ1位は取れると予想した者は多い。

そして、視点は変わり、各々が準備運動、深呼吸などをして精神を整っている中、破巖はどうするか考えていた。

（ブラキディオスになるのはダメだ……図体がデカすぎて邪魔な瓦礫に阻まれる……竜人形態は身体の柔軟性が落ちるのが不味い……それだと煉黒ちゃんの劣化になっちゃう……ここは闘気を使って基礎能力で勝負するか……？ ……！ よし、竜人形態でいこう）

やや遅れて破巖が竜人形態に変身し、全員の準備が終わったのを確認したオールマイトはマイクを持って大きく合図を出した。

「START!!」

6人は一斉に駆け出す。

工業地帯を地上から駆け出す者、障害物を足場に跳んで行く者など、それぞれが自身の個性を活かしてオールマイトの元へ向かって行く中、瀬呂はテープを伸ばして工業地帯の空中を某蜘蛛男のように移動していた。

「ホラ見ろ!!こんなごちゃついたところは、上行くのが定石！」

「となると滞空性能の高い瀬呂が有利か」

オザシキから見ていた切島が立ち上がり予想していた瀬呂が1番

に向かっているのを確認し叫ぶ。

いつも通り口を複製して障子も言葉を発して瀬呂に注目していた。そしてテープを伸ばして移動する瀬呂は調子に乗っていたのか、上機嫌になって口を開く。

「ちよーつと今回ばかりは俺にうってつけ過ぎ…」

ドガボガボゴバガボゴオオオン!!

「…るうううう!?!」

瀬呂の真下からとてつもない轟音が鳴り響き、瀬呂が下を向くと、頭と両腕を前に突き出した破巖が恐ろしいスピードで瓦礫を横に吹き飛ばしながら重機関車の様に走っているではないか。そのスピードは間違いなくトップクラスで、瀬呂と首位争いをしていた煉黒を追い抜こうとしていた。

瀬呂や煉黒達移動方法は、跳躍などによる加速と減速を繰り返す事でノンストップに動いているが、結局ペースを上げるのには地形に依存してしまうものだし、飯田は常に得意分野である直線を移動できず、瀬呂に至ってはテープの射出時間という、中々無視できないタイムラグが存在する。対して破巖の移動方法は、瓦礫を吹き飛ばして一切の減速をせずにトップスピードを維持する方法。1度でも並ばればそこからペースアップしない限り追い抜かれるのは明らか。

「フィニーーーッシュー!」

オールマイトは叫び1組目の競争は無事終了した。

1位は破巖が大きく突き放しての勝利となり、惜しくも終盤で足を踏み外してしまった緑谷は最下位となってしまうゴール地点の集合場所で倒れていた。

よって順位結果は破巖、瀬呂、煉黒、飯田、芦戸、緑谷となっていた。

1位の破巖は『助けてくれてありがとう』と書かれた襷をオールマイトから貰い画風のヤバイヤツが画風のヤバイヤツに助けてくれてありがとうと言われるのを想像したあなたは悪くない、オールマイトが口を開いた。

「二番は破巖少年だったが、皆入学時より個性の使い方に幅が出てき

たぞ!!この調子で中間テスト、及び期末テストへ向け準備を始めくれ!!」

「そっか、もうすぐ中間と期末も控えてるのか」

「オールマイトの言葉に緑谷は立ち上がりながら呟いていた。

そして次の宇覇・ウヴァコンビ、ドレミー、障子、爆豪、轟の5人組の番。ここも機動力や汎用性の高い個性のメンバーになる。

「さて、ウヴァ。俺達はどっちもゴールしないとダメらしいから策を練ってみたんだ……」

「ほう? どうするんだ?」

「ま、どちらにせよ今回使うのはプトティラコンボかな!」

《left》キン! 《left》

キン!

キン!

《left》プテラ! 《left》

トリケラ!

ティラノ!

プットツティラノザウルツス!

「ハアアアア!!」

「スタート!」

「凍れツ!!」

宇覇のプトティラコンボの頭部にある『エターナルフィン』の擬似凍結効果により、ゴール地点の方角の地面が全て凍り、スケート場のようになる。

「成程な……ふんっ!」

ウヴァは足の爪を器用に地面に引っ掛けさせてスピードスケーターの様に滑る。途中の障害物は蹴り砕くか飛び上がって回避している。

「さて、俺もっど!」

宇覇はエターナルフィンを羽ばたかせて空を飛び、メダガブリュー

のバズーカモードでウヴァの進行ルートにある大きな障害物に狙いを絞って吹き飛ばしてサポートする。

「ごきげんよう宇霸さん。では……お先に失礼します!」

ウヴァに轟と障子は地上中心に動き、爆豪、ドレミー、宇霸は空中で移動する。レースはどんどんヒートアップしていき、最後には宇霸・ウヴァコンビ、ドレミー、爆豪、轟、障子の順にゴールインした。

ヒーロー基礎学も終わり、生徒達はコスチュームから制服に着替えるべく更衣室で服を着替えていた時の事だった。

「久々の授業汗かいた☆」

「俺、機動力課題だわ」

「情報収集で補うしかないな」

「それだと後手に回んだよな……お前や瀬呂、宇霸とかが羨ましいぜ」服を着替えながら男子生徒達は反省点を述べて話し合っている最中、峰田が近くに居る緑谷に向かって手招きしながら突然叫ぶ。

「おい緑谷!!ヤベエ事が発覚した!!こつちや来い!!」

「ん?」

若干興奮気味なテンションの峰田に上着を脱いでいた緑谷は振り返ると、峰田は壁に貼られていたチラシを捲る。そこには壁に工具が何かで開けた小さな穴があった。

「見ろよこの穴、ショーシャンク!!恐らく諸先輩方が頑張ったんだろう!!隣はそうさ!わかるだろう!?女子更衣室!!」

覗きと言う行為は学生の醍醐味だと言わんばかりに興奮する峰田の言葉に砂藤、瀬呂、上鳴がピクツと反応する。

だが委員長として、真面目な飯田は止めに入る。

「峰田くんやめたまえ!!覗きは立派なハンザイ行為だ!」

手首をスナップさせながら飯田は止めるが、言葉だけでは通用せず峰田はチラシを剥がし、その興奮がエスカレートしていき、息は荒くなり、涎を垂らしながら覗き込もうとする。

「オイラのリトルミネタはもう立派なバンザイ行為なんだよオオ!!八百万のヤオヨロツパイ!!芦戸の腰つき!!葉隠の浮かぶ下着!!麗日の

うららかボデイ!!ドレミーちゃんの漠発ボデイ!!蛙吹の意外おつ  
ぱアアアア!」

峰田が急に驚いて腰を抜かしていると、コロコロと血走った目玉が  
穴から転がって落ちた。

続けざまにメモが押し込まれ、ひらりと落ちる。

「んーっと、ドレミーが書いたのか?……あなたを詐欺罪と器物損壊  
罪で訴えます……あっ」

今日もドレミーのおふざけは絶好調である。

## 通りすがりとプトキリバ

会議室で雄英教師が頭を抱えていた。

教師達が頭を抱える問題となっていたのは、分倍河原 宇覇の期末試験についてだ。急遽、実技試験の内容をOPtの単独討伐から、教師との戦闘にチェンジしたのだが、問題児4人組こと破巖、甘夢、煉黒、分倍河原の4人のうち、破巖が切島・砂藤コンビと同様の理由でセメントス、甘夢がアイテムキラートとして13号、煉黒が単純なパワー勝負でオールマイトになったのだが、宇覇だけの確な相手がいない。

その主な原因はプトティラコンボ。

ウヴァは戦わせない前提かつ、宇覇がプトティラコンボも使って教師と戦うでしょう。根津校長によってこう結論づけられた。

イレイザーヘッド：抹消無効、捕縛武器を無視してエクスターナルフィンによる凍結でフィニッシュ。

プレゼント・マイク：音波攻撃を無視して突撃。或いは遠距離から音波の来る方角へ向けてエクスターナルフィンによる凍結で無力化。

13号：ブラックホールを貫通してエクスターナルフィンでフィニッシュ。

ミッドナイト：鞭と個性の眠り香の届かない距離からエクスターナルフィンで無力化。

エクトプラズム：分身をメダガブリューの個性消し効果により、掠るだけで即死させてくる。適切な相手かと言われると微妙。そもそもガタキリバの劣化。

パワーローダー：エクスターナルフィンで空を飛ばれて無視される。

セメントス：パワーに任せたゴリ押しで負ける。持久戦も圧倒的すぎるセルメダルで燃費もクソもない。

スナイプ：数が多すぎるかつ、一体一体が強いため処理が間に合わない。1度でも見つければ一瞬で情報共有、プトティラのエクスターナルフィンで拘束される。

ブラドキング：多対一の時点で不利。そして得意の拘束も分身の解除で脱出される。

オールマイト：2連戦はともかく、流石に3連戦は制限時間的に難しいし、ワンフォーオールありきの怪力なのでメダガブリューでマツスルフォームを無力化。最悪トウルーフォームが生徒達にバレるので論外。

根津校長：ルート構築が無理ゲー。進行ルートを塞いでも分身やプロテイルの汎用性が高すぎてルートを絞れない。

ここまでメタられると、複数の教師を同時に戦わせて組み合わせるのもあまり効果がない。

教師達がどうしたものかと一斉に溜息をつくとき、一人の男がドアを開けて入ってきた。

「？ ちょっと、今は会議中だから関係者以外は立ち入り禁止……侵入者!」

ミッドナイトが知らない人物が入ってきた事で携帯していた鞭を構えて拘束しようとするが、男に片手で鞭を掴まれて止められる。

「その分倍河原 宇霸っていう奴のテスト、俺が引き受けよう。どうやらこの世界で俺に与えられた最初の役割はそれみたいだからな……」

「……君は誰なんだい？」

オールマイトの問いに、男はこう答えた。

「通りすがりの仮面……いや、プロヒーローだ。覚えておけ!」

演習試験当日、演習場には相澤先生を初めとする雄英の教師陣達が横一列に並んでいた。

相澤先生は、教師陣と対峙する形で並んでいたA組に忠告をする。

「それじゃあ、これから演習試験を始めていく」

「この試験でも勿論赤点はある。林間合宿行きてえならみつともねえへマはするなよ」

「先生多いな…?」

「5…6…8人?」

耳郎がやたら多い教師の人数にふと疑問を抱き、葉隠が教師陣の人数を数える。

「諸君なら事前に情報仕入れて何するか薄々分かつてると思うが…」

「入試みてえなロボ無双だろ!!」

「花火ツ！カレーツ！まつりー!!」

上鳴と芦戸が騒ぎ出す。そんな中、根津校長が爆弾を落とした。

「残念!!諸事情あつて今回から内容を変更しちゃうのさ!」

相澤先生の捕縛武器の中から根津校長が現れて宣言した。

上鳴と芦戸が固まった。中身を知っている3人以外のメンバーも固まった。

「何故かと言うとね…敵活性化の恐れのある社会情勢故に、これからは対人戦闘とその活動を見据えた、より実戦に近い教えを重視するのさ!という訳で諸君らにはこれから、二人一組でここにいる教師一人と戦闘を行ってもらおう! ただし! 破巖君、甘夢君、煉黒君、分倍河原君は単独で戦ってもらおうよ!」

「それで、ペアの組と対戦する教師は既に決定済み。動きの傾向や成績、親密度…その他諸々を踏まえてこっちの独断で組ませて貰ったから発表していくぞ」

相澤先生は次々とペアを発表していく。

対戦相手表

・イレイザーヘッドVS轟・八百万

・オールマイトVS爆豪・緑谷

・根津校長VS 芦戸・上鳴

・13号VS青山・麗日

・プレゼントマイクVS耳郎・ウヴァ（人数合わせの助っ人）



- ・ エクトプラズムVS蛙吹・常闇
- ・ ミッドナイトVS瀬呂・峰田
- ・ スナイプVS障子・葉隠
- ・ セメントスVS切島・砂藤
- ・ パワーローダーVS飯田・尾白

「それで、この中にいない4人のうち、分倍河原以外は他の待機者とは別の部屋で待機だ。教師の戦い方を見て対策……とかはさせねえぞ。それで、分倍河原は学校の外部からプロヒーローを呼んできた。そいつは出番になったら来るぞ」

「？ ……分かりました」

(外部からのプロヒーロー……一体何者なんでしょうか?)

分倍河原の試験は初戦になっており、これだけは別室にいるドレミー達も観戦するのを許された。

「宇覇さんの相手をするプロヒーロー……オールマイト以外となると……うーん……ダメです。全く思いつきません」

「まあ宇覇との1対1をするぐらいだからかなり強いのは確実だよね……」

「案外似たような奴かもしれないぜ？ 俺の予想は宇覇を一方的に翻弄できそうな奴かな！」

ドレミーと煉黒は未知数な試験相手を予想するも、全く思いつかず、破巖は凶らずも正答を当てていた……

#### ◆◆◆試験会場◆◆◆

「……さて、相手の実力は未知数。フォーゼか、鎧武か……それともWか……ん？」

宇覇が首を鳴らしながら、自分の相手をするプロヒーロー候補を予想していたが、宇覇の予想は大きく外れる。

「お前が分倍河原 宇覇か。俺は門矢 士……どうやらお前の試験相手のようだ」

「はあ……よりにもよって相手が世界の破壊者かよ……なら、全力で行く！」

「俺を知っている様だな。なら話は早い。……変身！」

KAMEN RIDE DECADE

士の身体を黒と白のアーマーが覆い、10枚程の板のようなものが頭に取り付けられ、ピンク……いやマゼンタを基調とし、黒と白のX字の装飾が胸に張り付き、仮面ライダーディケイドとなる。

「まずはお前の持っているアドバンテージを潰す」

ATTACK RIDE ILLUSION

ディケイドがライドブッカーからカードを取り出し、ネオディケイドドライバに挿し込むと、ディケイドが6人に分身し、更にディケイドがカードを取り出す。

KAMEN RIDE WIZARD

6人のウィザードディケイドはフォームライドでフレイムドラゴンフォームチェンジしてからアタックライドのドラゴタイマーで更に24人に増えて、更に……

『流石にこれの先はお前じゃどうやっても勝てないだろうから、これで最後にしてやる』

KAMEN RIDE OOO

FORM RIDE GATAKILIBA

士はなんと24人のガタキリバディケイドになり、1200人のガタキリバディケイドの分身を作り出すというとんでもない暴挙をしてきた。

1200人。ただの一般人なら全力の宇覇の敵ではないだろう。だが、相手は歴戦の戦士ディケイド。それが1200人など、勝ち目なんてものは存在しない。

「なんちゅう暴挙してんだか……でも、諦める訳にはいかねえんだ！

変身ッ！」

宇覇はブレンチシエイドで今出せる最大数である、200体の分身

を出して合計9枚の恐竜メダルを2体の分身に使わせ、自身も恐竜メダルをオーズドライブバーに嵌め込む。

《left》キン！《／left》

キン！

キン！

《left》プテラ！《／left》

トリケラ！

ティラノ！

プットツティラノザウルツス！

プトティラオーズが三体、ガタキリバオーズが200体。プトティラオーズがガタキリバディケイドを一人300人で担当しても不利なままである。カフスによる拘束は数が多すぎてカフスが足りない。戦わなければ勝利は約束されない。

それでもヒーローなら立ち向かわねばならない。

『『『さあ……来い！』』』』

両者が突っ込み、乱闘が巻き起こってガタキリバの津波同士がぶつかる。第三者がガタキリバディケイドとガタキリバオーズを判別するのは最早不可能であり、戦っている本人達しか分からない。

『やつべえ、押されてる!!』

強いとはいえ卵は卵。数多の世界を巡り、破壊してきたディケイドには経験も、知識も、実力も、得意分野である数でも負けている。プトティラオーズの援護があるとはいえ多勢に無勢。

『お前の力はその程度か？ ……ふん!』

『ああもう！ 硬すぎるんだよ！ ……こんにやるオ!!』

三体のプトティラオーズは盤面をひっくり返す為に自身の体内にあるセルメダルの大半を使い、今出せる最大火力でのグラウンド・オブ・レイジを使って一気に500人のガタキリバディケイドを倒す。

「ハア、ハア、ハア………こんだけやってまだ半分も削れてないのかよ………」

宇覇は数体のガタキリバオーズを分解してプトティラオーズのセ

ルメダルを補給する。

「まだ試験は終わっていないぞ」

FINAL ATTACK RIDE G A G A G A G A T  
AKILIBA

ガタキリバディケイドは残った約700人でガタキリバキックを放つ。セルメダルの補給も不完全で、疲労も溜まっている宇覇は避けられずに直撃して墜落してしまう。

一瞬意識を刈り取られた為、制御出来なくなったプトティラコンボも解除されてガタキリバオーズに戻ってしまう。

「ぐ……う……負ける、ものか……俺は……仮面ライダーだ！」

「……」

一体のガタキリバディケイドが通常のディケイドに戻り、今度こそトドメを刺そうとする。

FINAL ATTACK RIDE DE DE DE DE C  
ADE

ディケイドのディメンションキックが宇覇の目前に迫る。その時、不思議な事が起こった。

絶対に負けないッ!!

「なっ?」

突如宇覇の胸にあるオーラリングサークルからおびただしい量のセルメダルと虫系コアメダルが吹き出して、ディケイドのディメンションキックを弾いてディケイドを吹き飛ばす。

「……うおああああああああああああああ!!!」

宇覇が雄叫びをあげて、今までプトティラコンボに変身しても1度も出なかつたコンボの膨大なエネルギーの奔流が放たれ、周りにいたガタキリバディケイドまで吹き飛ばす。

「……チッ、俺の欲望にも少なからず反応して増えたか」

コアメダルは最大まで増えた宇覇の出した恐ろしい程の欲望がトリガーだったが、セルメダルは少なからずガタキリバディケイドの欲望で増えているだろう。今やフィールドはセルメダルそのものである

り、上も下も横も、どこを向いてもセルメダルに覆われている。

「俺の……勝ちです！」

「……ほう？　合格だ、この世界の仮面ライダー。だが、試験を終わらせねえとな？」

宇覇は勝ちを確信し、セルメダルとコアメダルから、最早数えるのは不可能な程の人数でブレンチシェイドを発動。未だにセルメダルとコアメダルは増え続けており、一瞬でガタキリバディケイドの1200人を超えてしまった。

これぞ数の暴力。これぞ最適解。これぞ……予算の破壊者、仮面ライダーガタキリバの誕生である。

雄英の予算を破壊し、ディケイドのカード枚数という予算を凌駕し……今、最強のコンボが完成した。

「この場の全てが俺自身だ……ぬんっ！」

「さて、俺も本気を出すとするか」

K A M E N   R I D E   K A B U T O

C l o c k   U p

戦いは膠着状態に陥った。ガタキリバディケイドの対応力の高さ  
と数、宇覇の無尽蔵となった体力と闘志が拮抗しており、ある時はセル  
バーストの爆発をムテキゲーマーで防ぎ、ある時はセルメダルによる  
拘束をドライブの重加速で避け、ある時はキャストオフで仮面ライ  
ダーガタキリバの集団を吹き飛ばし、ある時はミラーワールドに引き  
ずり込んで戦った。

「知ってますか先輩。仮面ライダーって、後輩になるほど強くなるん  
ですよ……」

スキャンニングチャージ！  
スキャンニングチャージ！  
スキャンニングチャージ！  
スキャンニングチャージ！

「そうか。なら俺も、先輩として負ける訳にはいかないな」

FINAL ATTACK RIDE DE DE DE DEC  
ADE

宇覇のガタキリバキックとデイケイドのデイメンションキックが  
ぶつかり合い……

「ハア、ハア、ハア……合格だ……」

カメンライドとフォームライド、そしてアタックライドの連続使用  
による反動で遂に変身を解除した士は合格通知を出して、宇覇も反動  
で倒れる。

この戦いは引き分けとなり、デイケイドが合格宣言をしたため、宇  
覇は林間合宿へ行くことが許された……

## コラボも暴れるガタキリバ 仮面ライダーオーズと仮面ライダーガタキリバ

「…………ぐ、うう…………」

宇覇は期末試験の後倒れてしまい、その後なかなか目覚めなかった。

幸いにも夏休みの1日前が期末試験だったのでそこまで遅れは無かった。

「…………は…………」

宇覇が目覚めて起きると、そこは自分の住んでいるアパート、まぎよう摩鏡にある自分の部屋である203号室だった。宇覇が起き上がろうとすると、ドアが開かれる。

「起きたか。遅いぞ、この世界の仮面ライダー」

「大丈夫か、宇覇。どこか異常は感じないか？」

「ウヴァに……………デイケイド!？」

ドアの先には、グリード体のウヴァと、管理人のような服装の門矢士がいた。

「士と呼べ。どうやらここは歪な世界のようなだから……………仮面ライダーにはいるにはいるが、皆何らかの力を失っている……………フォーゼと鎧武はそこまでだが、Wが特に歪だな。俺はオーロラカーテンを別世界に繋げようとする、上手く操作できん。何らかの力が俺達仮面ライダーをこの世界に留まらせているようだ。どうやら歪みを治すまでは、この世界に入ることは出来ても、出ることは出来ない。この問題を解決するまでは協力関係を結ぼう。お前は経験を得られて損はないはずだぞ?」

「…………まあ、いいよ。ライダーは助け合いつて言うし…………」

「宇覇、そろそろこのイラつく身体を何とかしてくれ。お前の分身が俺から外されてそのまま……………ん?」

ウヴァが宇覇に分身体を出させようとして、いきなり硬直する。

「? どうしたんだウヴァ」

「ありえない……外からセルメダルの増える音がしたぞ!! しかも  
タツプリと溜め込んでいる奴だ!」

「……なんだって?」

この世界でセルメダルを増やせるのは宇覇ただひとり。今までウ  
ヴァがセルメダルの増える音を察知していなかったから屑ヤミーす  
ら一匹たりともいなかった。ヤミーを生み出せるグリードも、ドレ  
ミーのチェックによりウヴァを除いて存在していない事が判明して  
いる。

だが、ここにきていきなりヤミーが出現するなど……いや、出現  
させる方法ならあるではないか。

「……鳴滝のオーロラカーテン」

そう。デイケイドの世界に存在するオーロラカーテンならヤミー  
を送る芸当など簡単だ。そしてデイケイドの追跡に全てを賭ける程  
しつこい鳴滝ならやりかねない。仮面ライダーでない鳴滝なら出入  
りも容易だろう。

「ウヴァ、ヤミーの位置は特定できそう?」

「少し待て………よし、東京湾の近くだ」

「土さん。オーロラカーテンを東京湾に繋げられる?」

「問題ない………ったく、相も変わらず面倒なストーリーカード」

ウヴァがセルメダルの音響で大まかな位置を特定し、土がオーロラ  
カーテンで東京湾と摩鏡を繋ぎ、3人はオーロラカーテンをくぐる  
……

ここは宇覇達のいる世界とは少し違う世界。個性が存在するとい  
う大元は同じだが、物語の細かい部分で違いがある世界。

東京湾で1人の英雄生徒が一体の異形、ヤミーに遭遇していた。生  
徒の腰には、宇覇のオーズドライバーと全く同じ見た目の物が巻かれ  
ているが、見た目は普通なので宇覇のような異形型ではない。

「オーズ、ウヴァの為にコアメダルを渡せ……! なんでもいいが、出



来れば虫系が望ましい……！」

「カマキリのヤミー!? USJで倒したのに！」

「映司! このヤミー、この前出てきた敵オーズのヤミーじゃねえぞ!」

腕だけの異形が映司と呼ばれている生徒に、今までのヤミーとは違うと警告をする。

「アंक、メダル!」

「先ずはタトバコンボで様子見しろ。このヤミー、かなりセルメダルを溜め込んでるようだ……！」

腕だけの異形、アंकがコアメダルの入ったケースを体内から取り出して、赤いタカのマークのメダル、黄色いトラのマークのメダル、そしてバツタメダルを映司に向けて投げる。

それを受け取った映司はメダルをタカ、トラ、バツタの順にオーズドライバーに装填して、右側に取り付けられていたオースキャナーで読み込む。

《left》キン! 《/left》

キン!

キン!

「変身!」

《left》タカ! 《/left》

トラ!

バツタ!

タ・ト・バ! タトバ タ・ト・バ!

宇覇のとは違うコンボソングが流れ、タトバコンボに変身した映司。

「オーズ……矢張り邪魔をするのか!」

「映司、気を抜くなよ! ヤミーはセルメダルの枚数が多い程強くなる!」

「分かってるって!」

「シャアアアアア!!」

オーズとカマキリヤミーがぶつかり合うその瞬間、灰色のカーテン

のようなものが両者の目の前に現れて、2人を飲み込む。

「映司!? クソッ!」

突然の事態に驚くアंकだが、直ぐにカーテンに突っ込んでオーズを追う。

「……………」

それを木の影から1人の男性が見ていた。男の名は鳴滝。デイケイドのストーカーである。

## 仮面ライダーガタキリバ、オリジナルと邂逅

「うおつとととと……なんだったんだ……?」

「ここは……?」

オーズとカマキリヤミーはオーロラカーテンで空中から落とされ、着地しながら辺りを見回す。

「さっきと同じ東京湾……? 本当になんだったんだろう……」

「む……? おい、オーズ。どうやら俺達は平行世界に飛ばされたよ  
うだ。グリードの人数が違う。あのカーテン……一体誰が……?」

オーズは同じ東京湾と想っていたのだが、カマキリヤミーはグリードのいる位置、人数が違うことに気づいて、平行世界に飛ばされたと推測した。

2人の動きが止まっていると、オーロラカーテンが再び現れてアンクが飛び出してくる。

「映司! ……ん? ああああああああ!!?」

アンクがセルメダルの増える音を感じると、突然のたうち回り始めた。

「アンク! 大丈夫!」

「無理も無いだろう……片方のグリードが夥しい量のセルメダルを生み出し続けているのだからな」

何故か一向に攻撃してこないカマキリヤミー。どうやら困っているのは向こうの方も同じようだ。

「オーズ、ここは協力関係を結ぼう。俺はもうひとつ与えられている主人の命令をこなす為に。お前達は这个世界から脱出する為に……互いを利用するのはどうだ? 悪くない案だと思うが……」

「映司……ヤミーの言う事は信じるな……昆虫系のヤミーは特に知能が高い。騙しに来ているはずだ……!」

アンクがフラフラと浮遊しながら映司に警告する。

「うーん……」

映司の勘では、このカマキリヤミーは嘘をついている訳では無いようだ。だが、アンクの言う事にも一理ある。今までヤミーはこのよう

に自分達に対話をしなかった。騙す可能性もゼロとは言えない。

映司がどうしたものかと悩んでいると、再びオーロラカーテンが現れる。

「あ、さつきと同じカーテン……」

「まだ罠の可能性も捨てられないな……オーズ、警戒を緩めるなよ」

「クソ……ようやく収まったか……」

オーズとカマキリヤミーが脈絡無く現れたオーロラカーテンに警戒し、アंकが身体を震わせていつもの状態に戻る。

「よつと……カマキリヤミーに……オーズ!？」

「平行世界から来た……と考えるべきか」

「チツ、グリードはアंकか……まあ、カザリよりはマシか……」

「オーズが2人だと!？」

ツイラン  
「敵 オーズ……ではない?」

「……ウヴァだと? おかしい、俺とゴード以外のグリードは800年前のオーズに吸収されて消えた筈だ」

なんと、オーロラカーテンから出てきたのはガタキリバコンボのオーズ、謎の男、グリードのウヴァであった。

2人目のオーズにカマキリヤミーは驚き、映司は声で自分の世界にいるもう1人のオーズツイラン(敵 オーズと呼ばれている)では無いと感じ取り、アंकは800年前のオーズに吸収されて消えたはずのウヴァ(しかも完全体)の存在を怪しむ。

「んー、やっぱりお困り?」

「宇覇、そろそろ分身体を貸せ。いい加減完全体じゃ満たされん」

「ん、いいよウヴァ。ブレンチシエイド」

ガタキリバオーズが1体だけ分身体を出して、ウヴァは身体をメダルに分解して分身体に憑依する。

「……よし、やはりこの肉体は素晴らしい! 五感が澄み渡る!」

少し禍々しいガタキリバオーズの見た目になったウヴァは上機嫌になり、それを見たオーズ達は哑然とする。

「え、えええええ!!」

「このオーズ、かなりの手練なのか？ 我々昆虫系のメダルは負担が大きいと聞いたが……」

「……オエツ、お前を見ているとセルメダルが多すぎて酔う」

3人がそれぞれの反応を示す中、宇覇がカマキリヤミーの質問に答え、ウヴァがアंकを揶揄う。

「ああ、違うよ？ 俺のオーズって、とあるコンボの例外を除いてガタキリバコンボにしかねないんだ。変身解除も出来ないし、亜種形態も無理。分身するのにも条件があるし……まあその分ほぼ無限に分身できるし、分身するだけなら疲労もないんだけどね」

「なんだその力は……無茶苦茶ではないか!」

「なんだろう、そこまで強いとちよつと自信無くすかも……」

「ハッ！ ざまあねえなアंक。ほれ、耳栓をしてやる……つとと、そういうばお前に耳は無かったなあ!!」

「チッ！ クソツ、ようやく酔いが収まったっていうのに……」

「おい、くつちやべっていないで戻るぞ。ここじや何も出来ないだろう？」

「つと、それもそうだね士さん。おつと、自己紹介が遅れたね！ 俺は分倍河原 宇覇！ こっちは昆虫系グリードのウヴァ！ そして……うん、管理人の門矢 士さん！ えーつと、アंकは分かるんだけど、君の名前は？」

変身を解除したオーズは自分の名前を告げる。

「映司、火野 映司だよ!」

「……映司!」

「……火野 映司だと?」

「ほう……火野 映司か……」

この世界の住人となっている3人はその名前に驚く。

平行世界のオーズの正体は、なんと火野 映司……仮面ライダーオーズの主人公そのものであった。

## 情報交換でガタキリバ

オーロラカーテンで摩鏡に戻った宇覇達は、早速情報交換をしていた。

隣では人型になったウヴァとアंकが互いのセルメダルを賭けに使ってポーカーをしている。

カマキリヤミーは宇覇の出した大量のコアメダルを見て、驚きのあまり気絶してしまった。

そして、土は調べ事と言って何処かに向かってしまった。

「んー、同じ年なら映司で構わないよな？ あ、一つ質問するぞ」

「うん、映司でいいよ。それで、質問って？」

「……あー、映司は転生って信じる？」

「！」

宇覇の質問に身体をビクリとさせる映司。宇覇はその反応を見て確信した。

そのまま宇覇はアंकにもカマをかける。

「うん、俺も転生者だよ。あ、もしかしてアंकも知ってる感じ？」

「ぐおおおお!! ブタだとお!!」

「ハッ！ 相変わらずだなウヴァ……ん？ 何言ってるんだ」「タジヤドルエタニテイ。アंकが映司の身体を借りて変身したタジヤドルコンボ……」……！ なんてそれを知ってるんだ！

「……アंक、一つ質問。映司は何回転生を経験してる？」

「そんな事聞いてなんになるんだ？ ……1度だけだ。転生がそう何度もホイホイあつてたまるか」

「成程……もう入ってきていいよドレミー」

宇覇がそう言うと、紺色の髪に、とても長いサンタのような帽子を被った少女がドアを開けて入ってくる。夏の昼なのにパジャマのような姿で暑くないのだろうか。

「はい、調べ事も終わりましたよ。全く、人遣いが荒いんですから……はい、間違いなく火野映司さん達は平行世界の住人ですね。記録が全く無いので転移したと考えるべきかと思えますよ」

「えー、だってドレミーの個性便利じゃないか。こう……グーグル先生的な！」

「人を検索エンジンみたいと言わないでください！……まあ、多少はそういう面もありますけど……あ、申し遅れました。甘夢 猯と申します。皆からはドレミーと呼ばれているので、ドレミーと呼んでくださいね？」

「うん！……もしかしてドレミーさんも……」

「はい、転生者ってやつですね。この世界はいっぱい転生者がいますよ？ 雄英生徒だけでも、私達が確認しているだけでもう1人いますし、ヴィランやヴィジランテ、そして一般人も含めるともつといるかと……」

ドレミーが説明を終えると同時に、ウヴァがボロボロに負けてアंकがウヴァのセルメダルを自分の体内に取り込もうとした瞬間に異変が起きる。

「ざまあねえなウヴァ。これで俺のセルメダルが増え……ぐう!？」

「……弾かれた？」

完全に落ち込んでいたウヴァの頭にアंकのセルメダルがぶつかって弾かれ、顔を上げて試しに倒れているアंकの出したセルメダルを体内に取り込もうとすると、やはり弾かれる。

「やめろ！……うぐう！」

ウヴァは宇覇に目線でコアメダルを1枚取り出すように言い、宇覇がカマキリコアメダルをウヴァに渡し、無理矢理ねじ込もうとするが、やはりこちらも弾かれる。

「……成程な。どうやら俺達のメダルはお前達のメダルと少し規格が違うようだ」

「あー、単二電池と単三電池の違いなの？」

「まあそれで概ね合っている筈だ。多分オーズドライバーにも互いのコアメダルが使えないだろうな」

宇覇がタトバコンボになろうとした映司にバッテリーメダルを渡して、映司のオーズドライバーに嵌めさせてみたが、メダルとドライバーのサイズは合っているのに、どうやってもメダルが嵌め込まれる部分、

メダクリスタの所にメダルが押し込めない。宇覇も映司のバツタメダルを自分のオーズドライバーに嵌めようとしたが、あと少しで嵌るところで磁石が反発するように弾かれる。

「あー、俺が他の姿になる事は一生無いのか……」

「まあ、互いのコアメダルで間違えないって事で……あはは……」

落ち込む宇覇を慰める映司。そんなやり取りをしていると、ウヴァとアंकが何かに反応する。

「おい、これは……」

「間違いない。……グリードだ」



## 錬金術師の脅威

「ウヴァ、グリードの座標は分かる？」

宇覇の雰囲気急変して、ウヴァにグリードの座標を聞く。

「問題ない、少し待ってろ…人数は…4。コアメダルの数からして、全員完全体じゃねえ…。場所は雄英付近、多分USJだな…あ？

俺がいるだと…？」

ウヴァが少し面食らっていると、宇覇が考察を始める。

「…つまり、平行世界から完全体グリードが来て、少なくともその中にもう1人のウヴァがいるって事か…ウヴァ、その中に恐竜グリードはいないよね？」

「ああ、恐竜グリード特有の気配はしない。…？おかしい、奴ら、セルメダルの数が異様に少ないぞ？ 身体を維持できる最低限しかねえ。まるで何かに襲われたかのような…」

ウヴァがグリード達の違和感で何かを考え込んでいると、ドレミーが宇宙色の渦を作り出し、雄英に繋いで擬似的なワープゲートを開き終わる。

「宇覇さん、雄英への近道は作りましたよ！ ……まだ免許持ってないので反省文も覚悟しましょう！」

「あ…まあいいか！ 映司、俺は先に行くよ！」

宇覇は倒れているカマキリヤミーを叩き起してワープゲートに飛び込む。

「……よしー」

続いて映司もワープゲートに飛び込み、姿が消える。

残ったのはウヴァとアंक、そしてゲートの操作権限を持っているドレミーの3人。

ウヴァは何かの理由でアंकを待っていて、アंकは少し入るのを渋っている。

「……あ、もしかしてビビってますか？」

「……あ？」

「仕方ないですよね、未知のゲートなんですから。ブラックホールみ

「たいで怖いですよね？」

「フン、こんなものに恐怖するとは、グリードの恥晒しめ」

「……あまりこういうのにいい思い出が無いだけだ」

ドレミーとウヴァのちよつとした挑発にも乗らずにアंकもワープゲートに入る。

2人は顔を見合わせてクスリと笑い、ワープゲートに入った。

まだ所々修理が追いついていないUSJに、ひとつのワープゲートが開く。

宇覇、カマキリヤミー、映司、アंक、ウヴァ、ドレミーの順に出てきて、ワープゲートは閉じられる。

そこでは4体のグリード、猫系のカザリ、重量系のガメル、水棲系のメズール、そして昆虫系のウヴァがやや混乱しながらもセントラル広場に集まっていた。

だが、何処かおかしい。カザリは両腕の爪が刃こぼれしていて、ガメルは角などが所々欠けており、メズールはマントがボロボロに。

ウヴァだけは目立った外傷は無いが、セルメダルが足りないのか、明らかに疲弊していて座り込んでおり、4体の中で1番満身創痍であった。

「よつと。……さて、グリード達のお出ましたな」

「……間違いなく私の主の方のウヴァだ。……貴様には話さねばならない事がある。が、その為にはウヴァ達から許可を貰わねばならない。少し待っている」

そう言つてカマキリヤミーはウヴァの下へ向かい、カマキリヤミーは跪いて何かをウヴァに話して、ウヴァが頷いた後に額に触れられて分解される。

ウヴァは他の3体にセルメダルを分けて、こちらに近づく。

『テメエが俺のヤミーを助けたこの世界のオーズだな？ ……それに、火野 映司、アंक、……そして平行世界の俺。もう1人は誰か知らんが、俺達は今、厄介な奴に追われている。……錬金術師ガラだ』『ガラだと!? 奴は王に封印された筈だ。』

アंकが驚くのは無理もない。

錬金術師ガラ。嘗てオーズを苦しめた強敵で、グリードすら圧倒する力を持っている恐るべき敵だ。

別の仮面ライダー、仮面ライダーフォーゼの乱入、仮面ライダーバースのブレストキャノン、そしてグリード達のコアメダルを総動員してようやく倒せた相手と言えればどれ程の強さか分かるだろう。

「……爬虫類系のコアメダルはある？」

『いや、少なくとも俺達の世界のオーズは変な男の出した奴の妨害が原因で負けた。……お前の言う爬虫類系コアメダルもガラの体内にある』

「そんな……爬虫類系コアメダルが無いとアレが出来ません！」

倒し方を知っている宇覇達は困った。

そのガラを倒す方法には、映司の肉体の限界も考慮すれば爬虫類系のコアメダルによるコンボは必須と言っても過言ではない。

時間さえかければ宇覇単独でも倒せるが、如何せん消耗が激しすぎるし、何より相性が悪い。

最悪、宇覇のコアメダルを取り込まれて、相手の戦力が大幅に上がってしまう。

宇覇がガラから爬虫類系コアメダルを奪い返す為の算段を考えていると、今までに見たことも無い大きさのオーロラカーテンが開かれる。

『……どうやらタイムアップみたいだな。頼んだぞオーズ！』

そう言って平行世界のウヴァ達は、近くの足場に乗り移って様子見に徹する。

『G A A A A A A A A A A A A A A A!!』

すると、オーロラカーテンから遂に怪物態のガラが出てきて、凄まじい雄叫びを上げる。

「来やがったな……！ 錬金術師ガラ：相手にとって不足なし……と言いたいけど、世界がぶっ壊されるのは困るんでね！ アンタのコアメダルを全部ぶっ壊すぐらいの覚悟でやらなきゃな！」

「宇覇さん。私はコアメダルの抜き取りと皆さんのサポートに徹しま

す！」

「……映司、どうやら奴は様々なコアメダルを取り込んでいる。タトバを軸にメダルチェンジで戦うぞ。コンボはどれかしらと相性が悪いからな」

「うん、アंक、メダル！」

「おい、宇覇。……死ぬなよ」

映司がオーズドライバーにタカ、トラ、バツタのコアメダルをはめ込み、オースキャナーで勢いよく読み込む。

《left》キン！ 《／left》

キン！

キン！

「変身！」

《left》タカ！ 《／left》

トラ！

バツタ！

タ・ト・バ！タトバ タ・ト・バ！

タトバのコンボソングが響き、戦いの火蓋が切られた！

攻めて攻めて攻めまくれ!

「ブレンチシェイド! 映司! まずは俺達が爬虫類系コアメダルつてのを奪う! 俺が奪えたらすぐに渡すからな!」

宇覇が分身を10体に増やし、映司達に作戦を伝える。

「分かった! 頼むよ宇覇君!」

『G A A A A A A A A A A A A A A A!!』

「おい宇覇。奴の外皮は俺並みかそれ以上の硬さだぞ? どうやって奪う」

宇覇、映司、ウヴァがとてつもない轟音で叫ぶ怪物態のガラに突っ込む中、1人の宇覇が即席で立てた作戦の内容を伝える。

「策ならある! ……けど、1個しかねえ! 俺とウヴァの攻撃で1箇所集中して傷つけて映司のトラクローかドレミーの道具で爬虫類系コアメダルを引っこ抜く!」

宇覇が話し終わると、一体の宇覇のオーラリングサークルから恐竜メダルが出て、昆虫コアメダルと入れ替わる。

ひとりでオースキャナーが動き、恐竜メダルを読み込む!

《left》キン! 《/left》

キン!

キン!

《left》プテラ! 《/left》

トリケラ!

ティラノ!

プットツティラノザウルツス!

「な、何それ!」

「なんだと!? 恐竜メダル!」

「じゃあ!! 気張っていくぜ!」

映司とアंक達グリードが驚いている中、全てを無に帰すプトティラコンボになった宇覇はエクスターナルフィンで飛翔する。

そのまま凍結効果でガラの脚を次々と凍らせていくが、すぐにヒビ

が入って砕かれてしまう。

「チツ、安定すると途端に弱くなるジnkクスでもあるのかよ、このコンボ!？」

ガラの外殻は宇覇のメダガブリューすら弾く圧倒的な硬度を誇り、宇覇はプトティラコンボでは歯が立たないのに危機を抱く。

「ぬん!! ……クソっ! グリードダガー!」

「ウヴァ! 合わせるぞ!」

「おう!」

「ハアツ!!」

『G A A A!』

ウヴァが2人のガタキリバコンボの宇覇と同時にワイバーンの首にあたる部分を殴る。

比較的柔らかい部分をカミソリの如き刃で斬られ、弱点を攻撃された痛みによってガラが怯み、その隙に4人の宇覇とウヴァがオーズドライバーのコアメダルをオースキャナーでスキャンする。

「いこそウヴァ!」

「ああ!」

スキャンングチャージ!

スキャンングチャージ!

スキャンングチャージ!

スキャンングチャージ!

スキャンングチャージ!

「ずおりやアアア!!!」

「ぬん!」

宇覇は最近になってウヴァとの連携技として編み出した、セルメダルとコアメダルのエネルギーを融合させて高エネルギーを相手にねじ込む大技、ガタキリバ・セルシヨックをガラの硬い胸元の外殻に打ち込まんとする。

『G U O O O O!』

ウヴァを中心に束ねられ、強大なエネルギーを纏った蹴りを胸元の外殻に打ち込むことに成功し、ヒビが入った。

「映司！ メダルチェンジだ！」

アंकが映司に向かってクワガタ、ゴリラ、チーターのコアメダルを投げ、映司はコアメダルを入れ替えて再びオースキャナーで読み込む。

《left》クワガタ！ 《/left》

ゴリラ！

チーター！

「うおおおおお!!!」

（いや、ガタゴリーターかよ!? まあ状況的に合ってるけどさ……）

映司が変身した亜種形態は何と最強の亜種形態とも噂されているガタゴリーター。

チーターレッグの健脚でガラへ駆ける映司はガラの放つ火球ブレスをクワガタホーンの電撃で地面を砕いて瓦礫を作って盾代わりにし、火球ブレスを防ぐ。

「はああああ……せいやあああ!!」

映司がゴリバゴーンを胸元目掛けて打ち付けると、ヒビの入った部分が限界を迎え、セルメダルが剥き出しになり、映司はすかさずメダルチェンジでタトバコンボに戻り2枚の爬虫類系コアメダルをガラの肉体から引っこ抜く。

「取れた! って、2枚!?!」

「マジかよ!? ドレミー、リカバリー頼む!」

「お任せ下さい! マジックアंक!」 「おい! 離せ! うおおおお!!」

夢で作った特殊な釣り竿を持ったドレミーが釣り竿を振りかぶって先端をガラの胸部に向けて飛ばす。よく見ると先端にはアंकの腕らしきもの……というかアंक本人が突き刺さっていた。どこかで見たとような光景である。

「おい! 取れたぞ!」

「く、うう……抜けないです!」

ドレミーが力いっぱいリールを巻くが、傷のふさがりが予想以上に早く、アंकの腕が引つかかってしまつて抜けない。

「世話の焼ける奴だ！ フンツ！」

「助かります、ウヴァさん！」

ウヴァがアंकを鷲掴みにして無理やり引っこ抜き、フンと鼻を鳴らす。

「映司！ 早速コレ使うぞ！」

アंकが最後の爬虫類系コアメダル、コブラコアメダルを投げた瞬間……！

『G A A A A A A A A A A A A A A A!!』

「ぐうっ！ ……しまった！ ケースが！」

ガラの首を使ったなぎ払いが直撃したアंकはその拍子にメダルケースを外に放り出してしまい、昆虫系、猫系、重量系、水棲系の全てのコアメダルがガラに取り込まれてしまう。

『G U O O O O ! ? …… G A A A A A A A A A A A A A A A!!』

「おいおい嘘だろ……！！」

「困りましたね……更にパワーアップしちゃいました……！」

ガラは少し苦しみはしたものの、すぐに持ち直して今までの比ではない咆哮で周囲を威圧する。

突然の逆転に狼狽える宇覇とドレミーだが、そこに希望のメダルが投げられる。

『オーズ！』

何と原作のウヴァが自らの昆虫系コアメダルを映司に投げ、使えと言った。

「……ありがとう！ 変身！」

《left》キンツ！ 《/left》

キンツ！

キンツ！

《left》クワガタ！ 《/left》

カマキリ！

バッタ！

ガクタツ！ガタガタキリツバ！ガタキリバ！



『おい、オーズ。お前が今変身できるコンボの数は幾つだ』

「えっと、今のタトバと試してない爬虫類系も含めて4つだけど…一体何をすればいいんだ!？」

『よし、8体に分身しろ』

「わ、分かった……」

ウヴァの言われる通りに8人に分身する映司。その瞬間、他の原作グリードからもコアメダルを投げ渡される。

『オーズ!』

カザリがぶつきらぼうにラトラーターに必要な分のコアメダルを投げ…

『オーズの坊や!』

『オーズ! たのんだぞ!』

ガメルとメズールもそれに続いてサゴーズとシャウタに必要な分のコアメダルを映司に投げ渡す。

「映司!」

最後にアंकが鳥系と節足動物のコアメダルを投げ、現状使える全てのコンボに必要なメダルが揃った。

「! 映司! 今なれる全部のコンボに変身しろ! 爬虫類系コンボがあるなら耐えられるはずだ!」

「……分かった!」

それぞれのガタキリバオーズがコアメダルを入れ替え、次々とオースキャナーで読み込む。

《left》キンツ! 《/left》

キンツ!

キンツ!

《left》キンツ! 《/left》

キンツ!

キンツ!

《left》キンツ! 《/left》

キンツ!

キンツ!



## 反撃の時、そしてお別れ

変身する際に飛び出るオーメダルの形をした、それぞれ違うエネルギー状の輪が8人のオーズの前に展開される！

《left》クワガタ！《left》

カマキリ！

バッタ！

ガク！ガタガタ・キリツバ・ガタキリバ！

《left》ライオン！《left》

トラ！

チーター！

ラタ・ラタ・ラトラアータアー！

《left》サイ！《left》

ゴリラ！

ゾウ！

サ・ゴーズ……サ・ゴーズオツ！

《left》タカ！《left》

クジャク！

コンドル！

タ〜ジャ〜ドルウ〜！

《left》ムカデ！《left》

ハチ！

アリ！

ムカチリー！チリツチリツ！ムカチリー！チリツチリツ！

《left》シャチ！《left》

ウナギ！

タコ！

シャ・シャ・シャウタ！シャ・シャ・シャウタ！

《left》コブラ！《left》

カメ！

ワニ!

ブラカ〜ワニ!

《left》タカ! 《/left》

トラ!

バッタ!

タ・ト・バ! タトバ タ・ト・バ!

壮大なコンボソングのオーケストラが轟き、8人のオーズが並ぶ。並んできたガタキリバ宇覇がタトバ映司と目を合わせて頷き、そこにドレミーとウヴァも並び、遂に反撃の時が始まる!

「……俺…いや、俺達、ようやく参上!!」

「モモタロスさん、それ違わないけど違います……少なくとも今言うセリフじゃないです……」

何故か赤い複眼となっている宇覇? が全く人違いのライダーのポーズをとり、ドレミーがツツコミを入れる。

「うるせえな! ……というかどっちなのかハッキリしろよ!」っておい! なんてイマジンが俺の中に入ってるんだよ!」だアー!! とにかく俺は最初からクライマックスだ! 行くぜ行くぜ行くぜ!!」

「……おい、何で宇覇の中にイマジン、それもモモタロスが入っているんだ?」

「アネブさんやジークさんにきつく言っておいたのに……はああああ……色々と終わったら後で説明しますので……」

プトティラコンボの宇覇がガタキリバコンボの宇覇? を揺すり、何とかして『中身』を追い出そうとするが、全く効果は無く、宇覇? はカマキリソードを逆手ではなく普通に持ち、雄叫びを上げながら突っ込む。

それを見てウヴァがドレミーに質問するが、彼女は頭を抱えて唸っている。何か話していなかった事があったのだろうか。

「オーズ! とにかく俺達もいくぞー!」

「うん!」

ウヴァの声掛けでハツとした映司ズは8つのコンボの暴威を遺憾無く発揮していく。

「ラトラーターとタジャドルとシャウタはそのまま攪乱！ サゴーズは宇覇君達の作った罅を狙って！ブラカワニはアंकとドレミーちゃんのフォローー！ タトバとムカチリは遊撃を頼むよ！」

流石に8つのコンボの同時行使は厳しいのか、ガタキリバ映司が司令塔となつて戦うスタイルを採っている。

「お、虫野郎じゃねえか！ おりゃあ！」

「グ……貴様！ 何故俺と同じ事をする！」

「うるせえ！ お前が俺の真似をしてるんだろぅが！」

「ええい！ こうなつたら俺とお前のどっちが戦えるか勝負だ！」

「上等だ……行くぜ行くぜ行くぜー!!」

M覇はウヴァと波長が少し合うのか、即席にしては上々な連携をしてガラにどんどんダメージを与えていく。

だが、本来の倍近くコアメダルを吸収したガラは予想以上にタフで、これだけの戦力を持ってしても、なかなか決定打を与えられずにいる。

「くそつ……どうやったらこいつを倒せるんだ……!?!」

「すみません宇覇さん、助っ人を呼んできます！」

ドレミーはそう言つて宇宙色の渦を展開してその中に入る。

「……！ 宇覇君！ あそこを狙えば勝てるかもしれない！」

その直後にガタキリバ映司が指さした先には、サゴーズが傷つけた頭部の一際大きな罅があった。

確かにそこを一点集中で攻めれば勝機はあるかもしれない。

「連れてきましたよ！」

「もう大丈夫！ 何故かつて!? わーたーしーがく!?」

「その声はー!」

「助けに来たツ!!」

「「オールマイト!!」」

「H A H A H A ! 分倍河原少年！ そして甘夢少女！ お困りのようだね！ 反省文は減らせないけど、君たちの助けにはなれるよ！ とうっ！」

オールマイトはそう言いながらガラへ向かつて跳躍し、渾身の力を

込めて拳を握る！

そしてそれと同時にサゴーズ映司がオースキヤナーを握り、コアメダルを読み込む！

スキヤニングチャージ！

「はあああああ……セイヤアアアア!!」

「DETROIT……SMASH!」

『GAAAAAAAAAAAAAAAA!』

必殺の一撃がガラの胸部の罅に食らいつき、瞬く間に罅は全身に広がり、ガラは大きな隙を晒してしまう。

「私は他の教師を呼んでくる！あとは頼んだぜ少女！」

オールマイトはもう活動限界間近なのだろう。そのままバックステップで下がり、USJを出す。

「隙を晒した今がチャンスだ！　いくよ！」

ガタキリバ映司の号令に映司達はこれを好機と見て、一斉に必殺技を決めにかかる。

スキヤニングチャージ！

スキヤニングチャージ！

スキヤニングチャージ！

スキヤニングチャージ！

スキヤニングチャージ！

スキヤニングチャージ！

「必殺！　俺の必殺技、ガタキリババージョンツ!!」

「再現には苦労しましたが、これで終わりです！　ドリームブレストカノン！」

「……フン」スキヤニングチャージ！

『G U O O O O !!』

ラトラーター映司のガツシユクロスがガラの脚部を切り裂き、タジヤドル映司のプロミネンスドロップとシャウタ映司のオクトバニツシユがガラの背中の外殻にトドメを刺し、ブラカワニ映司ワーニ







1日後……

「さて、分倍河原、甘夢。……お前らには反省文10枚な」

「ひいひいひい!!!」

「あらあら……まあ、ヒーローらしい事が出来ましたし、甘んじて書きましようか……」

相澤先生の宣告に悲鳴をあげる宇覇と、それをクスリと笑うドレミーだった。

## 林間合宿でもガタキリバ 時を駆ける列車、緊急停止

とあるBARにて、死柄木、黒霧、そしてサングラスを掛けた男、義爛が集まっていた。

「さすが先生だ。どんなに調べても分からなかった奴らの目的地をこ  
うもたやすく見つけてくれた」

「彼らを待機させていた甲斐がありましたね……」

義爛が手に持っていたスマホをポケットに入れてニヤリとしなが  
ら死柄木に話し始める。

「……組合から連絡が来た。明日の朝までに届けるそうだ。急ごしら  
えなんで見てください。ちと悪いが品質は保証するつてよ。なあ死柄木  
さん。組合があんたの無茶な要求をのんだ理由がわかるかい？ 皆  
あんたに期待してるのさ。敵連合が活気づけば闇の中で燻ってる連  
中が動き出す。そうなりや俺らみたいなのがたちもおこぼれに預  
かれる……つてね」

「目的地に手駒。相手の戦力に対して少々不安ではあるが獲物が揃っ  
た。なら……ゲームスタートだ」

成長をし続ける悪意が牙を研いで、戦いの時を待つ……

同日の夜…宇覇がまだ目覚めていない頃、摩鏡付近に虹色のワーム  
ホールが開かれる。

そこから近未来の外観をした時の列車、デンライナーが出てくる。  
だが、所々から煙を吹いており、少し旋回をして摩鏡の大きな庭に  
緊急停止した……

「一体なんの騒ぎ……つて、あら？ これはもしかして…デンライ  
ナー？」

サンタのような服装をした少女が音を察知してドアを開けて外に

出ると、彼女の記憶にある乗り物が停まっていた。

少女がデンライナーに駆け寄ると、ドアがスライドして開き、5人のイマジンが出てくる。

「ああークソ……おいクマ公！ 居眠り運転するなってあれほど言っただろ!？」

「すまんのう……つい寝てしもうた！ ……Zzz」

「寝るなよ!! ったく、オーナーも居ないってのにどうやってこれを修理すりゃいいんだア〜!?!？」

「いや、センパイだって雑な運転でやらかした事あるでしょ。……流石にここまでではないけど」

「どうしようどうしよう!?! このままじゃ僕ら二度と戻れないよ!？」

文字通り目立つ色をしているイマジン達はデンライナーの惨状に頭を抱えてしまい、忍者のようなイマジンが少女の存在に気がつく。

「むむ！ 君、危ないから離れていた方がいいぞー！」

忍者のようなイマジン、デネブが少女こと甘夢 獺。もといドレミーに離れるように促すが、ドレミーはいくつかの質問をする。

「……えっと、デネブさんでいいですよ？これって本当にデンライナーですか?？」

「！ 君、デンライナーを知ってるのか!？」

ドレミーが自分の名前とデンライナーの存在を認知している事に驚くデネブ。

「おいおデブ！ 何独り言……って、犬人間か!？」

赤い鬼のようなイマジン、モモタロスがデネブの話し相手に気がつくが、ドレミーの頭から生えているケモノミミと尻尾に反応してビビってしまう。(モモタロスは犬が苦手)

「……とりあえず、私の部屋でお茶でも飲みます?？」

微妙な空気をどうにかして打破しようとするドレミー。

それを聞いたイマジンは……

「……飲む!？」

「……あ、これデネブキャンディね。侑斗をよろしく……っっていないんだった」

## 電王と悩める人間

ドレミーの部屋で一服したイマジンズは再びデンライナーに戻り、各機器の故障を応急処置していた。

「うーん、こっちはダメ〜!」

「こりや動かせねえな……一番大事なワープゲートの心臓部がイカれちゃってる……!」

「すまない! Newデンライナーやゼロライナーとも規格が違うよううだ!」

「どうするべきだろうね……? オーナー達に連絡したけど、忙しいから数ヶ月はこのままになるみたいだよ?」

ボロボロのデンライナーに頭を抱えるイマジンズ。

それを見たドレミーが何か手伝える事が無いか探すが、どれを見ても自分にはちんぷんかんぷんで分からない機構をしている。

「私に手伝える事、何か無いですかねえ……あら?」

ドレミーの視線がモモタロスが唸っている前にある扉の先に移り、とてととと走って光るベルトを手に取る。

「……デンオウベルト」

「な!? お前電王も知ってるのか!」

ドレミーはファンとしての嬉しきでデンオウベルトを装着しようとする。

それをイマジンズが止めようとするが……

「……本当につけられちゃった!」

「と、なると……ドレミーちゃんは特異点なんだね。それにデンオウベルトが突然光った……!」

本来特異点のみに装着を許すデンオウベルトが、ドレミーの腰に装着できてしまった。

そしてデンオウベルトが光る時、ある事が起きている証拠でもある。

つまり……ドレミーは電王として戦わなければいけないのだ。

「…………ぐ、うう…………」

宇覇は期末試験の後倒れてしまい、その後なかなか目覚めなかった。

幸いにも夏休みの1日前が期末試験だったのでそこまで遅れは無かった。

「…………は…………」

宇覇が目覚めて起きると、そこは自分の住んでいるアパート、まきよう摩鏡にある自分の部屋である203号室だった。

宇覇が起き上がるうとすると、ドアが開かれる。

「起きたか…遅いぞ、この世界の仮面ライダー」

「大丈夫か、宇覇。どこか異常は感じないか？」

「ウヴァに…………デイケイド!？」

ドアの先には、グリード体のウヴァと、管理人のような服装の門矢士がいた。

「士と呼べ。どうやらここは歪な世界のようなだ…仮面ライダーはいるにはいるが、皆何らかの力を失っている…フォーゼと鎧武は力を失っている程度だが、Wが特に歪だな。俺の場合はオーロラカーテンを別世界に繋げようとすると上手く操作できん。何らかの力が俺達仮面ライダーをこの世界に留まらせているようだな…どうやら歪みを治すまでは、この世界に入ることとは出来ても、出ることは出来ない。この問題を解決するまでは協力関係を結ぼう。お前は経験を得られて損はしないはずだぞ？」

「…………まあ、いいよ。ライダーは助け合いつて言うし…………」

「宇覇、そろそろこのイラつく身体を何とかしてくれ。お前の分身が俺から外されてそのままだ…………」

ウヴァが宇覇に分身体を出させようとした瞬間、ドアが勢いよく開かれる。

「宇覇さん！ 速報ですー！」

「どうした、ドレミー。…………ん？ その後ろにいる奴らは…………」

ウヴァがドレミーの後ろにいる数名の怪人？ の正体を問う。

すると、ドレミーは少し嬉しそうに答えた。

「私も仮面ライダーになりますよ！ 電王に！」

「……………は？」

「……………なるほど、だいたい分かった」

理解が追いついていない2人と、いつも通り理解してしまった士  
だった……………

少女説明中……………

ドレミーのやや長めな説明によりようやく事態を飲み込めた2人。  
ちなみにイマジンスは自己紹介をしてきつさとデンライナーの修  
理に戻ってしまった。

「……………成程、それでいきなり電王になれるって言い出したのか」

「……………だがここにいるデイケイドの下位互「それ以上はいけないよウ  
ヴア」……………ああ」

(二度と使うか、あんな物……………)

失言をかましそうになったウヴアを宇覇が止めたが、きつかけと  
なった当の本人は二度と使う気が無いようだ。

「！ そういえば、あれから何日経ったんだ!？」

「……………3日だ」

宇覇が自分がどれだけ眠っていたのか聞き、ウヴアが3日間眠って  
いたと返す。

つまり、あの買い物には間に合わなかったという事だ。

「……………緑谷達は無事なんだよな？」

「ああ、死柄木と遭遇したらしいが、危害は加えられなかったそうだ」  
ウヴアが緑谷達の安否を伝え、宇覇はそれを聞いて安堵の息を吐  
く。

「とりあえずその改変は無かったか……………ドレミー、鍛えるぞ」  
「!? でも宇覇さんはまだ病み上がりのようなものですよ！ 少しは  
休憩を挟まないといざと言う時に……………」

ドレミーが安静にするように諫めるが、宇覇は頑なに首を縦に振ら  
ない。

そのオレンジ色の複眼には焦りの色が見えていた。

「この前轟から聞いたぞ、ドレミー。お前が荼毘…いや、燈矢を助け出したって」

「はい。確かに燈矢さんを助けましたが…まさか、開關行動隊のメンバーに変化が？」

「可能性は大いにある。そもそも無いって考える方がおかしいしな…。」

「そもそも俺は、仁義父さんが原作と同じヴィランになってないっていう最初の時点で気がつくべきだったんだよ。この世界は間違いなく原作とは全く違う世界だって…クソツ!! もっと早く気づいていれば！ あんなお気楽な動きは絶対にしてなかつたはずだ！」

宇覇は、もっと早く手を打っていればもっとより良い結末を生み出せたのでは…そんな後悔の念で床の畳を叩く。

「…抱え込みすぎですよ、宇覇さん」

「でも…「忘れてないですか？ …結局個性を手に入れたところで、私達の心はやはり人間に過ぎないという事を」…でも、今まで通りに上手くいくなんて保証はどこにも無いだろ…。」

「…ヒーローは全てを救えない。それは今までのヒーロー達が証明してしまっています。そして、人を助けるのに自分の命を平然と賭ける狂人です。…私達は、強さだけはある狂い切れていない中途半端な存在…出来ないことに手を伸ばして、できることを掴めずに後悔する…それが今の宇覇さんです」

「でもよ…諦めきれないんだよ。憧れたヒーローと同じになるのを」

ドレミーが現実を突きつけるが、宇覇の考えはそれでも変わらな

い。

「…心をねじ曲げても、そこにいるのは貴方じゃない…別の人ですよ」

「じゃあどうすればいいんだよツ!!」

「…できる範囲でやればいいんですよ。…まだ、私達は歩み始めたばかりなんですから」

ドレミーのその言葉は、宇覇の考えに深く突き刺さるのであった

⋮



何時でも強くガタキリバ

「雄英高は一学期を終え、現在夏休み期間に入っている。だがヒーローを目指す諸君に安息の日々は訪れない。この林間合宿でさらなる高みへ、プルスウルトラを目指してもらおう」

「はー!!」

相澤先生がA組全員に向かって言うと、A組は一斉に返事をする。

出発までまだ少し時間があるので、A組の生徒達は雑談（1部は猥談）をしていた。

すると、ウヴァが珍しくドレミーに話しかける。

「すまんどレミー…宇覇はまだ悩んでいるみたいだ」

「…どうしよう、宇覇さんには覚悟を決めてもらわないと困ります。私には出来ないこともあるので…」

「…俺達はより一層警戒しないといけねえからな。アイツは多分確実に狙われている」

「狙われるのは恐らく私もです…宇覇さんを守りつつ戦うとなるとかなり辛い戦いになりますね…」

物間が拳藤の手刀で堕ちているのを背景にウヴァとドレミーが話し合い、作戦を立てる。

「…が、ああでもないこうでもないとなり、時間だけが無駄に過ぎていく。」

「A組のバスはこっちだ、席順に並びたまえ!!」

飯田が指示を出すと、宇覇達はバスに乗り込んだ。

ドレミーとウヴァは作戦の提案を続ける。

バスで山道を移動していると、相澤が生徒達に声をかける。

「一時間後に一回止まる。その後はしばらく…」

「なんじやい、相澤センセ。みんな騒いどるから聞こえんで?」

破蔵のその言葉を聞いた相澤先生が席を見渡す。

破蔵の言う通り、A組の大半は騒いでいて、ほぼ黙っているのは爆豪、轟、常闇、障子の寡黙組と、珍しく宇覇の4人だった。

「…まあいい、破蔵…お前には伝えておく。まず1時間後にこのバ

スは止まる。……そして分倍河原以外はそこから徒歩で向かってもらう：それだけ覚えとけ」

「？ ……ああ、そういう事かい。ま、皆のことは任しとき！」

一瞬何を言っているのか分からなかった破巖だったが、相澤先生の意図を何となくではあるが理解し、サムズアップで応える。

恐らく、期末試験で飛び抜けた成績を残した宇覇がいると不都合な事を行うのだろう。

そしてバスに揺られる事一時間後。

A組は見晴らしのいい空き地に辿り着いた。

「休憩だー！ー！」

「おしっこおしっこ…」

全員がバスから降りる中、峰田は尿意を催していたのか股間を押さえてモジモジしていた。

バスはやや開けているが何も無い場所で止まった。

相澤が降りるように通達すると、生徒たちは疑うこと無くそれに従う。

平たく言えばそこ空き地だった。確かに景色の良い場所ではあるが、公衆トイレも何も無い。

ただ、1つあるものと言えば、普通車が一台止まっているだけだった。

「……つかここパーキングじゃなくね？」

「……B組のバスはどこだ？」

「お……おしっこ……トトトトイレは……何の目的も無くでは意味が薄いからな」

相澤はトイレを探してソワソワする峰田を見事にスルーして話を始める。

するといきなり女性の声が聞こえてくる。

「よー！ーうイレイザー!!」

「ご無沙汰しています」

相澤が頭を下げると、三人の人物がA組の前に立つ。

「煌めく眼でロックオン！」

「キュートにキャットにステインガー！」

「ワイルド・ワイルド・プッシーキャッツ!!」

猫をモチーフにしたアイドルのようなコスチュームに身を包んだ女性ヒーロー二人、そして角の生えた帽子を被った5、6歳くらいの男の子が現れる。

すると相澤が女性ヒーロー二人を紹介する。

「今回お世話になるプロヒーロー『プッシーキャッツ』の皆さんだ」

二人は、『プッシーキャッツ』と呼ばれるプロヒーローチームで、赤いコスチュームを着た黒髪ボブの女性が『マンダレイ』、水色のコスチュームを着た金髪ポニーテールの女性が『ピクシーボブ』だ。

ビシツとポーズと口上を決めたプッシーキャッツの2人、マンダレイとピクシーボブに対して、ポカンと呆けるA組の生徒。

いや、緑谷だけは興奮したように彼女等の事を口早に説明している。

緑谷曰く、彼女等は4人1組で連名事務所を構えるプロヒーロー集団『ワイルド・ワイルド・プッシーキャッツ』。山岳救助等に長け、キャリアは今年で12年。

ヒーローランキングは32位というベテランヒーロー……との事。

「ここら一体は私たちの所有地なんだけどね……あんたらの宿泊施設はあの山の麓」

「「「遠っ!!」」」

マンダレイが遠くに見える山を指差すと、生徒達は一斉にツツコミを入れる。

「え……?じゃあ何でこんな半端な所に……」

「いやいや……」

「バス……戻ろうか……な?早く……」

麗日が疑問を抱き、砂藤がまさかと言いたげな表情を浮かべて笑い、瀬呂が苦笑いを浮かべながらバスを指差す。

何かを察したのか皆が焦り始めバスに戻ろうとする。

だが…

「今は午前9時30分。早ければあ…12時前後かしらん？」

「ダメだ…おい…」

「戻ろう！」

マンダレイが言うと、切島と芦戸が絶望する。

「バスに戻れ!!早く!!」

切島は、A組を先導してバスに戻ろうとする。

だが既に遅かった。

「12時半までに辿り着けなかったキティはお昼抜きね！」

「悪いね諸君。合宿は既に始まつてるんだ。……それで分倍河原。お前はこつち」

「!? もごっつ…!!」

A組の前方にピクシーボブが現れ地面に手をつくると、土砂が盛り上がり全員が森の中に落ちていく。

破巖、ドレミー、煉黒、ウヴァ、宇覇の5人は対応してA組を助けようとして飛び降りようとするが、宇覇だけ相澤先生の捕縛布で巻き取られる。

「えっ、ちよっ!?」

「まあ予想はしてましたが、これで難易度大幅上昇なのは!？」

「おい! 何故俺はこつちなんだ!」

マンダレイは、落ちていった生徒達に向かって叫ぶ。

「私有地につき、〃個性〃の使用は自由だよ!今から3時間!自分の足で施設までおいでませ!!この…魔獣の森を抜けて!!」

マンダレイの声が響く中、A組は真下の森へと落ちていった。

「魔獣の森…!？」

「なんだそのドラクエめいた名称は…」

緑谷が口に入った土を吐き出しながら言い、上鳴がツツコミを入れる。

「雄英こういうの多すぎだろ…」

「文句言ってもしやあねえよ、行くつきやねえ」

「耐えた…オイラ耐えたぞ」

「あ、峰田さん。仮設トイレ作ったので、こっちで用を済ませてくださいね?」

指差れた先には、ドレミーによっていつの間にか作られていた仮設トイレがあった。

峰田は急いでそれに駆け足で入り、用を済ませる。

「よしおめえら、早くここ抜けて…ッ!!」

竜人形態になった破巖がそう言って森の木を通った瞬間、その木の影から巨大な化け物が出てきた。

「マジユウだー!!?」

「アカン… 爆砕拳ッ!」

それを見た上鳴と瀬呂は同時に叫び、破巖は自慢の拳でそれを打ち壊す。

「うーん、どうする? ドレミー。私はホイホイと『アレ』を使えないからネ級で行くけど、ドレキングはこの狭い林じゃ動きにくいでしょう?」

それに続いたクラスメイトが次々と土魔獣を倒す中、煉黒が心配そうにドレミーへそう言うが、ドレミーは逆に不気味な笑みを浮かべてデンオウベルト…そしてピンクカラーに塗装されたガラケーの見た目をしたアイテム、『ケータロス』を取り出す。

「ふふふ…煉黒さん、貴方達2人だけが仮面ライダーじゃないって事、教えてあげます!」

ドレミーがケータロスを腰に巻いたデンオウベルトに嵌めると、空に虹色の渦穴が空いて、そこから何とも珍妙な姿をした大剣、『デンカメンソード』が飛び出して来た。

「さあ…変身!」

ドレミーは勢い良く貸し出されたライダーパスをデンカメンソードに差し込み、変身プロセスを完了させる。

Liner Form

フォーム名がデンオウベルトによって告げられたのと同時に、渦穴から飛び出してきたデンライナーのオーラがドレミーに衝突してプ

ラットフォームが形成、それに覆い被さるようにして電仮面とアーマーが装着された。

皆足を止めて、電王になったドレミーへ支線が釘付けになっていた。

「仮面ライダー電王 ライナーフォーム……ドレミー・スイートバー ジョンですー！」

「いつの間に電王になったの!?!」

「話は後でしますので！ さあ……誰が1番早く施設に辿り着けるか競走ですよ皆さんー！」

そう言つてドレミーは宿泊施設へ向かつて駆け出す。

「じゃ、私も負ける訳にはいかないね……キャストオフ」

『CAST OFF……』

『Change Abyss Beetle!!』

「上等じゃねえかドレミーちゃんよオ……G A A A A A A A A A A A A A A A A A!!」

「お前ら……俺を置いてくんなあああああ!!!」

クラスメイトは続々とドレミーに続き、ついでに何故かあつた落とし穴へ落ちたウヴアが咆哮を上げた……

そして午後5時20分。

「やー……と来たニヤン」

プッシーキャッツの宿泊施設、『マタタビ荘』では、相澤と宇覇、マンドレイと謎の少年、そしてピクシーボブが待機していた。

A組の生徒のうち20人は、ボロボロになって施設に辿り着いた。「とりあえずお昼は抜くまでもなかったねえ」

ピクシーボブは、ヘトヘトになって戻ってきた生徒達とは対照的にニヤニヤ笑いながら言った。

「何が『三時間』ですか……」

「腹減った……死ぬ」

「悪いね、アレ私達ならって意味だから」

瀬呂と切島が弱音を吐くと、マンドレイが意地の悪い笑みを浮かべ

ながら言った。

「実力差自慢の為か……やらしいな……」

息を切らしている砂藤はマンダレイの発言に対して不満を漏らす。

「ねこねこねこ……でも正直もつとかかかると思ってた。余裕で突破すると思ってた2人以外にも私の土魔獣が思ったより簡単に攻略されちゃった。いいよ君ら……特に、その5人！ 躊躇の無さは経験値によるものかしらん？ 三年後が楽しみ！ツバつけとこー！！」

ピクシーボブは飯田、破巖、轟、爆豪、緑谷の5人を褒めると、5人に唾を飛ばし始めた。

「ふふふ……遅いですよ皆さん。さあ……待ちに待ったごはんの時間ですよー！」

「なあマンダレイさん……俺の知ってるピクシーボブと違うんやが、何かあったんか？」

「ああ、彼女焦ってるの。適齢期的なアレで」

「適齢期的なアレ……!!」

破巖がピクシーボブを指差しながらツツコミを入れマンダレイも呆れていると、瀬呂がマンダレイの発言に対して反応する。

すると緑谷が思い出したように言った。

「適齢期と言えば……もぎぎぎ!!」

「と言えはて!!」

緑谷が言い終わる前に、ピクシーボブが緑谷の顔面を掴む。

その様子をドレミーは苦笑いしながら見ていた。

すると緑谷が謎の少年を指しながら話し始める。

「ずっと気になってたんですが、その子はどなたかのお子さんですか？」

「ああ、俺も気になってた。その子誰なんですか？」

緑谷が尋ねると、上鳴も思い出したように言った。

するとマンダレイは少年に手招きをする。

「ああ違う違う。この子は私の従甥だよ、洗汰！ ホラ挨拶しな。一週間一緒に過ごすんだから……」

洗々ながらも近づいた洗汰に緑谷が近づき手を差し伸べる。

「あ、えと、僕雄英高校ヒーロー科の緑谷。よろしくね」

緑谷が自己紹介をすると、冼汰は緑谷に金的を喰らわせた。勿論耐えられなかった緑谷は気を失って倒れる。

「きゆう」

「緑谷くん!!」

緑谷が気絶すると、飯田が緑谷を心配する。

「おのれディケ…じゃなくて従甥！何故緑谷くんの陰囊を!!」

(今ディケイドって言おうとした……?)

何となくノリノリに見える飯田が聞くと、冼汰はA組の生徒達を睨みながら言い放った。

「ヒーローになりたいなんて連中とつるむ気はねえよ」

「つるむ!!?いくつだ君!!」

「謝んな冼汰!!」

冼汰が冷たく言い放ちながら去っていくと、飯田が冼汰に対して注意をする。

マンダレイは緑谷に謝るよう冼汰を叱るが、冼汰は黙って去っていく。

爆豪はそんな冼汰を見て鼻で笑う。

「マセガキ」

「お前に似てねえか？」

「あ?似てねえよっかテメエ喋ってんじゃねえぞ舐めプ野郎」

「悪い」

頭から爆発を起こした爆豪がキレる。

すると相澤がA組に指示を出す。

「くだらない茶番はいい。さっさとバスから荷物下ろせ。部屋に荷物を運んだら食堂にて夕食、その後入浴で就寝だ。本格的なスタートは明日からだ。さあ、早くしろ」

「あれ? そういや宇覇の奴、どこにいるんだ？」

「あいつならあそこにいる。しばらく考えたい事があるそうだ」

上鳴の質問に相澤が答え、クラスメイトは宇覇の事をそっとしておく事にした……



宿泊施設から少し離れた洞穴に、宇覇は崖の端に座って思考の海に潜っていた。

(……)

「……なんでお前がここにいるんだよ」

そこに洗汰が現れ、どこか上の空な宇覇に質問する。

「……なあ洗汰、俺って狂ってるか？」

「……ああ、狂ってるよ。お前だけじゃない。ヒーロー志望はみんな狂ってる」

「お前、ヒーロー嫌いなんだってな。俺の事も嫌いか？」

「……ああ」

少し気まずさがありながらも2人は話し続ける。

「俺さ、どうしようもないくらいにはヒーローに憧れちゃったんだよ……でも俺はその憧れには遠く及ばねえ不完全な蛹だ。……悪いな、聞きたくもねえ話聞かせちゃって」

「……やっぱりお前狂ってるよ。ヒーローなんかになろうとしてるんだからすげえ狂ってる」

(……ありがとな、やっぱり俺は狂ってる。ドレミーは俺達は狂いきれてない……なんて言ってたけど……結局は俺達転生者ってどこか狂ってるんだ。……あーあ、なんで俺、こんなので悩んでたんだろうな……さて、襲撃に備えて鍛えねえとな。じゃねえとぜってえ後悔する)

それを聞いた宇覇の雰囲気は、少し吹っ切れている様にも見えた……